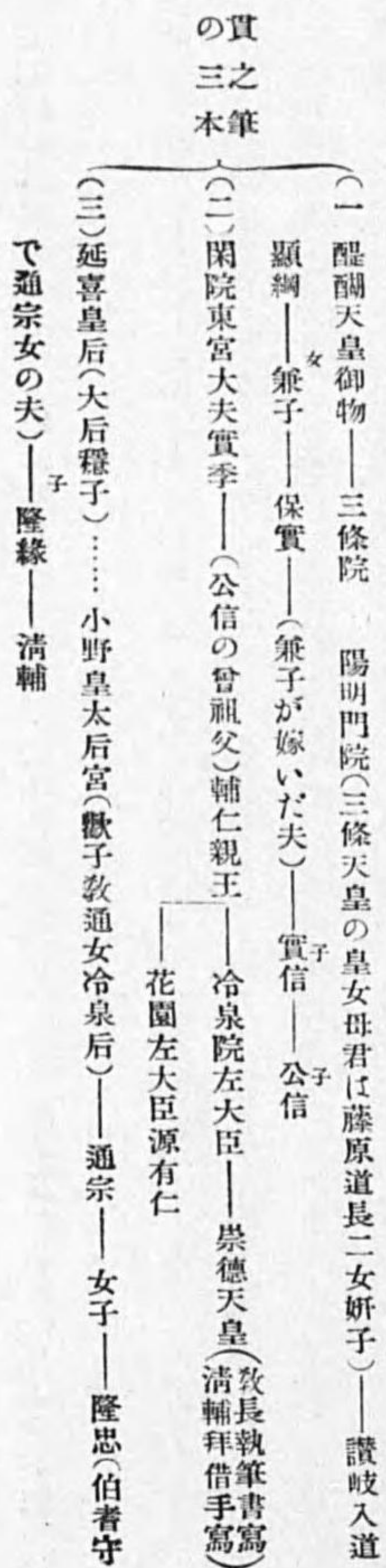


集をも手寫したといふから、伊周手寫本といふものも或期間存在した譯である。

三本を書いて二本を奉るといふことは甚だ信じ難いことを尙云はうなら、それ程副寫の餘裕があるものなら、なぜにあの歌道に御熱心な寛平法皇にも一本を献上しないか。尙又寛平御時后宮の歌合のうたを度々撰に入れたその歌合御主催の七條后温子に一本を捧げないか。あの時の歌況を知るものは須らく四本を御四所に奉獻するのが本當たとも謂はう。で余は思ふ古今集は唯一本を撰進したものでその流布はその一本からと貫之手稿本の轉寫と相俟つて宮廷と公卿庶人との間に遍蔓したものであると。

唯併しながら教長が斯うしたことを謂ふ所以のものは、當時なるほど、さう謂へば尤もと思はれるやうな三系統の流布を見たに違ひないのだから、教長當時の古今集分布觀を立てる上には此は非常に貴い文献である。即ち教長が此註を書く(一八三七)より卅六年前(一八〇二)に陽明門院本の寫しを傳へた公信の宅が焼け、三十一年(一八〇七)に新院御本(崇徳院御本)を傳へた源有仁が薨去し、尙一つ小野宮皇太后宮本は同じ一八三七に清輔が筆寫して居るから、甲を天皇に奉り、乙を自家に止め、丙を皇后に奉つたもので何れも貫之自筆であると云へば、それに基いて略次のやうに系圖が成立つのである。



思ふに教長の當時この三系統が顯著であつたことは事實であらうが、それを貫之筆として云々することは牽強であらう。

一 躰貫之筆を標榜する動機は那邊にあらうか? といふに第一は歌合や歌論が盛行して、古今集について引用するに彼此歌詞の相違する場合があつたこと、第二には貫之の歌人としての聲望が次第に加はつて来たこと、第三には年代隔るにつれて能筆の譽ある彼の直筆を尙ぶやうになつたこと、第四には此勅撰に與つた第一人者であるといふことをまゝで林檎の本場でもぎたての萃菓を喰ふと云たやうな骨董趣味、耽美趣味が手傳つてのことであると思ふ。藤原公任は大の貫之崇拜であつたといふが、三十六歌仙を定める時、人麿を左方の一番貫之を右方の一番として對々にし、貫之が一首の吟に十日も二十日も沈潜したことを讃へて美談として居る。そして寛弘朝廷では紫清兩女ともに貫之の名譽を作品に作りこめてをる。(蟻通の明神繪合等)王朝末期に出た大鏡にも貫之の歌の名譽を傳へて居ることなどから察して「貫之筆」といふことが段々有難いものになつて来たことは肯づかれるし、始めに唯左右方を別けて詞を番はせた菊合・女郎花合・根合・前裁合・歌合が後には段々過激になつて一首の優劣論に口角を失らせ、一助詞の相違に典故の甲乙争ひを始めるやうになつたであらうことは歌に凝り性な櫻狩の實方や伏柴の加賀や、西行の鴨立澤能因の白河關などの逸話歌話からも察せられる。

蓋然的な譜ひ方だがこの王朝末期に於て古今集傳播の系統は大體二つあつて、一つは歌人歌學者で今一つは單なる上流趣味である。甲は所謂くろうと筋のもので、小野宮皇太后本や新院御本がそれに當り乙はしろうと筋で、陽明門院本やその頃埋れて居た元永本がそれに當りはすまいか。此は随分無謀な假定のやうだが、古今集を單なる一個の裝飾と見る風は早くからあつたと思ふ。源氏物語梅が枝に源氏と兵部卿の宮が様々の物の本や草子を披見せられるついでに兵部卿の宮が自邸から取寄せられた延喜御宸筆古今集(事實あつたかどうかは別として)について

延喜の帝の古今和歌集を唐の淺縹の紙をつぎておなじ色の濃き紋の唐の綺の表紙おなじ玉の軸、綾の唐組の紐などなまめかしうて巻ごとに御手の筋を變へつゝ、いみじうかきつくさせ給へる云々

とあるのなどは主として装幀と筆蹟に興味の目標をおいた書方なり、榮華物語に藤原道長が中宮彰子に奉つた橋ノ延幹筆の古今集といふのも（彰子は歌も秀でて居られたにしても）矢張上流趣味であらう。

すつと降つてだが元和二年（二二七六）三月五日歿（これには異説がある）小野通女の作と謂はれる淨瑠璃十二段草子の三段美人ごろひに、淨瑠璃御前の教養をかぞへて「遊ばす草子は何々古今萬葉・伊勢物がたり、源氏・狭衣・戀づくし云々」とあるのは少くとも作者自身これを以て上流子女の必須科目と觀てゐたこともわかるし、室町時代の上流子女が古今集を以て嫁入道具の一つと看做すこと近世の女大學現代の嫁入文庫同様であつたらうと思ふ。斯うした側の架藏振は唯それが古典の一つだからといふので裝飾的に備へつけておくといふに止まる。元永本の發見、紹介は勿論貴い仕事で、又之によつて詞書や歌詞で在來流布のそれをよりよく正される部分も澤山あるが、「題しらす」を「題不知」としたり詞書の述語「よめる」を省いたり、前に「業平朝臣」とある次の「同人」と入れて見たり入れなかつて見たり「題しらす讀人らず」を或處だけ「題不知 讀人も」として見たり、大分詞書の體裁に不統一があるし、歌詞の方でも此本で正される數よりは他本で此本を正さねば筋が通らないもの數が多い。にも拘らず原本の筆蹟も用紙も装幀も餘程立派なものらしく想はれるから、どうも此は上流の趣味的裝飾物としての古今集であつたと想ふ。陽明門院御本については現傳が無いから何とも斷定出来ない譯だが、清輔が主として新院御本を朱筆で加入し、次に陽明門院御本をも幾分加味して書入れた點から推して、その御傳統が後宮系である點から推して多分は上流趣味の裝飾本系と想像する。斯して自分は唯臆測を以てするのみだが、古今集の流には上流系と歌人歌學者系があつて、前者は宮廷撰進の原本から後者は貫之の手稿本から次第に流布して、それ等が教長卿時代には略前掲のやうに傳播したものと忖度したい。

さてこゝまでは唯々轉々筆寫したといふだけで、本文整定といふやうな意識的努力の下に對校淨寫したのは、つまり清輔本が嚆矢であつたらうと思ふ。同書については已に詳説も出てゐる通り小野宮皇太后御本を底本として之に新院御本のちがつた分を朱筆で補ひ、尙陽明門院御本をも同様朱筆書入をしたもので、當時流布して居る古今集に於ては衆善を盡した寫本である。（此書の成立や價值や、裝幀書體等は右解説と、西下經一氏の論文に詳述されて居るし、本書は之を對校本にしたこととてその特徴は各個の歌のところでいふ）

さて教長當時の傳本を前掲通りに認め、清輔本を以て本文整定の濫觴としてそれ以後はどうなつたかといふに、右清輔本は承らく埋もれて一方では文政十年（二四八七）屋代弘賢に發見せられ、一方では天保二年（二四九二）榎本寛親によつて手寫せられ、又此系統に屬する小本が嘉永六年（二五二二）に刊行せられその最も完全に近い原本が昨昭和三年（二五八八）に前田侯府家本として刊行されて始めてその眞面目が解るやうになつたが、他の一面に於ては源親行の對校八本の一つに加はつてその方に交つて傳播した。

親行といへば源氏物語河内本の本文整定者として有名だが、あの整定振を古今集にも及ぼしたもので、それは前記二二に擧げた通りである。右の内「寂□」とあるは「寂蓮」のことか？ 又定本の越と伊と二種あるのは何のことか、實物について見ねば分らないが、詰りは之を傳へた人の略符であらう。（本朝通鑑によると定家の子に爲家・清家・光家・僧覺源・僧定圓民部卿門侍・藤原雅平妻と五男二女ある。多分はそれ等の子の中の誰かであらう。又俊成の孫で定家の姪に當る女流歌人に越部禪尼があるから「越」とあるのは定家からこの禪尼へ傳はつたものか？）

親行の校定は室町期飛鳥井榮雅に繼がれた。この榮雅本は親行本の直傳であると共に、親行本の傍系とも謂ふべき光明峯寺道家卿本をも取容れた。

（此道家卿本は傍系とは云ひ條テキストとしては立派なもので此は定家本と親行本の雙美を集めて成つたものと思はれる。）榮雅本

は當時随分弘まつたであらうが、その直系は北村季吟に傳はつてをる。季吟は和歌や俳諧や國文を松永貞徳に學んだから歌學者系譜には貞徳門下として列べてあるが、古今集は別傳であることをその抄に次のやうに云つてをる。

今此古抄は更に師傳の手すぢにあちす。飛鳥井の權大納言雅親卿そのかみ將軍家慈眼院殿に御講尺の旨とかや。其抄のていたらく顯註密勘・辭案抄などをと、し其外後成恩寺殿の御説をまじへなど尤此道にたよりあり。先年予松永昌三にしたがひて飛鳥井一位殿雅章卿に御對面給はりつ、廿年あまりまうでかよひて、わづかなるこしおれ歌の御添削をまかうぶりしかば、彼御家風をしたふゆへも侍て此抄をもうつし見侍しに此度この七代の集を注してのちこの抄をかり用ひて八代集の數をと、のへ侍し、是も彼師傳のすぢならばこそ猶かの制詞をもる、つみふかくも侍るべけれどこれは其かぎりには侍ざれば也。

と。乃ち季吟の古今集抄は榮雅から雅章を経て傳へ受けたもので、それより少し前の八三の古版や一〇五・一〇七と共に親行本の生命の永續を想はせるものがある。(季吟の註が古註の集成であることは他の抄物と通じての趣で、この方から幾分本文を考勘した點もあらう)

光明寺道家は鎌倉初期の朝廷で唯一の有力者として政治上有名だが、その子頼經は實頼について征夷大將軍として東下し、その父は新古今堂人歌人の第一人者たる良經なり、その身は關白として久しく樞機に參與したので、資料も暇も富も力も多くて乃父が遺愛の廿卷を克銘に傳へたものと見える。余が先輩彌富教授に恩借した對校本の一つはこの道家卿本系統のもので非常に便宜を得た。

處で古今集の定本で事實最も優勢なのは定家である。彼が生涯を通じて古今集を手寫したことは

第一回 建保三、一〇、三 第二回 貞應元 一一、二〇

第三回 嘉祿二、四、九 第四回 嘉禎三、正、(十四日より廿三日迄)

と都合四回は物の記録にある。にも拘らずテキストと見られるのは二回三回の貞應本、嘉祿本だけであるのはなぜか。

余思ふに同じ定家の筆寫の中他の二回は前述の上流裝飾向として書いたもので、本文整定意識の多分に加味せられないものであつたからではなからうか？ 建保本は明らかに源實朝の意を承けて淨寫して贈呈したものであり、嘉禎本も孫女に與へたのである。が今一つの嘉禎本とてもさうした機縁の筆寫であらう。

定家が貞永本嘉祿本を寫す時同在の異本を想像すると、第一には紀氏の正系を傳へたといふ俊成本があり、第二には傳基俊筆本があり、第三には清輔本、第四に小野道風本、第五に元永本、第六には後世何々切と稱する古人筆の斷片などがあつたと想ふが定家は果してよく此等の衆美を綜合し得たであらうか？ 卷末墨滅の歌の處に「家々の證本云々」と謂つて居る語を善意に解くなら、在來の古今集學者の一般にいふやうに又、尾上博士が歌と草假名に謂はれた通り傳來各種の諸本を遍く見渡して、それ等を指して家々の證本と謂つたとも思はれるが、又見方によつては最近一派の學者のいふやうに家々とは唯自分の父祖近親を指したもので、結局は俊成本系の各種證本を指したものととられる。が此は大きな問題で今俄に斷じ難い。目下のところ余は矢張在來の通説を可と信ずる。尤も今日の流布本(即ち貞應本)を他の僅かの殘留異本によつて對校するだけですら已に大分傾かれる節がある點から考へて、或一派の定家崇拜者の激賞するやうに定家は偉大であると褒めてばかりも居られないと思ふ。けれども何と謂つても彼の貞應本の勢力は大したもので、是あるによつて古今集は民衆化するを得たのだから此點は飽くまで彼を多としなければならぬ。通常よく嘉祿本は冷泉家の正本で貞應本は二條家の正本だつたといふが、歌聞學閥の旗幟鮮明な時代はさうであつたらうが、末の世には冷泉家京極家も大抵は貞應本に依つたものであらう。(飛鳥井家は兩方併用) 貞應本を系譜づけることはやがて定家以後師範家の系譜を作り古今傳授の系譜を作り近世諸家古今集研究者一覽表をも作る譯であるから今一々はあげない。

古今傳授——因はれたる典型を固持して數百年、江戸に戸田茂睡が出て「熊にあらず龍にもあらず淺草に」起臥し、一本のありのみを植ゑて梨本と家號し、用語の自由題材の自由とあらゆる舊套の擺脫を唱へてより自由討究の風頓に勃

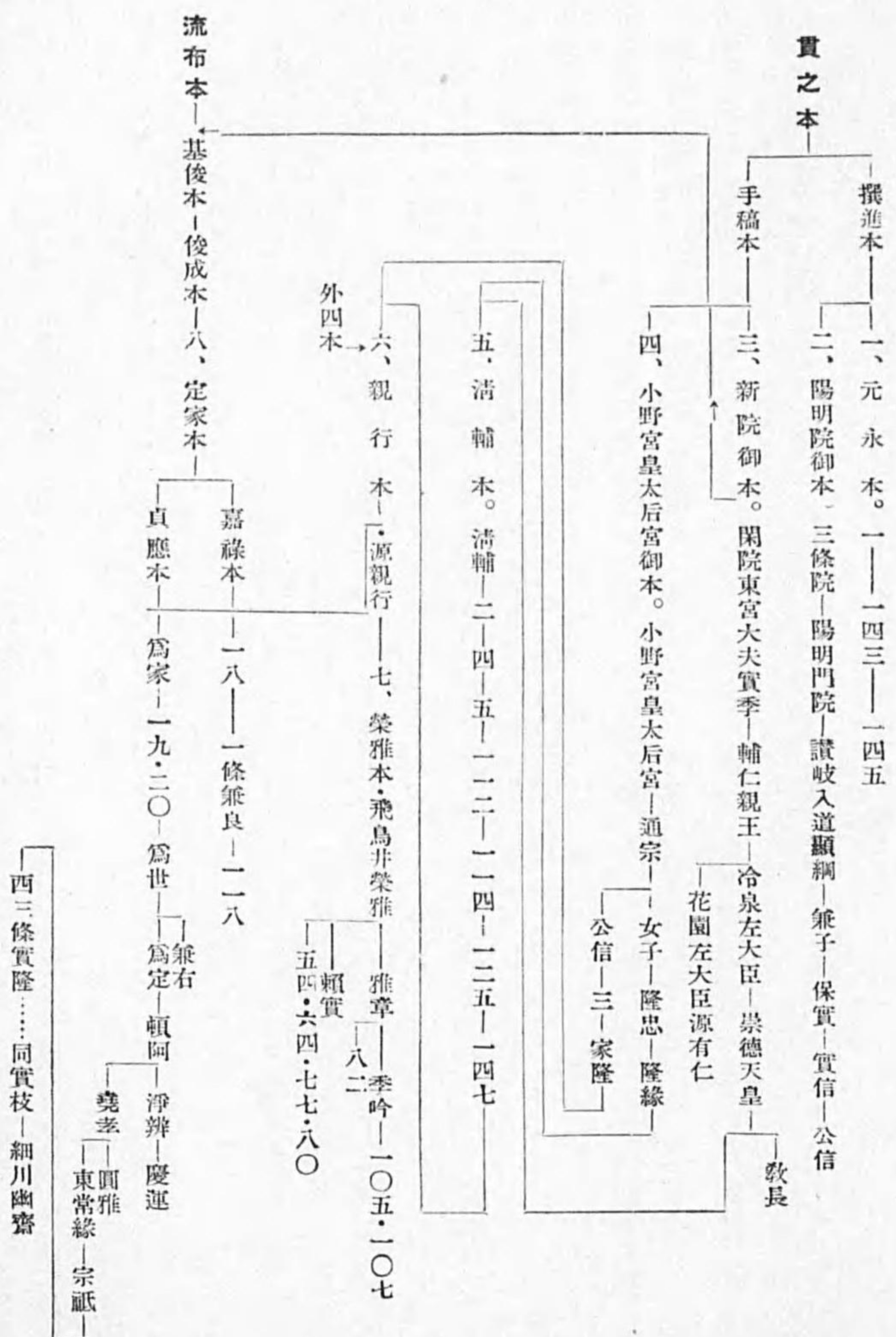
興し眞淵・契沖・宣長・以下の斯道の大人、古今集の解義に筆を染むる都度それに關聯しては本文整定についての意見をも洩らして来たが、こゝに世間的に見て斯學にどうしても逸してはならないのは近世桂園派の翹祖香川景樹である。彼が貫之を崇び古今集を重んじたことは貫之傳の末に述べた通りであるが、不朽の名著「古今集正義」は彼が古今集を通じて歌學説を具體化して示したものであると共に在來の疑義を釋明し、更に本文の考察に於て古人よりも遙かに進んだ研究をした。即ちその序の末に

此序は、顯昭、法橋の古今抄をはじめ或家々に傳ふる所の古寫本また舊きかきりの刊本どもを彼此求め集へて其異同を校へ正して其善ものを撰び來て姑く正文とし其取捨せし所々は即ち其文の頭書にものしたりもとより其謂れ其出所に至りては本註に辯ぜり、たま／＼其中にいさゝか愚案を申し 見たるには□を加へおき侍りぬ。さるは正本の出るを待ほど據なきのしわざに侍りゆめさがしら也と咎むべからず。

といふ。此は序文のことであるが、本文に於て歌の一首々々について作歌心理の上から明徹な洞察と犀利な判断を以て到る處價值ある考察を披瀝して居る。余が古今集觀を養成した根本は實にこの書の活本一冊であつた。

さて景樹以後はといふと明治・大正・昭和へかけて皇室では度々此集の御進講も申上げたことと想ふが、九重雲深くして吾々草莽の微臣の窺知し得ないことであるから微賤寡聞の余一個の所見で謂ふなら、金子元臣氏の古今和歌集評釋に捧げられた努力こそは實に貴いものであつた。(は從來いつも古今集を講義する都度氏がこの名著を指定参考書として來た。この述作も實はこの評釋本によつて示唆せられ、これを對象として思ひ得たものが大部分である。) それについては尾上柴舟・藤村作兩博士の近業——それは金子氏程全力的では無いかも知れぬが、地位的に優越して居られるからその資料には優れたものがある。

終りに余が想定の本文傳本略系をあげておく。(數詞は書志年譜にあげた番號)



古今集學徒としての余の切望する處は一刻も早く東西兩都の何れかに古今集圖書館が設立せられて、各家秘藏の秘書稀觀書の寄托を受け、古文書學と歌學の造詣ある上に特にこの集專攻の學者によつて本文整定の業績を天下に提示するといふ一事であるが、内外多事の我國家にさうしたことも望まれないし、篤志の寄附行爲もあてられないとすれば矢張はかどりはわるくとも、斯學に携はつて居る人がチク／＼手をつけるより外仕方がないことであらう。

第十 主要問題

一、撰進の年次

古今集はいつ撰進したか？ 從來の通説は大體「延喜五年四月十八日」といふに一致して居る。けれども古人の考察は必ずしも衆説一致して居る譯ではない。

一、日本紀略延喜五年の處には

四月十五日蝕、彗星見、乾方天、今日御書所預紀貫、撰進古今和歌集一部廿卷。

とある此によると四月十五日である。

二、貫之集第九には

延喜の御時やまと歌知れる人を召して昔今の人の歌奉らせ給ひしに承香殿のひんがしなる所にて歌えらせ給ふ夜の更くるまでとかういふ程に仁壽殿のものと櫻の木に郭公の鳴くを聞き召して四月六日の夜なりければ珍らしがりをかしながらせ給ひて召し出でて詠ませ給ふに奉る。

こと夏はいかゞ鳴けむ郭公今宵ばかりはあらじとぞ聞く

とある。此によると四月六日のやうにもある。

三、大鏡卷末古物語の處には右と大同小異で、

延喜の御時古今撰ぜられしをり、貫之はさらなり忠孝や躬恒などは御書所に召されて候ひけるほどに、「櫻の木に郭公の鳴くをきこしめして」（一本によつて此句を補ふ）四月二日なりしかば、まだしのび音の頭にて、いみじう興はおはします。貫之召し出

でて 歌仕う奉らしめ給へり。

ことなつはいかゞなきけむほと、ぎすこのよひばかりあやしきぞなき

とある。此によると四月二日とも見られないこともない。併し貫之集の詞書は「延喜の御時」とのみあつて「五年」とは明言してないし「昔今の人の歌」とのみあつて古今和歌集とは明言してないから延喜五年以外の年ともれ古今集の前身とも謂ふべき續萬葉集ともとられる。(但し續萬葉集を古今集と劃然別録の集と看做すことは出来ないと思ふ)。又大鏡の記事はそれが「古今集」であることは確かだけれども「撰せられしをり」は寧ろ撰集事務進捗中と解した方が妥當とも想はれる。或は撰集が出来たので主上も御臨御になつたと推定してはどうか？ 御書所とても主上が御出でになること、絶対にないとは謂へないが宏大な宮廷での些やかな一事務寮に態々御臨御といふこと、宛ら一家の主人が羽織袴で勝手元に働き、學校長がモーニングで小使部屋に上り込む程の不調和がありはしないか？ 併し當時の宮廷の御生活の詳細はわからぬから、このことは絶対に否定は出来ない。主上とても御書所へ御成りになるかも知れない。それが殊に和歌のお好きな延喜の帝ではないかといへば、これも強ち有り得べからざることもなさうだ。が、併しいよ／＼撰成つて上覧に納れるといふのなら矢張 天皇は 天皇としての御正殿の玉座に在らせられ、大臣公卿關係諸臣侍坐の席で復命するのが本當ではないか？ 尙も假に之をも認めるとしても、それが果して延喜五年であつたとは限られない。一の日本紀略の記事はどこまで史學的確實さがあるものかは知らぬが、國史大系本にも採られ、九代實錄の異稱もあり、相當信憑に値するものだと思ふが、王朝文學の訓詁を涉獵する時折照合するのに往々錯誤を見つけるし、本文の書方がどうもまことしからぬ行文である。いくら事實を年次に繋けると謂つても十五日として直ぐに月蝕と云ふ。月蝕は無論夜である。次に彗星現るといふ。此も夜景である。それから「ほんに此日はこんなこともあつた」といふので古今集のことが出てをる。作者の意中十五日に起きた事件として一番重大なものは月蝕で、次に彗星で古今集如きは三の

町と看做したものか。陰陽師などの説もあり迷信も盛に行はれて天變地妖に深い關心性のあつた時代とはいへ、上
天皇より下廟堂諸公卿の咏の集粹たるこの撰集完了のことをかう手軽に片附けた筆致が怪しまれる。尙國俊抄本朝帝
紀・扶桑略記・本朝世紀なども日本紀略同様十五日撰進とあるさうだが、國俊はいざ知らず。餘のものは先在史書の説
を踏襲して史書を編む者の常あることで、畢竟紀略程度の書方であらうと思ふ。國文の古今和歌集序をそのまゝに信ず
るとならばどうしても四月十八日撰進とすべきである。季吟や景樹は草體の數字六も二も十八のつゞけ字と似て居る
から紛れたものであらう(六と十八の魯魚は袋草子にもいつてをる)と謂つてをるが字形のみについてはさうしたことも云
ひ得るけれども、全體二日といひ六、といつたあの時鳥の歌は古今集未生以前の初夏のことだと想ふから此にも隨ひ難
い。處で今一つの説はこの四月は勅を拜した日で撰成つて復奏したのはそれより後のことだといふ。いはゞ「四月奉
勅説」とも謂ふべきものがあつて、論旨はこの方に傾聴すべきものが多い。

拾芥抄上和歌家部第二十九撰集に

古今集廿卷(歌數部立省略)

延喜五年乙丑四月十五日奉_レ詔。御書所預紀貫之爲棟梁_二奉之。大内記紀友則 前甲斐目凡河内躬恒 右衛門府主壬 忠峯等撰
之。有_レ序假名貫之。眞名依_二紀貫之命_一紀淑望書_レ之。不_レ入_二葉歌_一云云、但誤有_二七首_一。上古不_レ注名。或注_レ左。不_レ入_二當帝御
製_一。延喜五年奉_レ仰。延喜末奏_二聞之_一。題不_レ知。讀人不_レ知

と此次に定家の十八日撰集の記事をも擧げて居るが以上記した分で見ると、延喜五年に勅を奉じて延喜末年に之を奏聞
したことになる。(延喜は廿二年一五八二までつゞいた)前田侯爵家清輔本脚註にも疑問の程度だが此説を肯定するやうな
記事があるが根拠はくはしくは示してない。法橋顯昭の古今集序註下「延喜五年四月十八日」の註の處には

今注云。延喜五年四月十八日始奉_レ詔日也。……………

今案 如三此等説者 延喜五年四月者 撰上日歟 眞名序云。于_レ時延喜五年歲 乙丑四月十八日臣貫之等謹序云々。付_二此文_一存_二奏覽之由歟_一 此序者。草案之時。以_二仰下日_一且所_レ序置_二也。以前所_レ考古今序草ニテ可_二思合_一也。又延喜七年十三年歌等入_二古今_一説。

とあつて説の根據は

延喜五年以後の採歌

の點にある。

香川景樹の古今集正義序末の一段にいふ。

延喜五年四月十八日に撰集の勅を蒙りしと也。四月十八日に云々仰せられてと承たる文也さるを奉らしめ給ひてなんといふまでに引およぼしてこれを奏進の日也とおもひとりしは眞字序の作者語調にくらきのあやまちなる事既にいへり。よし奏進の日におもひとれりともそれを序末に書べき事は奏日と序書し日と同日ならんいはれなきをやかくも筋なき此序をしも證として五年四月十八日を奏進の日とおもはれたるはいぶかしきこと也

また家集に延喜の御時……(前掲のもの)

袋草子にこの六日は十八日の寫誤ならんといはれたる然るべき事也 六日はいまだ大みこともくだらぬさきなれば論なくあやまり也。翌年の四月六日とせんにはうたにことなればいかゞ鳴けん云々といへるにかなはずなほ五年四月十八日と見るべき也。大鏡にこれを四月二日とかけるは又六日の寫誤なるべし十八日を六日とあやまり六日を二日とあやまれるはつき／＼みな字形の似たるにくつれし也。袋草子顯註また一本にはうたえらばしめたまふはじめの日夜更るまで云々とありさてはいよ／＼十八日なること明らけし今の刊本ははじめの日の一句脱たる也されば此家集の詞書も五年四月十八日おほせことなうけ給はりし證明とすべき也

此説の根據は

一、文脈の上から序の本文

(一)「延喜五年四月十八日に」大内記きのともりの……らに(三)おほせられて」萬葉集にいらぬふるきうたみづからのなも(三)たてまつらしめ給ひてなん云々

に於て(一)の句は(二)に係るだけなのを従來の諸説は(三)にまで係るものと誤認してなる。

二、眞字序の作者が四月十八日撰進としたのも假名序を誤解したものである。

三、上奏の日と序を書く日と同じ日になる筈がない。

四、六日や二日に見たものは轉寫の誤で十八日が始めて勅を拜した日でそれ以前に云々のことは有り得べきでない。

五、袋草子・顯註・また一本(貫之集の一本のことか)に「はじめの日夜更くるまで」とある

といふにある

六人部是香の古今集撰輯考は主としてこの事についての考察で、

(一) 始めに斯道物興の機運を述べ、次に顯註や袋草子や景樹等の誤解を正し、

(二) 二日とあり六日とある十八日とある。何れでも差支ないが、あれは古今集ではなく續萬葉集のことで頃は凡延喜二三年見當である。としてその根據は

「古今集に收たる貫之が長歌に」

の下割註として

「此長歌はその端詞に舊歌奉りし時の目錄の長歌とありて彼の眞字序に古來ノ舊歌とあると同じく此度選輯しつる舊歌どもを四季戀雜などに部立して奉りつるに副たる目錄歌なり 此を諸註古今集に副たる事と思ひ執れるは甚しき非なり今獻る撰集に添て奉る歌を其集中に加置べき謂あるべしやは熟按ふべし。忠宰が舊歌に加て奉れる長歌とあるも同時の事なり但し今の古今集にはや、後の歌も入たれば此長歌どももし後に加へたるならむかと思ふ人もあるべけれど斯にはあらざるよしは伊勢が歌は本より後

度の再撰の時加へ入れつる歌なる事は疑なる徴證もあれば此貫之忠孝が二首無からましかば長歌は纔に二首ならではあらざれば二首の爲に雜躰長歌といふ部立までには及ぶべきにあらざればなり

と云つて右二長歌の歌詞をあげて可なり長期間古歌の蒐集整理に盡したであらうことを推定し、

(三) 延喜五年四月十五日撰成つて奏覽したものは即ち續萬葉集であること、根據としては

- 1、眞名序「爰詔云々等」各献家集並古來舊歌「曰續萬葉集」の本文
- 2、假名序にこの事のないのは早く脱文になつてゐたものだが從來の學者これに気がつかなかつたものであること。
- 3、本朝文粹に「曰續萬葉集」の五字の無いのは此は脱文ではなく直ぐ下に「名曰古今倭歌集」とあるに重るので略したものであること。

4、續萬葉集即古今和歌集と解く説(例「飛鳥井雅草の抄」は精緻を缺くこと)

5、然るに續萬葉集の名が後世傳はらないのは直後の古今和歌集の盛名に覆はれたものであること。

6、文粹註「法華廿八品」和歌序に「和歌之美也其來遠矣 自爾以降或應詔以撰錄古今」或起意以編次新舊二典自萬葉集一至于諸家卷軸已多源流寔繁」と見えたる新舊とあるは即ち此ノ時奏上せられし謂ゆる續萬葉集をさしたるものなるべきをただ起意とあるを見て外に私に選ひしもの有しならんかと思ふ徒もあるべけれど然にはあらず此の文は上に或は應詔とあるに對して云るのみにして私に起意といふの義にはあらず。漢文にはかゝる對句の文飾より少しつゝ、義を誤る例おほかり。

7、此時輯録した舊歌が即ち現傳の人丸・赤人・猿丸・家持などの集や在五中將日記、此書を原として後に伊勢物語は作れるなり) 在民部卿家歌合・寛平后宮歌合同・菊合・西宮左大臣元良親王などの歌で、今の世の歌人の家集とは貫之・躬恒・伊勢などの集であつたらう。

(四) (中二日を隔て)て同月十八日更に古今集撰進の勅を賜はつた。根據は假名序の本文

(五) 延喜六年二月の頃古今集を撰進した。根據は

- 1、序の本文に「四つの時九かへり」とある。この語は延喜六年としてよく一致する
- 2、同「年は百とせあまり」とあるのも同様
- 3、目錄、貫之に「延喜六年二月任越前權少掾」とあるのはこの撰成ると同時の恩賞の意味の榮進であらう。
- 4、建久木家隆の加注と覺しき書入に左の一節がある 重沈思猶 十八日者奉詔日也於撰上日者不注歟
- 5、眞字序の末に「于時延喜五年歲次乙丑四月十五日臣貫之等謹序」とあるのは作者が奉勅の日と奏上の日とを穿き違つたもので、その「十五日」とあるのをすらすら現傳の眞名序は「十八日」としても一つまちがつてゐる。古本二種文粹など皆十五日とある。それが正しい。

(六) 延長承平の頃に再びその後の訂正増補を加へたものを選進した。根據は

- 1、榮華物語に「醍醐の先帝の御時古今集廿卷えりと、のへさせ給て世にめでたくせさせ給ふたゞ今まで廿餘年なり」とある。それは天曆五年のことだから推算すると承平元年が丁度廿一年目に當る。
- 2、延喜五年以後の歌が入つてゐる。延喜七年の大井川行幸の歌同十三年の女郎花合の歌など。
- 3、序に「千うた」とあるのに現傳千百首ばかりもあるその百首内外のものは後度の増補である。
- 4、二條后は寛平八年に后位を停られ、天慶六年に又尊稱復活の御沙汰があつたのだから、延喜五年撰進當時四の御歌の作者は「讀人しらす」とあるべきで、それが二條后と詞書になつてゐるのは、后位號復活後の手入によるものだ。

故に現傳古今集は

- 一、延喜五年四月十五日撰進の續萬葉集
- 二、同十八日奉勅翌六年正月頃撰進の古今集
- 三、延長承平の頃更に撰進して奏進

と三次の撰輯に成つたもので、傳本によつて多少區々になるのはその後各自の心々による書入の混入によるといふのが

要旨である。(或人は是香の説は獨斷論が多くて一般を首肯せしむるに足りないと謂つたが、是香は前述の通り精細に論據を示して一事と雖も直覺論や獨斷論を押しつけてはゐないのである。唯それが一般的妥當性を缺いてゐるといふのは、それは別に他の理由があるので、何も獨斷論だからといふのではない。又此等についての余の考へは後にまとめていふ。)

にも拘らず古來普通に唱へられて居るのは四月十八日撰進説である。

一、仲實 目錄(刊本の目錄には見ないが、顯註の引用にある)延喜五年四月十八日卷軸始めて成る。

二、季吟の抄の序註の始めに

京極中納言入道定家卿御説云古今序云延喜五年四月十八日……等撰之……眞名序には卯月十五日に撰ばる、よしあり然共諸

説かな序のごとく十八日を用られ侍り、

清輔朝臣の袋草子云 某俊云延喜五年四月十八日上奏の日也

(尤も末段には八雲御抄の十八日奉勅説をもあけて、「愚按此御抄の如くならば延喜五年よりのちの歌い、事無疑にや」とも謂つてゐる)

などでその一般は知られよう。但し四月十八日といふのは唯昔から古人の云ひ傳へたまゝをすなほに信じたものであつて、景樹や是香の説を斥けてまで此を主張したものではない。余思ふに古今集は此序の文字通り四月十八日の一次に撰集したもので、それ以後の歌の混入や傳本の區々になつたのは貫之手稿本から轉々淨寫の間に發生したものである故如何といふに、上述十八日奉勅説の根據とする理由の、

第一、此日以後の歌の混入は、撰者手稿本の書入が本であらう、吾々が今日自分の乏しい述作を發表したとしても、その後思ひ得たことはどうしてもその頁の上か下か傍かに書き加へずには居られないものだ。勅を拜して一旦は撰進したものの傍でその後も亭子院の歌合に、大井川の川道遙に秀詠を得るとは「こんなのが以前にあれば是非加へるべきも

のだ」といふので、自家の稿本の相當欄に嵌め込んだものと想ふ。清輔本頭書にいふ「萬葉集哥問々入之若失歟將不附

優美竊以入之歟新撰集ニハ弘仁以後延長以往哥ヲ撰由雖序書以往以後哥多以入之若又未讀解歌ヲ見出他書入之歟」といふこれは萬葉集の歌を主に謂つたものだが、「優美なるに耐へず云々」は寧ろ延喜五年以後の秀歌に適用すべき言だ。

第二に文脈の上からは似たやうな繋り句が二つあるのだからどちらにも解き得る。

第三に眞名序の作者が十八日としたのは、譯者が國文序を誤解したものと説も受けられない。複雑な文脈ならばだが、最も單純な日附ではないか、又餘の枝葉の些事ならばとにかく最肝要な日時ではないか、それを誤解する程なら當然漢譯者の資格はないものだ。

策四に上奏の日と序とを同時に書く筈はないといふことは一應尤もだ、前々から御内命があつて序をも併せてつけて撰進せよと仰せられた確證のない以上、景樹のいひ分は尤もな點があるがさりとて撰進するのに唯集そのものだけを奉つて何等添へ書を申しあげない筈もない若し申上げたとすると、此序が丁度それに附けて奉つた表文としてふさはしいものだ。さて件の二十卷を奏覽に献り、別に國文序の一軸を添へて御目にかけたものを朝廷ではそのまゝ二軸として御物に入り、撰者の方では序を卷頭に入れて保存したと見れば、後世に至つて序のあるものとなしものと二種の傳本を見るに至つた所以も首肯せられよう。

第五に六日二日が草體で十八に紛れ易いことは事實だが、さりとて時鳥は十八日でなくては歌つてはならぬといふ法もない。否な初夏夕々月の二日に早や啼いたので此は珍しい何とか一趣向ありさうなもんだといふので歌を御命じになるといふ方が本當らしくも想はれる。(但し此事は已に是香もいつてゐる)

第六、袋草子・顯注等には「はじめの日」とあること景樹の言の通りだが、それを四月十八日の夜と結合する必然もなくましてそれを古今集と結合する必然性もない。時鳥云々は古今集の前身たる續萬葉の時のことと想ふ。

第七（以下は是香の説に對する卑見）に長歌の貫之や忠岑の作は續萬葉撰進當時の作だと斷定した是香の考察は委しいが、已に旋頭歌を見本的に三人の作四首だけ並べた編輯振から察すると、長歌も一〇〇一の唯一首だけを入れたもので後は古今集撰進後慰勞の宴でも賜はつた時（又別の時でも）などに詠進したもの（伊勢のは別）との臆測も同じ程度の蓋然性を以て認められねばならぬ。けれどもなるべく後人の攙入を少量に見積る方が歌の總數をあげた古記録とも一致するのだからその點において、これ等二首は續萬葉集の一軸に添へて詠進したものを、今度古今集を撰ぶ段になつて長歌の作例が他に佳いものもないし、撰者にとつては憶出深い歌なのでどちらもと入れられた、友則は物故したので撰者三人が一人宛手盛りにして體を整へ、その排列も貫之・躬恒・忠岑とあるべきを題材本位に（始め一つは古人の作だが）目錄の歌なるが故に貫之・忠岑として次に躬恒の冬の歌をおいたものでならう。さて後に伊勢の哀歌が出来た此は誰が見ても秀味であるから手稿本に書加へたと看做したい。但斯う見る爲めにはその所謂續萬葉集なるものは最早古萬葉のやうな六種歌態の部立ではなく、つまり現傳古今集と同様に整然としてゐて後世學者の揣摩するやうなしどけないものではなく、萬葉直後の歌集として形式の上では遙かに飛躍を示したものであつたのが、唯延喜の朝廷には撰者を初め古人に恥ぢぬ大家名家が儕々として輩出して居るのにそれ等の詠が一つも入つてゐないのが物足りないから、更に此上現代歌人のをも入れよ撰者自身のも憚る所なく入れよとの勅を拜して増補したものが、即ち現傳の古今集である。で、再勅奉拜以後の撰者の仕事といへば、現代歌人の詠を蒐集して取捨選擇を加へ、之を既成續萬葉の諸歌の適當なる位置に挿入するにあつたと見なければならぬ。ではその書入本の續萬葉は、と問はれてもそれは今残存してゐないのだから、絶對的に強調することはむづかしいのだが、併しこの想定は強ち無理ではない。

第八に續萬葉集と名のついた時のあつたことは事實であらう。けれどもそれは古今集成立への一過程であつて、つまり始めには「萬葉以後の歌が今大分散佚して居るから此際それを集めて撰をせよ」との仰せの下に歩を進めて居た。

で、日本紀の後に續日本紀と様に萬葉の後だから續萬葉としようといふので、一旦はその名をつけて奏進したものののが、重ねての勅を拜して「ふるうた」に「あらたしうた」をも加へて撰ぶとなつて、續萬葉ではふさはしくないから、いにしへ今の歌の集即ち古今和歌集と命題して撰進した。で、續萬葉といふものは名ばかりあつて朝廷にはその原本をとどめおかせられなかつたものなり撰者もまた直にその稿本を延長させて古今集にしたものである。始めは日本建たけを普請するつもりでかゝつたが、土地も餘るし費用も餘つたから、こゝに一つ洋館を建てようといふので、工事を進めてきて出来上つたものは和洋折衷の邸宅である。日本建の邸宅はあつてもその一部分に吸収せられてをると見るのが至當である。大正八九十年にかけて文部當局は高等教育の施設充實に力を入れて方々に高等學校を新設した。そこで大正十一年の四月の十三日に余が當校に着任した時にはまた新築中の正門に「第十六高等學校」と札が立つてゐたが、今日ではそれが弘前高等學校で通つて居る。この二枚の札は、やがて續萬葉集と古今和歌集との關係にも應用して考へられよう。だから眞名序に續萬葉の語のあるのも正しいし、假名序にそれが無いのも正しい。それが無いから脱文だとして態々補ふにも當らないことだと思ふ。

3、の本朝文粹に「曰續萬葉集」の五字のないのは事實だがそれが修辭上の理由で省かつたものか、轉寫の脱落か、始めから措辭二様を傳へたものかは輕々に斷じ得べきことでない。

4、「續萬葉集即古今和歌集」といふことも上記のいきさつきへ諒解して居れば差支のない語、寧ろ便利簡結な語だと思ふ。

5、續萬葉集の名は後世に傳はらないのが本當で、此が有名になるやうでは、第一次第二次の新古兩歌が劃然として取り容れてあること、新歌は古歌に比して著しく低劣であることが必要である。處で事實この二項とも正反對であつたのだから……。

6、法華二十八品讚歌に「或起^レ意編^ニ次^ニ新舊^ヲ」は新撰萬葉を指したもので出た時代はこの方が稍前だが官撰の古今を先にして私撰の菅萬(新撰萬葉)を後にした謂ひ方だと思ふが、別に權威のある註を見た譯ではないから或は余の曲解かも知れぬ。

7、の古今集の取材した各自の家集や歌合の歌が現傳の家集歌合であつたか否かは今の余は何とも斷定しかねる。唯併し古今集と交渉する範圍で見てもそれ等家集こそは、寧ろ古今集以後代々の勅撰私撰を材料としてそれから拔萃したものではなからうと思ふ。殊に貫之集や伊勢集の如きは本集成立以後の詠が澤山ある。

第九に假名序の本文を景樹と同様に解して十八日奉勅と推定した説は、又景樹の説と同様に批評するより外はない(前項を見られたし)

第十に延喜六年正月頃撰進といふことの中

1、序の本文「四つの時九かへり」は

寛平九年(一五五七)七月十三日御即位から 延喜五年(一五六五)四月十八日

までには七年九ヶ月餘で四つの時が完全に一周したのは七回で、第一次は秋と冬、延喜五年は春と夏とだから都合八回であるで、此を今年延ばして延喜六年四月頃とするなら文字通り完全に四季が九かへりする譯だが、昔の人——否な今の人でも物をいふのにさう限定的には明言しないものだ、殊に貸金の利子でも計算するやうな日の繰り方は少くとも歌集の序としてはふさはしくない。それに日本書紀以來慣用の年代の書方もたとひ七月御即位でも寛平九年を以て御即位第一年として以て順々に計へて行くと、延喜五年は御即位第九年に當るので「四つの時九かへり」と謂つたもので満九ヶ年といふ意味ではない。

2、年は百とせ餘りも同様大まかに見れば延喜五年にも六年にも當ることだ。

3、越前權少掾は恩賞の任命であらうことは一應は同感だが、愚考此は年功の榮轉で撰集の勞を犒ふのに一個の榮職を補するといふ色彩は寧ろ稀薄であつたらうと思ふ。二月は定例行事の除目でもないのだから闕が出来て貫之にお鉢が廻つたものともとられる。

4・5、に建久本・古本二首の記事をあげられたのは有益な參考だが、皆古人の臆測で何も確信あつての斷定ではない。すれば後人の暗中模索と變りのないもので、古人が斯ういつたからといふことは古人が存命中此々の見聞についてかう考察したからといふのとは大分違ふ。

第十に延長承平の頃に再び撰進したといふについて

1、榮華物語月の宴の記事を引かれたのは着眼が細かい。天曆五年(一六一一)と延喜五年(一五六五)とは四十年餘も隔つて居るから「二十餘年」といふには合はない。それを若し承平元年(一五九一)とすれば丁度榮華の記事通りになる。處で和田・佐藤兩氏の榮華物語詳解には「この記事は『四十餘年』——四十餘年の誤であらう。古印本には明らかにさうしたのもあると書いてある。それに榮華の記事とても絶対に確實なものでもなく、廿年餘といつても醍醐帝に重きをおいてその崩御の延長八年(一五九〇)九月廿九日からかぞへたととれようし、延長はまだよろしいが承平となつては朱雀天皇の御代にもなるから若しその頃の再撰ならば、新撰和歌序に洩らしたより以上の感慨もあらう……斯うはいふものの此點に着目して斯ういふ假説を立てたことは古人も及ばぬ新考察であつたと思ふ。

2、延喜五年以後の和歌の入つて居ることは前に述べたやうな事情である。

3、序に「千うたはたまき」とあるのは文學的概數ともいふべきもので、よしやその當時千百十一首あつたとしても此を國文調の雅語とする時は洋語の數詞よりまた舌ざはりの忙しいものにならう。但し撰進當時は現傳のそれよりも歌の數が少なかつたであらうことは事實だつたと信ぜられる。

4、二條後の考證も精緻で正しくその通りである。本集の作者名は充分注意して僧正遍昭と良岑宗貞を書き分けたり、前右大臣でも今は左遷の人であれば菅原の朝臣とだけして「前の右のおとど」とはしてないなどに引合はせて二條の後の處は貫之が晩年書きかへたものであらう。

(尙是香は朱雀院の女郎花合を延喜五年以後と見て居るが、現傳の右女郎花合は群書類從にもあつて宇多天皇御退位の翌昌泰元年の御催しとある)

斯て余は續萬葉の延長といふ條件をつけて古今集一次撰進説とも謂ふべきものを認めたいと思ふ。此頃の撰集は新古今時代のやうな繁鎖なものでなかつたからさう幾度も訂正を御下命になつたものとも想はれないし、假名序の全文を見通すとどうしても既に完成した古今集を眼の前に据えて口をきいたものとも想はれるし、延長年間に入ると貫之は別に新撰和歌の撰を承つて居たのだから、最早その當時は全然古今集とは公け向の事は切れたものと想はれるし、假名序の最後の處を見ると、今しも産聲をあげたこの新生の歌集に無限の歡喜と愛と望みとを寄せ、どこかに撰者たちのホツとした疲れをすら感知せられる。若し十八日はこれからその仕事にとりかゝる日だとすれば、あの部立以下の書き方は凡て未來時をふみ、最後に「撰者過分の光榮や、誓つて最善の努力をさゝげる」ことを囀々列ねるべきだと思ふそれに全體かうした序文は他の已成勅撰にも見られることで、それ等は何れも撰成るの日に捧げてゐるものばかりで、勅を拜して直ぐ序にとりかゝつたといふのは一つもない。(本朝文粹卷八令義解・弘仁格・貞觀格・延喜格等の序)そして四月十八日以外の撰進を唱へ一次以外の撰進を主張する先人の所説は前述べたやうに、立説の精緻には敬服しながらも首肯し難いものがあるから、他日紛ふ方なき貫之自筆の撰集原本が出て此説を覆す時があればいざ知らず、さもない以上古來多數の斯道學者の謂ふ通り延喜五年四月十八日一次撰進と定めておく。

二、假名序と眞名序

古今集今日の流布本には卷頭に假名序があり、卷末に眞名序があるが、あれは定家の貞應本に倣つたもので古來の傳本には

- 一、兩序共に無いもの
- 二、假名序だけあるもの
- 三、眞名序だけあるもの
- 四、兩序ともあるもの
- イ、貞應本の位置のもの
- ロ、兩序とも卷頭にあるもの

の各種がある。一は陽明門院御本の系統に稀にあるもの、二は古寫本に多く、三は基輔・清輔・俊成・定家・嘉祿本本に見られ、四の中卷頭に二つともあるものは大抵眞名を始めにして次になをに入れてある。古いものでは家隆本新しいものでは徳川時代好事の模倣から出した刊本に見られる。以上五種の中、何れがこの集原始の眞面目であつたか之を檢討するのが本講の要旨である。で先づ古來各家の説を擧げる。

一、教長の古今和歌集註にいふ。

「故人云。貫之假名ノ序ナカキテ紀淑望ニ、眞名序ヲアトラエケルヲ父ノ納言長谷雄ヲレカ、ムトテ、カケルトイヘリ。敦光朝臣モ無疑紀納言ノ筆ナリト讃岐院ニ申ハベリキ。和歌序ノ秀逸云々。和語ナレバ以假名序ヲ基トシカケルナルベシ」とある。つまり

兩序併存・眞名序は紀淑望の名に於て父長谷雄代作・假名序本眞名序模倣と見た説である。

二、沙橋顯昭の古今集序註

下卷には二箇處序の記事があつて、始めの方には

私答云、古今假名序者、一向不可信用歟。其故者萬葉集、人丸者藤原宮御代於石見一死、何有至平城宮乎、仍真名序には削其文了、又假名序者爲合體之臣、平城御時舉三人丸歟亦人人丸又非同時也

と假名序の杜撰を述べ終には左の記事がある。「假名真名兩序事或説。貫之之草假名序。詠紀淑望。令書真名序云々。敦光朝臣申讀岐院曰。實父紀中納言長谷雄筆也。借望之名草之歟。淵變爲瀨等之句。淑望雖書歟云々。是和歌序之秀逸也。」

能因家集序云。如彼天曆以往三代之明主。降勅賦茲道四人之哥仙。奉詔獻家集。是以王道股肱之臣訪於衆心而探詞。如儒林河漢之才。冠於卷首而題序云々。如此説者。可用真名序歟。」

「抑、古今序者。和歌之肝心也。是故四條亞相粗以注之。其後相公禪門並清輔朝臣等。續又注之。然而皆以省略猶殘疑。殆賢才尙爾。淺慮定及乎。纔載管見之所勘。恐備竹園之高覽。雖非秘藏。莫出禪第一矣。」

始めの一段は教長註を承けたもの、次の能因家集序の文は真名序巻頭説終の一段は序註研究史である。

三、北畠親房の古今集序註にいふ。

「淑望と云人は是を言。或説には淑望は彈也ければ、先土代を漢字の文章にて草せしめて、是をかなにわけてかきたり。仍真名序は奏覽の本にはあらずといへり。或説には貫之が書きたる假名序をば、その彈淑望以漢字撰作すとも云。何様にてしかの真名序は奏覽の物とは見え。隨て家證本にも不載之。或奥に書載せたる本もあり。是非本義。假名序におぼつかなきことの、真名序にて料簡せらるることあるべし。仍才學の爲に書かなどと見へたり。」

とあつて

真名序非奏覽

を唱へ、兩序の前後については兩様を傳へ、内容に於ては真名序時に假名序の缺を補ふ旨をも認め尙右の文の終に

而を新古今の時いがやうに治定せられるにや。毎年本古今を撰せられしに、真名假名のこの序を集め、初につられて被載たり頗不審事なり。

と疑つてをる。(附點の處誤植か。)

四、愚秘抄二卷(群三〇一、一〇、九三八―九七二)は奥書通りならば建保五年十二月十七日定家の著であるが、爲家・爲氏・光騰・元喜・宗興等の追奥書があつて傳統過重の末世になつた擬作かとも想はれるが、下の末(刊本九六三頁)に

假名序を承けて真名序をば書事にて侍也。貫之は古今假名序書て後、定て假名序の沙汰あらんずらんとて、真名序を書て、紀淑望を序者に書て、我死して後、若真名序の事御沙汰あらば汝が書たるにてあるよと申をきて侍りけるとやらん。案のごとく貫之歿して後、御門御尋有りければ淑望奏覽して侍き。心のやみ、むかしも今も哀にこそ覺侍れ。彼淑望は養子也。長谷雄卿の子なりしを貫之、ひとりて養して侍りき。

とある。書志年譜一六にもあげた通りどうも信じ難い。

五、抄の序註の始めには

此抄真名序の注なし其故は定家卿の嘉禎本に此序なきを俊成卿もちひ給ひし本のとたりとかや。今の貞應本に真名序あれどもなき分にして奥にありといへり。これによりて注せざりしにや。甚俊朝臣云。貫之かな序を土代として淑望をして草せしむとも興あるをもて優美に堪ず追入といへり。優美説ふべきわざなれば。聊愚意を述て注解し傳。

とある。つまり真名序は後の作で奏覽本にはなかつたこと隨てこの分の註は從來無かつたことを述べたもの

六、契沖の餘材抄第一には始めに假名序を註し次に真名序を註し、紀淑望の處に

中納言長谷雄男、或日以貫之爲猶子。私命令草之。未レ知其所據。蒙竊案既四傑奉勅撰此集、貫之何敢有私命。然則此序亦淑望奉勅撰也。

と、此は真名序勅撰説とも謂ふべきもの。

七、古今類聚名詞集の著者小野高尙は秋山色樹の名で寛保元年(二四〇一)夏山雜談(十卷他人の纂輯)があるがその中にいふ。

古今集の假名序は奏聞の序なるべし、眞名序は奏聞の序にてはあらざるべし。如何となれば花山僧正・在原中將・文琳・野室相在納言などあればなり。

この着眼は後に香川景樹や六人部是香が繼いでをる。

八、荻生徂徠の隨筆「南留別志」五卷は書かれたのはずつと以前であらうが刊行は文政十一年(二四二二)である。卷一には

古今の序は眞名の序をつくりて後に、それによそへてかなの序をつくれるなり。文の體格かなの文章にあらず。と眞名假名前後説が唱へてある。

九、香川景樹の古今集正義序註にはかな序の處々に眞名序を引合せに出して批評し、正しいものは「たま／＼かなへるに似たり」と様にし／＼肯定して大部分を杜撰探るに足らずと否定して居る。で、兩序論として纏まつて書いた所はないが、要するに眞名序は後人の偽作で奏覽本には勿論なかつたものなり、今本署名の淑望の作でもないといふにある。例の十八日奉勅説の處にも

……諸史の撰者たち後人模作の眞字序か淑望の撰と意得つめて明證也と思はれしより。此序の五年は奉勅の年なることいと明らかなるをさへ竟に誤解して五年と直して記されたるもの也。

といひ、又序の末の註の一節に

貫之等がといへるは此序紀氏のかげればおのが名を擧て餘の撰者をかぬ眞字序の末に臣貫之等謹序とかければ彼奉詔の日を奏進の日也とおもひたがへる例のひがわざなる事既にいへり同義と思ふべからず又此假字序はおのがかければ己が名をあげんと論

なし。眞字序は淑望ならんに貫之と書るいかゞ是ばかりにも後人の譯文なるをば知べき也。餘材に「或曰……」といへるは非也さらば淑望謹序と書べき事也。何を懼て他の名をかるべけん。また勅を奉じて撰びたらんに遍昭を花山僧正業平を在原中將康秀を文琳などなめしく書出べきものならんや、舊説はかゝるたがひのいでくるなかへりみて紀氏私に草せしめたりなどいひなせるものかいつれ無稽の説といふべし

と眞名序説否定、淑望説否定を強調してをる。

一〇、六人部是香の假字序眞字序論は専らこの問題について考究したもので、在來の諸説を検討しつゝ自家の立説を明らかにしてある。

- 1、その文體の上から仁流・秋津洲之外・惠茂・筑波山之陰云々はどうしても假名序あつて後の措辭で若し始めから漢文で綴るのならもつと別の修辭形式をとるべきものだ。
- 2、…下乞食之客以此爲活計之媒云々は假名序にはないことで延喜より下りての世の相である。
- 3、淑望は貫之より二十七年前の延喜十九年に亡くなつてをるので、建久本の聲に眞字序を寫し添へた異板には光淑(淑望の弟)とある。が、實は淑光よりも後の作である。
- 4、假名序は大鏡にも早く見え小野宮皇太后宮御本、花園左府本俊成本などに早く見えて居るが、眞字序は建久本(家隆本)の卷首にあつて白紙一枚を隔てて其裏に上の文(淑光作云々)を引いてをる、眞字序は貫之歿後四五十年の本朝文粹に收められて以後公任がもてはやして世に流布するに至つた。
- 5、眞名序は風調から察して康保・安永の頃から寛和永延の頃までの文人等の作と想はれる。

「かく思定て尙眞字序に譯しつる時代を熟考るに、至如難波津之什献天皇富緒川之篇報太子或關神異或興入幽玄とある富緒川の一條は假字序淺香山の故事に替て書つる文なるを彼富緒川の歌は帝王法説(上宮聖德法王帝説の事か)に見

えて聖徳太子の薨ませる時、巨勢三杖が詠る挽歌にて見義もよく通ひたるを太子傳曆・拾遺集・文粹に見えたる康保二年の藤原後生が記などに、彼の神異さまに記しつるはこれらの書ども少の前後こそあれ同じ頃に成つる書なるから同じ筋に誤れるものなるを今此序にまた同じ趣なると人麿のことを、柿本太夫と云る事同じ文粹なる源の順が文に見え僧正遍昭といふべき處を同じ順が文また勘解相公が讚法華經廿八品和歌の序などにも華山僧正と云るなどを傍徴として考渉するに此序を擬作しつるは、康保安和の頃より寛和永延の頃までの文人等の中に誰にか有けん擬作しつるものなるべくおぼゆ。

6、貫之は國文序を己に九年前の昌泰六年に大井川行幸和歌序で作り、漢文序を後の新撰和歌序で試みて居るから、この能文家が何を苦しんで他人に代作を乞うたりしようといつて清輔の説(顯註が繼承した)は否定。
7、淑望が貫之の猶子だといつたり貫之の叔父だ(叔父だと云つたのは何人の何書か余は知らない)といつたりするのは無根の妄説だ。

8、近頃の一説に「まづ始めに淑望に仰せて漢文序を作らしめられたけれども、中の和文と打合はぬ爲め又更に貫之に勅して和文を作らしめられた。」と云ふも肯はれない。

9、眞名序を書入れたのは基俊本などが早いものだが、一般には貞應本以後のことである。

10、國文の和歌序は己に

昌泰元年貫之の大井川行幸和歌序

忠岑の序(夫木集)

躬恒の序(河海抄)

貫之の白河大相國亭子日會序(河海抄)

あること

11、或説に「假名序にこそ拙い點(繪にかける女を見て云々など)があるから眞名序が早く出來て假名序を後人が擬作した」とあるも否定。

12、假名序流布の有様は大鏡宣耀殿女御の處や榮華月の宴に徴しても明らかでないこと。
と破邪顯正の筆鋒鋭く最後に

「いでやかばかり貫之がものしつる正しき微ある此序にしも然ばかり異儀の起りもて來し由縁は此序や、古くより誤字脱文撥入錯亂いと多かるうへ眞字序の擬作さへ添りつれば具眼の人にあらざれば其眞を見得ることあたはざるを彼定家卿の證本にとて訂し殘し置れし本の殊に悪かるを世々の識者の其本にのみ就て説きつるが故に實にいかにぞや思ゆることども多かるより甚しき説どもさへ出くること、は成れるものなり……」

嘉永四年七月都のかりのやどりにしるす

六人部 是香

また外に上田秋成が眞淵の古今集打聽を校訂した時に述べた考察もあるが、それは故藤岡博士の國文學全史にも引用せられたものなり、大躰古人の所説は以上の範圍を出でないものと思ふから、最早此位にとゞめて以下自分の所見を述べる。

先づこの事は根本史料を缺いたものだから史學的に確實には立證せられないもので、比較的合理的な臆説が立てばそれで満足するより外ないのである。

貫之と淑望との血縁は貫之の系圖にあげた通りで唯遠縁の同家内といふだけで、叔父でも姪でもないが、併し姻戚關係でどういふ續柄になつて居たものかは明徴がないから、此は肯定も否定も出來ない。

次に假名序と眞名序とはどちらが先かといふに、これは假名序が先で此方は撰集に添へて奏聞したものである。この序こそは貫之の和歌史観と歌學と斯集に注いだ全力的な努勉を雄辯に物語るもので、此をしも他人の代作模倣などと揣摩するのは妄言も甚しいものである。けれども榮華にこの序がはめてあり大鏡に「やまとうたは云々」とあるからといつてもそれは假名序が早くから一般に廣布した證とはならない。この二書の成立は王朝末期のことで、その頃の作者の頭で書いたものである。寧ろ枕草子などが信憑すべき資料だが、宣耀殿の女御の例の古今集の御ためしの場合には「やまとうたは」とは出てない直ぐに詞書と歌詞の暗誦に入つてをる。

想ふに假名序は撰進當時は手稿本には一部の中に加へられてもあつたらうが、奏覽本では別々になつて空しく高閣に束ねられた十幾年かがつゞいて、後歌合の盛行や歌論の勃興と共にものではやされるやうになり、それにつれて好事の學者が試みに漢譯したのが眞字序で此とても貫之存命のことと推定する。萬葉集に懷風藻詩人があり古今集に漢詩人があり、歌壇が詩壇より獨立し國文が漢文から離れて日また浅い當時のこととて、此等二序がさうした事情で並び稱せられることは強ち有り得べからざることはない。淑望は貫之とどれだけの密接さのあつた人かは知らぬが、彼の家學が儒學であり和漢の交渉が而かく緊密な當時の状態だけを前臺として、この漢譯に筆を染めたと謂つてもそれは極めて自然な妥當な事象として受けとれる。和漢朗詠集は公任の撰だといふがあの中の第二帝王に

仁流_二秋津洲_一之外。惠茂_二筑波山_一之陰。淵變作_レ瀨之聲。寂寂閉_レ口。沙長爲_レ巖之頌。洋洋滿_レ耳。

を採つて下に「古今和歌集序紀淑望」とある。公任のこの撰とても絶対に確實とは云へないが、此の出來たといふ長和二年（一六七三）は古今集撰進よりは僅かに百九年の後で閑に飽かして撰んだ公任の考證は一千二十五年も後の現代人が忙しい生活の一部を割いて考へるよりは正確であるべきだ。又花山僧正文琳は奏覽としては不都各かは知らぬが、簡結でもあり漢文口調で餘程面白い謂ひ方で、之れを個人の道樂として案出し得た淑望は竊かに自得のホ、笑みをさへ

洩らしたであらう。（漢作文家には斯種の苦心と満足を経験することが多い）では自分の名を公然題下に記したのはどうか？

といふに、これは聊か詭辯のやうだが、この事こそは正しく淑望の作であることを反面から立證するもので、彼の署名は之を傳へ聞いた他人の業である。漢文の序ならば一定の式作法もあつてその署名は已成勅撰の諸集をまねるべきで

「古今和歌集序 紀淑望」といふ法はない。

凌雲集の序は

序

從五位上左馬頭兼内藏頭美濃守臣小野朝臣岑守上

臣岑守言。……本文臣岑守謹言

文華秀麗集のは

文華秀麗集序

從五位下守大舍人頭兼信濃守臣仲雄上

臣仲雄言……本文……臣仲雄上。

經國集のは

序

東宮學士從五位下臣滋野朝臣貞主上

臣聞……本文謹上。

天長四年五月十四日

令義解のは

正三位守右大臣兼行左近衛大將臣清原真人夏野等奉_レ撰

臣夏野等言……本文……謹序。

弘仁格・貞觀格・延喜格等皆これと同一體裁でつまりは支那の序の模倣から來て居る。然るに藤原明衡（康和の頃の人）が本朝文粹を編むに當つてその第十一卷に

古今和歌序

紀 淑 望

として本文を載せた。是固より編纂の體の統一上もあるべきことで、他の作品とも一々題をあげて下に作者をあげて居るのだから尤もと肯づけるが、此より以後の歌人は此をさながらまねて同じく紀淑望を下に書くやうになつたものと想ふ。處で明衡は何によつてこの原文を蒐集し得たかといふに恐らく手稿本系統の古今集によつたものであらう。そこで余はこんなことを假定したい。始め古今集を撰進する時假名序は貫之の手で作つて別に一卷として添へ、貫之自身の手稿本には後に本文と一つにして巻頭においた處、段々この稿本が流布して淑望が此の漢譯に興味を覺えて、眞名序を作り相當の出來ばえなので貫之に見せた處が貫之は大層もてはやしてこりやあ妙だ位なところで早速卷末に加へて紀淑望の譯に係る旨をも附記した。さなきだに風流韻事を好む有閑階級の誰彼が之を傳へきくと等しく我もくとその擧に倣つた。そして藤原公任の頃にはその序の鑑賞さへも始まつて、遂にその數句が朗詠集にまで採られるやうになつた。多年の情性もあり、文そのものの固有の格調もあつて朗誦するとなると、假名序よりも眞名序の方がすつと引立つて聞える處から爾來眞名序は主としてこの朗誦的效果で生命が持續した。（現に故大町桂月氏などは日本文章史の中に眞名序の方が遙かに優つて居ることを思ひ切つた口調で論定してをる）後に明衡が文粹に取り入れる段になつてはいよいよ存在の地歩を占めて動きのない古今集序として通るやうになつた。而かも漢文は字畫が複雑なだけに轉寫の誤脱も少くて六歌仙評など完全に原作のまゝを傳へてをるのに、國文は假名のこととて轉々する中次第に誤脱が出來てその爲め今日ではかな序の釋を眞名序で補つて考察するやうにすらなつた。さて貫之は淑望の眞名序をめでて後に

新撰和歌を撰んだ時は始めからその擧に倣つて自身漢文の序を綴つた。その内容には歌道觀に對する多少の搖きはあつても大體華 兼備弘仁―延長の玄の又玄なる秀咏・和歌の徳―殊に教化諷刺の道・編次の體を變へたわけ、などが順序よく明確に述べられて末段には「士佐守在任中に撰を終へて歸京して見れば天皇（醍醐天皇）は已に崩御、勅を傳へた執金吾（中納言兼輔）も薨去の後とてがつかりした」といつて

貫之之秩雅歸日 將上獻之橋山晚松。愁雲之影已結。湘濱秋竹。悲風之聲急。幽傳。敕納記亦已薨逝。空貯妙辭於箱中。獨屑落淚於襟上。

と謂つてをる。四六駢體の浮靡の嫌はあつても大體漢文として體を得たもので、之を古今集の眞名序に比べると、眞名序の方がすつと和臭が多い。どうしても此はかな序をふまへるといふ拘束を忠實に守つた跡が見えるから、眞名序が先でかな序があつたと謂つた説は當らない。（そのかな序だつても拙ながら漢文の格調が取り容れてあるが、それは國文そのものの獨立分派日淺い故である）貫之の漢籍の造詣はその歌に詞書に紀行に見えて、漢文序の代作を人に依頼せねばならぬやうな貧弱な文章家ではなかつたことは是香の評言通りだと思ふが、併し自家謙遜の態度として自分の國文に他の漢譯を乞ふこと、丁度詩も書も畫も上手な畫伯が自分よりも拙い書家の贊を乞ふ場合もあると一般であらうからそれは有力な一理由とはなるまい。

そこで鎌倉初期新古今集の勅撰の時、凡ての規模の範を古今に採つて撰者も數々卷數も二十卷序もかなまな二序を入られた。かな序は京極攝政良經眞名序は六角黃門親經共に後鳥羽院の御旨を承けて代作した。然らば新古今の當時は古今の二序を始めからあるものと看做されたものかといふに強ちさうとは謂へない。少くとも前述べたやうな事情は當時の撰者や關係者にはわかつて居つた筈で、それは家隆手寫本や定家の嘉祿本などからでも立證し得られることである。にも拘らず二序を入られたのはその頃流布の兩序入の體裁を寧ろ文雅風流の態に適つたものと認しての採

定で、その爲め兩序をあげても作者の名はあらには擧げられては無く眞名序は

夫和歌者群德之祖百福之宗也。………本文

于^レ時聖曆乙丑王春三月云爾

とある。始めから集の一部として存在する眞名序ならば正に斯くあるべきだと思ふ。隨て親房の疑は一應は尤もな様だが實はこゝまで思ひ到らなかつた故であらうとも思ふ。

三、墨滅歌

一一〇〇の次に「家々稱證本之本乍書入^レ以^レ墨滅哥今別書之」として以下に物名五首と戀歌六首と都合十一首入つてをる。右の意は「各家の證本と稱する者にはこの十一首がそれ／＼附註の位置に一旦は掲げられながら、墨で消してあるものを無下に黙過するのめどうかといふので卷末に一括して掲げた」といふのだ。で、此十一首は基俊本や俊成本には本文の位置にあつて墨滅しにしてあつたものを定家が纏めたといふことに諸説一致して居る。

この事については二序のやうに古來やかましく詮義はされないが此も疑へば疑ふ餘地はある。六人部是香の古今集撰輯考にも「……さて其後貫之が四十年ばかり世に存し間は次々幾度にも加へも削りも爲つらむと思しきよしはまづ定家卿のころまでは諸本ありて一定せざりし趣なるを同卿の貞應二年に諸本を校合して將來の證本と爲られしを貞應本と云へり」とも「……定家卿の傳へられし本どもにも元より墨滅の歌どもありつるよしなるを、彼建久本に見えたる墨滅の歌はまた異なるなどに思合せ考れば建久本とても其本書に既に加筆傍書なども爲したりしをよくも其心得ざりし人の寫し取りしかば遂誤字脱文錯亂などの多く混淆する物なりと思やればなり」ともある。

處で代々の註釋家は此問題にはさほど觸れない。抄には何もいはず餘材抄には「これは定家卿の註なり」とだけある。

「古今秘抄・十口抄・傳心抄に數行記事があり、眞淵には放膽な獨斷論がある」ことは已に西下氏が國語と國文學（六卷一號十八頁）に述べられた。この西下氏の同所の論文は餘程精しいと思ふが俊成本の墨滅歌をあげられた中2・3・4は墨滅ではなく實は朱入ではなからうか、原本にはなくて他本で見つけて缺を補ふ趣意で書入れられたものと想ふが實物を見ないから強く主張する譯ではない。次に

「墨滅哥は新院本が他の異本との接觸によつて起つたもので、これと類似の現象は清輔本にもあるのである。俊成はこれを紀氏草稿ではないかと考へた爲めに忠實に書寫してくれたので、今日墨滅歌の謎を解くことができるのである」

との説こそ傾聴に値するものだが（愚考）新院御本は手稿本系統、歌學者系統の原本で他本との接觸がなくとも内部檢討によつて訂した處もあらうと思ふ。それは歌そのものが拙いから抹殺するといふやうな妄舉でなく例へば墨滅歌の

一一〇八 いぬかみとのこの山なるいさや川いさとこたへよわがなもらすな

一一〇九 山しなの音羽の誰のおとにだに人のしるべく我こひめやも

この歌重出のことは解釋の處に述べるが

これを卷十三「戀しくばしたにをおもへ紫の」といふ六五二の次においてあつたといふのだが、するとその次の卷十四の七〇二・七〇三に行つて

七〇二 梓弓ひきののつゞら末つひにわが思ふ人にことのしげけん

七〇三 要引のてびきの糸なくり返しことしげくともたえむと思ふな

このうたは返しによりて奉りけるとなん

第十 主要問題

とあるのと酷似の贈答になるから入れてよろしくば六九九以下に四首一括して列べるべきで、内容も左註擬作者も一致したものを何の必要があつて十三卷と十四卷に離して入れるか？とは一通り眼を通したものの直ぐと感づくことだ。で、編輯心理の上からこれは抹殺すべきだと見て後の二首を墨滅にすることもあり得ると思ふが、どうであらう。

次に「定家の註に家々證本之本云々とある「家々」は家々にある多くの證本ではなく、新院御本と清輔・教長・俊成など家々で書寫して證本としたとの意になり、今別書之は定家が今別に書いたといふのであることが判然としてくるのである」といはれたのは卓見であるが、定家は蓮華王院の貫之筆本の土佐日記を見つけ得て態々その一葉を敷き寫しにして世の貫之僞筆者や僞筆信者を警めた位の熱意があつたし、又古今集諸異本をも蒐集し得る便宜の境遇に居た人だから「家々の證本」といふのを新院御本系の三本と限定するのは少し狭くはないか、矢張文字通り當時の定家の能ふ限りの諸證本を見通しての言と解く方が妥當ではあるまいか。否從來の通説は略さう解して居る。

尾上柴舟博士の歌と草假名一〇七一〇八にも

「……これによつて見ると、種々の家に色々の本があつたと見える。乃ち書き傳へ寫し傳へる際に或は加へもし或は減へもし、或は反對に無意識に書き飛ばしもし、故意に省きもして、種々の本を作り出したのであらう。この本が一々残つてをれば、何本も證本があつて、極めて面白い事であるが無いのは眞に残念である。

とある。そしてこの續きに他本にはなくて元永本にのみある十三首があがつてをる。元永本は卷末に墨滅歌の欄はなく、それ等は皆一々その位置に挿まつてある。これが撰進本の面影をさながらに傳へたのかと想ふ。顯註でも墨滅歌の欄はなく、本文の部には一一〇四の「をきのるみやこじま」と一一〇五とが入つてをる。清輔本にも此欄はなく、旅歌の終のものが二行あつて以下空欄となりその裏一頁も空欄となり次から物名「空蟬」の歌詞があるから一一〇一・一一〇二の二首はないが一一〇三・一一〇四はある。一一〇四の歌詞は顯註も清輔本も「二句みやこべしまの」で貞應

本とは違つてをる。一一〇五はあるが位置は墨滅歌の指定欄より一つ前の「かたの」の下「桂宮」の上に在る（顯註の）も）そして一一〇六以下の五首はなくて最後の一一一一は六九七の貫之の

數島のやまとにはあらぬから衣ころもへすして逢ふよしもがな

の左傍に「或本此歌違三御本」として下に

ミチシラハツミニモユカムスミノキシニナフテフコヒラスレケサ

とある。（或本とは多分新院御本のことであらう）「いぬかみ」とこの山なる」の贈答は戀五、七五一の次に朱書で片假名で入れてある。（上にこの二首は御本には無いが或本にはあるとして）で、貞應本の墨滅歌の中一一〇八・一一〇九・一一一一の三首は清輔本にとつては朱入歌となつて居る。「要するに「これは元來古今集にあつた歌だ」といひ、「否やさうではない」といひ採歌の有無について問題となつた歌」と様に解くより外仕方がなからう。

四、左注・小注・ことばがき

集中左傍に「ある人のいはくききのおほきおほいまうちぎみの歌也」と様に註を加へたものが四十首あつて内五首は歌詞の一説八首は歌境の附言残り二十七首は擬作者を挙げたものでそれは別表の通りである。これがいつ頃から附記せられたものかは明言し難いが、とにかく原本にはなくても手稿本系統の書入本が本で擴まつたものであらう。眞淵は特に左註の考察をして一々その無根の妄説なる所以を説破した。以來左註は頭ごなしに誣妄として顧みられないが、仔細に一々をしらべて見ると必ずしも妄説ではなく本歌の解釋上非常に補ひにもなるし、又必ずしも當つてゐない場合でも本歌鑑賞の一説として面白いものもある。（そのことは個々の左註例のところに述べよう）文學・詩歌の本質から歌そのものを考察することに於ては後の學者の説の方が優つてをるが、その歌の作者や歌境や別態など凡て傳説的なことは

時代の位置の利と謂はるか左註に棄てがたいものがある。だが此は原本にはなかつたもので斯道熱心好事の輩の追書であらう。後年貫之が新撰和歌には一つも左註がないのを見ても彼の撰進振は推察されよう。

左註表

一、作者をあげたるもの

- 七 八六六 さきのおほきおほいまうちぎみ
- 九〇 二二二 二八三 ならのみかど、九〇は左注にすべきもの
- 一二五 橘のきよとも 三五五 在原のときはる
- 一三五 三三四 四〇九 六二一 六七一 九〇七 柿本人麿
- 六六四 七〇三 近江の采女 七〇二 一一〇八 あめのみかど
- 七二〇 なかとみのあづまう人 八九九 大友黒主
- 九五九 高津皇女 三七五 或棄てられたる女
- 四一二 旅にて夫に訣れし妻 八九三―八九五 昔ありける三人の翁
- 九七三 (失戀のため出家せる) 御津の尼 九九四 大和の國なる人の娘
- 二、歌詞のみのもの 五〇・二八四・六八九・八九二・八九四
- 三、歌境を附言せるもの 二六九・四〇六・一〇八二・一〇八三・一〇八四・一〇八五・一〇八六・一一〇五

今一つかな序に「小註」又は「古註」といふものがあつて殆ど本文同様どの本にも載せられてをる。中には一段下げたり割註にしたものもあるが時には本文と同様に並べ掲げられたものもある。清輔本には頭註脚註としてあげ元

永本には本文に挿めてあげてある。例へば

此歌あめつちのひらけはじまりけるときよりいできにけり

あまのうきはしのしたにて女神、を神となりたまへることをいへるうたなり。

と様なのがそれだ。

この小註は撰進本にも貫之手稿本にも無かつたのを天曆以後の歌人によつて加へられたものだといふ説が穩當であらう。此について古人先輩の所見の一端をあげると、

一、顯昭の序註、たゞことうたの處で小註が本文をもどいて之に代るべき歌をあげた。

やまざくらあくまでいろのみつるかなはなちるべくもかせふかぬよに

今注云。此花歌者。平兼盛詠也。然者。此註不可云貫之作。仍有此注之古今本。不可云貫之自筆歟或人云。公任卿之

注也云々。此儀宜歟

と、本書に今註といひ私考といふのは顯昭の考を述べたもので、即ち小註の作者を公任と推定した説を是認したもので、此が有力な典據となつた故か古來この小註を公任の作といふ説が一番有力である。

二、親房の古今集序註にも此に論及して

抑々この注の事古來異議あるべし。貫之此集を撰して奏覽しける本には無此注。老後に望て息女にあたへんが爲に、此書を書寫しける時注を書加へたりと云。一には貫之が所爲にはあらず後人の所加也云々。後人と云によりて四條大納言公任卿所爲なりと云説も有。宗匠の家には猶貫之が所爲と云事を用て、他人の説といふ事をば不可用之由しるされたり。然而今案にはいかにも貫之が所爲にと云ざるなり。先其證據は下の六義歌をおして一々不叶之由をしるせると、六義にあてたる歌は貫之が前よりの事なりと云とも、此序を書たる時尤事の仔細を載べきに無相違書つらねて奏覽の後の老後一々加難て法に書載けん事、惣てさるべしとも覺す。次には雅の歌の注に山さくらあくまで色をみつるかな花ちるへくも風かぬまにと云へる歌は平兼盛が歌なり。兼盛は

貫之以後の人なり。然ば後の人の所爲といふこと顯然なり。

顯昭の説の重複もあるが非貫之説として委しいものだ。

三、抄には

此注は貫之奏覽の本にはなし公任卿の所爲也と云宗匠家には貫之所爲といへる不審にや（是飛鳥井家聞書の義也猶口訣あり）

四、餘材抄には

これより下にいたるまである細注を古注といふ。又は小注といふ。一説に貫之なりといへどもしからず。下に六義にいたりて貫之をもどけり。もしきより此六義をさだめたらんを出して貫之のものとかれん事はさもあるべし。みづからさだめてみづからもとく事あらんや。又兼盛が歌を出せり。兼盛は貫之より後天曆の比の作者也。又公任卿なりといへどもしからず顯昭抄に公任注とてひかれたるは別に眞名なり。しかればたゞ天曆より後の或人の注と心得べし。心敬僧都私語といふ書にも貫之にあらずといふ云々。

五、一正義は單に貫之作を非定するのみならずその文旨をも卻けて天浮橋の處など「此古註はすべてひが言のみなるにこはわきていみじきひが言也」と極言してをる。

餘の諸説とても大抵以上の範圍を出でないものだから引用を省いておく。

唯一つ顯註擧ぐる「公任卿註云」が眞名序の漢文註ばかりだから、かな序の國文註も同一作者即ち公任であるといふ一説があるが、公任にそれだけの熱意と實力のあることは認められても、國文序と漢文序の論旨の衝突するものがあるから矢張別人の作と謂ふが至當であらう。例へば

いつにはたゞことうた

いつばりのなきよなりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

といへるなるべし

古註云 此は事のと、のほりたゞしきを云也。此歌の心さらにかなはず。とめうたとやいふべからん。

山櫻あくまでいるのみつるかな花ちるべくも風ふかぬよに

……

公任卿註云。五日雅。注云。齊正爲後世法其道述其美云々。稱聖時世也。又少雅有飲食賞勞宴賜云々。命飲宴賞

花月可レ用此鉢也。

とこれは論旨の相違あるものだが、尙奥に行くと萬葉歌人の山柿をあげた處には明らかに古註と公任註との別なものだといふことを示した處がある。

古註云。人丸

むめのはなそれともみえずひまかたのあまきる雲のなべてふれ、ば

ほのくゝとあかしのうちのあさぎりにしまかくれゆく舟をしぞ思

公任卿註に

あすか河もみちばながるかつらぎの山の秋風ふきぞしくらん

若し小註（古注）が公任の作ならば何もこの様に古註と公任卿註とを別ける必要はない筈である。

さてこの小註を無下に採る處なしとして排斥するのが近世以後現代訓詁家の常と謂つても可い程だが、併し一々順々に見て行く中には適註もあることは序の註の處にあげておいた通りである。よし又それが妄説であつたとしても此が天曆前後の歌學程度を示したものととして、歴史的の價値もある譯で唯一般の註のやうに頭から信じてはならないといふまでのことだと思ふ。

最後に長文の詞書についての問題がある。これも順次に見て行くと底本で詞書の行數

- 二行 六一六(イ)・八六八(イ)・八七一(イ) (イ)以外にはまだ澤山ある
三行 八・四二・四八・二五五・三三八・三五二・四一七・四七五(イ)・六四五(イ)・七八〇(伊)・八四八・八五八・八六九・八八五・九二
七・九三〇・九六九(イ)・九九三
四行 四一八(イ)・七〇五・七四五・八五三・八五七・八六二(大)・八八四(イ)・九〇〇(イ)・九二〇(伊)
五行 四一〇(イ)・六三二(イ)・八四七(大)・八七四・九七〇(イ)
六行 七四七(イ)
十行 四一一(イ)・九九四の左注(イ)

イは伊勢物語、伊は伊勢集、大は大和物語と交渉のあるもので殊に五行以上の長文は大抵伊勢物語と共通のものである。處から古來これ等の詞書を以て後人が伊勢に基づいて攙入した偽作たといふことになつて居る。けれども伊勢物語の出たのは少くとも延喜以前といふことに衆説が一致して居るし、それが歌境と歌詞とを併せあげて歌心の啓培に助けになるといふので當時盛に愛讀せられ、後には古今集と伊勢と源氏は歌人必讀の書とまで謂はれたことも此亦世人周知の事實である。この點から推しても、又長文の詞書は何も伊勢物語だけでなく伊勢集とも大和物語とも時には大鏡とも交渉のあるものもあり、又さうした交渉なしに長いものもある點から推しても、尙且これ等長文の詞書の文跡は他の短い詞書の筆致と相似たものである點から觀ても、此は後人の偽作ではなく撰進當時からのものではなからうかと思ふ。即ち當時散在して傳はらない歌と歌話とを苦心百方して蒐集し得た撰者の心理からいへば、それが斯様々々の場合に歌はれたといふことが判明した以上はそのまゝ集に收容したいといふのが本當であらう。せめて小注の公任に於ける程度にでも攙入の徑路を考察する資料があれば、又何とか別の斷案を下す手が、りともならうが、いつの頃誰の手に

よつて入れたといふ臆測もつかぬ位なのに此は後人の偽作であるといひ定めることは、余が前述數個の理由から撰進當時の原文であると推定するよりも以上に大膽な論定ではあるまいか。勿論これ等長文の詞書は決して完全なものではない。歌の詞書といふものはそれが唯歌詞の本文を鑑賞する管鍵でありさへすればよいもので、一から十まで述べ立ててきて肝腎の歌詞を見る頃には讀者にとつては無意味な誦讀の二重負擔となるやうなものであつてはならない。と斯うした見地から古今集の詞書を一々検討するなら無論不滿な點はいくらもあらう。けれどもそれとても何も長文のものだけに限つたわけではないのだから何としても、從來の研究だけを以てしてはこれ等長文の詞書は撰進當時からあつたもので、後人の偽作とは信ぜられないと思ふが、この點についても讀者の忌憚なき批評を仰ぎたい。

五、古今傳授

古今傳授は古今集の盛行と傳統・典型尊重の弊風とが産んだ畸形兒である。始めは古今集訓話の時をかたまの木・めどにけづり花と様の語が特別難解なものとして俊成が特記したといふが抑々事の始まりなのだが「古今傳授」の語が明瞭に物の本に見えたのは東常縁が始めである。

後土御門天皇の文明年間東野州常縁古今の秘訣知れるよしを聞き召して、遙々都へ上せてその講義を御聽き取りになつた。召しに應じた常縁は淹留三年多くの弟子を教へたが、遂に古今傳授の沙汰に及ぶものはなかつた。中に彼の宗祇は特に際立つた熱心家であつた。三年の月日もいっしか流れて常縁は任地へ歸東することになり、宗祇は名残を惜しんで遙々見送つた。行き往いて美濃の國山田の庄宮瀬川のほとりに至る。常縁その篤學と篤志に感じとう／＼ここで古今傳授をした。是が抑々古今傳授の嚆矢であるといふ。一帶この古今傳授の内容は何であるかといふに

一 古今和歌集全部の講義

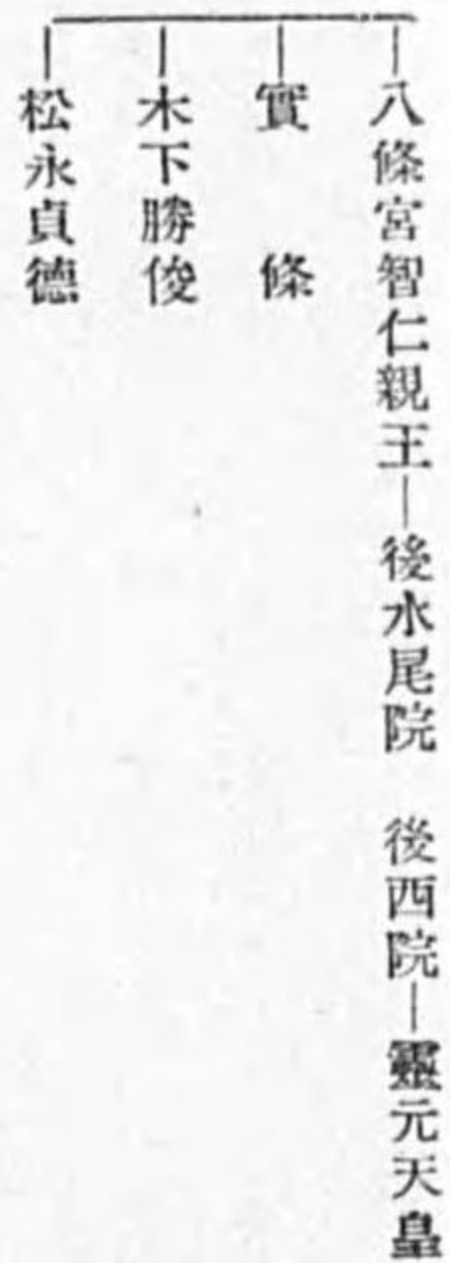
二、三鳥

百千鳥・呼子鳥・稻頁青鳥

- 三、三木　なかだまの木・めど・削り花
- 四、一草　かはなぐさ
- 五、古としの巻
- 六、初はなの巻
- 七、七首の秘事
- 八、八箇の大事
- 九、三たりの翁
- 一〇、八雲神咏
- 一一、二聖の傳
- 一二、六歌仙の傳

などで後に伊勢物語や徒然草の語句までも目録に入つて居る。そして此等に對して本質的な解を下すのならそれは極めて平明單簡なこと本書その項に説いた通りだが、之に神祕的牽強と傳説的附會とを加味して一個の稻負脊鳥の解に體と理と用との別をたてて滔々數百言を費して、勿躰振つた解をつけたものをば又御大相な裝飾をして（貴地の錦の守袋を真綿で包み更に古色のある墨塗の箱に入れて自給子の服紗に藏めたといふ）巻物の奥には一子相傳とか門外不出とか、他見禁止の意味を書き添へたものらしい。それをどうして常縁が傳へ得たかといふに各種この方面の類書あぐる所による

貫之—公任—基俊—俊成—定家—爲家—爲氏—頼阿—經賢—堯尋—堯孝—常縁
 と傳來したものだといふ。貫之から公任、公任から基俊は随分年代が飛んで居るが、そこは神變不可思議の祕法によつて感應で傳はつたものだといふ。此が宗祇に傳へられ宗祇から更に三派が分れて堺の肖柏から奈良の饅頭屋林宗に傳へたものを奈良傳授といふそして今一つは



と傳はつて居る。

この傳授が無意味な形式の傳統に過ぎないことは已に室町期の徹書記や、了俊や一條兼良や心敬僧都等の言議にもほの見えて居るが、明瞭に之を否定することは近世初期戸田茂睡などからで（その實彼も「つゝ」の傳授を受けてはなるが）荷田春滿・賀茂直淵・荷田在滿（彼がその國歌八論評に後世ヲ誤ル姦賊此常縁ニキハマレリと罵つたのは有名な語だ）契沖阿闍梨も本居宣長も皆同様に之を非難し宣長に至つては最早動かす可からざる定評とさへなつたので、明治以後の文學史家も之を一顧の價値なきものとし、あるいは唯文學史上かうした弊に覆はれた近古の歌學事象として歴史的に重大視せられる價値だけだとなつて居る。吾々も此には何とも辯護の道はなささうだ。が併し傳統を重んずることはひとり歌道といはずあらゆる學問・藝術・技術にあつたもので、大きくいへば此は我が國民性に根ざした一あらはれである。吾々は幼い時から牛若丸が鞍馬山の天狗から六韜三略を授かる繪を見つけてをる。又吾々は歌舞伎に於て映畫劇に於て唐木又右衛門の奉書試合といふのも見てをる。竹本座の操りには老近松の傾城反魂香に狩野四郎五郎の許嫁の土佐家の娘遠山が武隈の松を繪く家傳を彼に授ける場面もあり同じ近松の作槍の權三重帷衣に、眞の臺司の傳授場もある。活花の方にも皆傳免許があり、劍術・柔術・槍術・忍術・茶道・箏曲・尺八と様のものまで、近世から現代にかけて幾多この種の傳授物がある。畢竟傳授とは個人教授に勿躰のついたものに過ぎない。唯それが學級教授となり大衆教授となつた現代では慶長大判二十枚を拂ふやうな不經濟なしに容易に學校の講義や刊行の著書で知れるやうになつた譯である。南洋人はい

ざ知らず、東洋人は殊に我が日本人は非常に形式を尊ぶ性質がある。西洋文學の作品にあつたと思ふが「われはなるべく安あがり死ぬるから、醫者も呼ぶな薬もとるな死んだら有合せの空箱に入れて裸一貫で海へでもほつてしまへ」といふやうな考にはどうしてもなり得ない。人間死生の一大事には何としても近親知人が集まつて能ふ限りの形式を整へて吉凶を慶弔する。それが日本人としての禮儀でもあり人情でもある。この人情に加ふるに祖先崇拜の美風がありそれ等が段々進展すると家系尊重・系圖製作となる。この系圖製作の心理こそは古今傳授の心理とは曠一重皮一枚ほどしか隔たつてないものなのだ。況んや定家の末流三派が互に鎬を削るやうになつてはこれの種傳授はやがて黨争唯一の武器でもあつたのだ。更に室町時代歌人の生活が脅かされるやうになつてからはこれが又經濟的方便ともなつたものだ。のみならずよしや歌學の家の兒でも不肖のものならば、之を傳へず衆弟子の中の優秀なものに傳へたことや細川幽齋が田邊に籠城して惡戰苦闘の最中尙古今傳授を重しとして、件の傳授の箱と冊子を智仁親王と烏丸光廣とに傳へたといふことなど、美至上主義ともいふべき尊い因きも看られる。今や古今傳授はその内容が何々であるか。その傳統次第がどうであるか。その學問的價值や文學的價值がどうであるかといふことより更に歩を進めて、その存在の緣由動機は如何その存在によつて得た我が歌學史上の收穫は何々であるか、日本文化史上この傳授と他の傳授物との比較對照・日本文學史上歌學史上眞に古今傳授の爲めに割かれて然るべき頁は何程か等の考察に進むべき時となつた。

古今和歌集序

「序」といふ字義には

- 一、牆 爾雅に「東西の牆之を序といふ」
- 二、學校 禮記中の學記に「家に塾あり、黨に庠あり、術に序あり」とある。古代支那「周」の行政區劃に五〇〇家を黨といつて黨立の學校を序といひ二十五黨即ち一萬二千五百家を術といひ術立の學校を「序」といつた。
- 三、和訓で「ついで」とよみこれに二つの意があつて、
 - 1、秩序「ついでを正して……」
 - 2、兼攝「散歩の序に貸家を見つけ……」

四、文の一跡「文體明辯」に爾雅を引用して「序ハ緒ナリ字モ又叙ニ作ル言フ心ハソノ善ク事理ヲ敘シテ次第序アルコト緒ノ緒ノ如キナリ」

とある。こゝにいふ「序」もこの第四義ではあるが、今日普通「序」といへば卷頭に掲げる文で、之に自序と他序とがあつて、自序ならば「その書成立の由來や内容」をあげ、他序ならば「その書に對する批評殊に推讚の辭」をあげるのが普通になつて居る。若しこの種の文が卷末におかれたならば、それは「跋」といふものだ。で、文の一體といつても今日謂ふ所の「序文」を古文眞寶などにあげてある、玉勃が滕王閣の序、柳子厚が薛存義を送るの序、李太白が春夜桃李園に宴する序などに比べると時に相違のある場合もあらう。洋文の Preface といふものこの「序」に相當する。近頃は又「卷頭に捧げる」傾向があつて

この小さき抒情小曲集をそのかみのあえかなりしわが母上と、愛弟 Tula John に贈る（北原白秋 思ひ出）など書く。これは西洋の Dedicate の模倣で、その書が出来上つた時著者の心に第一番に見せたい人などに宛てる。これは序とは謂へなからうが巻頭文の一新體として趣味深いものである。

「集」は會意と象形とを兼ねたやうな文字で、木とから出来て「鳥が木によりたかる」意がもとで、「あつまる」「あつめる」と自動にも他動にも用ひる。支那で六朝時代には詩文の撰集を集と謂つた（此が、この集に近い）後には經史子集などいふ時の集は個人の詩集文集をさしていふやうになつた。我國の歌集には家集（一個人の歌集）と撰集とあつて撰集には勅撰と准勅撰と私撰とがある。勅撰には古今和歌集以後所謂二十一代集があり、准勅撰には萬葉集や新葉和歌集のやうなものが、私撰には古今和歌六帖、菅家萬葉集などその外澤山ある。さてこの書を「古今和歌集」と名づけたのはどういふ意か、これは北村季吟が「いにしへ、いまのことはをあつめられし心なるべし」といつたのが一番穩當であらう。この集の採歌範圍はこの序の中にも

萬葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らしめ給うてなん云々とあるが、漢文の序には更に加へて

家ノ集並ニ古來ノ舊歌ヲ奉ラシメ續萬葉集トイフ、是ニ於テ重ネテ詔有ツテ奉ル所ノ歌ヲ部類ニ勅シテ二十卷トシ名ヅケテ古今和歌集トイフ。

とある。即ちこの集の内容が古の歌や今の歌であるから「古今和歌集」と名づけられたものと見てよろしからう。尤この序文には「古」と「今」とを並べて

古へのことをも忘れじふりにしことをもおこし給ふとて……今もみそなはし後の世にもつたはれとて……などあつてこれをも書名に關聯させられないことはないが、前述季吟の解で盡くされて居らう。

「和歌」は「やまとうた」の音讀で漢詩に對する語、だが單に和歌とあるもので萬葉などにはこたへ歌即ち甲の歌に和して詠んだ歌といふのもある。「倭歌」とあるのは紛れのない漢詩の對語である。さてこのやまとうたといふ意の「和歌」といふ語は狹義では三十一文字即ち短歌をさすがこの集には短歌以外長歌や反歌や旋頭歌も入つて居るから、廣義でいつたものである。之を「ジャバニスソング」と英譯するのはどんなものだらうか、ソングとかバラッドとかいふのは聲にあげてうたふもので、我が原始の和歌にはよく合ふかも知れぬがそれは唄であり謠である。之を一種の文學として觀る吾々は矢張ジャバニスソングでも譯してほしいと思ふ。

この文は和文と漢文と多少の出入相違がある。漢文の方は卷末にあげるけれども、今は國文の序の解釋に便利なやうに、その部に相當する漢文の序を直譯したものを下に添へておく。

第一段 和歌の起源を説いたもの

やまとうたは人の心をたねとして、よろづのこととはとぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことをみるものさくものにつけていひいだせるなり。花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけばいきとしいけるものいづれか、歌をよまざりける。

夫レ和歌ハ其根ヲ心地ニ託シ、其花ヲ詞林ニ發スル者也。
人ノ世ニアルヤ、無爲ナルコト能ハズ。思慮選リ易ク、哀樂相變ジ、感ハ志ニ生ジ、詠ハ言ニ形ル。……夫ノ春鶯ノ花中ニ囀リ、秋蟬ノ樹上ニ吟ズルガ若キ、曲折ナシト雖モ各歌謠ヲ發ス。物皆之有リ自然ノ理ナリ。

「やまと」廣義では外國に對して我國をいひ、狹義では餘他の國に對して近畿地方の一國をいふ。「やまと」の語義については廣

文庫第十九冊七〇六一七〇などによるが便利だ。併しこれにしても科學的に精確なものではない。

- 一、山趾 天地さきわかれて泥濘かはかざるによりて山にゆきかへる跡多き故に山へ往き來の足趾をつまめて「山趾」といふ。
- 二、山止 天地開闢の始め、一般の平地はまだ固まつてなかつたので、民草は皆山に登つてそこに止まり棲んだ。そこで「山止」といふ。

といった風である。その他

- 三、後漢書卷一光武帝紀の

中元二年東夷倭奴國王遣使奉獻

とある處から日本人までがよい氣になつて「倭奴」と宛てるやうになつた。さうかと思ふと

- 四、「日のもと」といふ意で「日本」と自稱してゐるのをこんどは支那人が音でまゐつて「ジッポン」といひだした、それを又英人がまゐつて「ジャパン」といひ獨逸人までまゐつて「ヤパン」といふやうになつた。尙又支那の古記録には

- 五、「耶馬臺」ともある。或人は耶馬を野馬即ちヤンマ(蜻蛉)と解き神武天皇が御即位後大和の富見の丘に上つて國見をせられ國形を「蜻蛉」となめせるが如し」と仰せられたから我國を「あきつしま」といつたり耶馬臺といつたりするのだともいふ。

近頃坪井九馬三博士は

- 六、山は「木立ある處」「こ」は入口の「門」耶馬臺は山に設ける一時的の儼屋即ち野立所、營、陣屋の義である。(我が國民國語の曙一一五一一一六、一八〇一一八一)

といはれた。何れにしても我國國語目下の進度では、權威ある語源辭典が得にくいので、諸先覺の説を注意して見よう。外仕方がない。(以下語源論はいつも同様と思つて下さい)

ひとの心 一本「ひとつ心」とある。修辭上「ひとつ心よるづことのは」は對句になつて句調はどの方が宜しいが、こゝは和歌の起源本質を説かうといふのが主だと想ふから、矢張流布本の「ひとの心」を採る。詩經の序の

詩ハ志ヲ云ヒ歌ハ言ヲ永クス

とある「志」に相當するものが「人の心」である。ことわざしげきもの「ことわざ」とは人がこの世で出くはす人物事象の凡てをいふ、この集あける所は

- 四季、賀、離別、羈旅、哀傷、戀

などで後世更に神祇や釋教をあげるが、歌にすべきことわざはこれ等數種に盡きるものではない。人間到る處に繪があり詩があり歌がある。英のラスキンは詩的情緒として愛情・尊敬・欽仰・喜悅・嫉忌・憤怒・恐懼・悲哀をあげたが、これでもまだ不十分なことは夏目漱石氏の文學論にある通りである。例へば「三逕荒に就き松菊猶存す」といひ「悠然として南山に對す」といひ「山中曆日なし」といひ「一杯一杯復一杯」といつた風の悠々閑適の情や自適の情も歌にならうし、「玉だれのながめやいづら」「いつしかとまたく心を塵にあけて」「いくばくの田をつくればか時鳥」「山吹の花色衣主や誰れ」といつた風のなかしみ、源氏物語夕顔・須磨などに見られる物の怪や高潮、近頃のものが漱石氏の「琴のそら音」の切支丹坂の描寫、外國ものが沙翁のオセローの「殺し」の場のあとの笑ひといつた風の「無氣味さ」や、通常よく文學の論題となる悲哀の快感なども容に歌ふことが出来る。花になく驚云々。古來賞美の對句である。作意は凡そ生きとし生けるものは皆それ相應の歌がある。況や萬物の靈長たる人に於ては是非に歌はなければならぬといふに歸する。驚は一名を春告鳥といつて、萬葉集以來歌の集殊にこの古今集では春の景物の大立物である(支那の黃鳥西洋のナイチンゲールに當るが全然同じではないといふ)。本集四・五・六・一〇・一一・一三・一四・一五・一六・二二・三三・三六・一〇〇・一〇五・一一〇・一二八・一三一・四二二・四二八・四九八・九五八・一〇一〇・一〇八一は何れも驚を歌つてある。(この種のことば題材索引を繰れば直ぐわかる)妙なことに後世の小倉百人一首にはこの驚を歌つたものは一首もない。この例外を支那で梅を取材しなかつた「楚辭」といふ本に配して狂歌師が

百人一首にとり殘されし驚の楚辭に入らざる梅に來て啼くといつた。かはづとこゝにあるのは當時並に萬葉時代にはかじか(河電)を指したもののが、後世この文にあるかはづを文字通り蛙とつて

鶯も蛙も同じ歌仲間うたよむもあり經よむもあり
手をついて歌申し上ぐる蛙かな

苗代の色紙の中の蛙かな

などいふ。正義に「かはづは今河鹿といへり彼が聲はほがらかにさえわたりてきくにたへたれば、古より人のめではやすもの也。常に山河の水底にひそむものなれば水にすむといふ。さるは秋をむねとなげば春鶯とむかへてその聲の世におもしろきものをあげたり」いづれか云々、は反語で「いづれも歌をよむ」ことを強調するところだから文法上「いづれか歌をよまざる」とした方が簡明だ。

和歌は人々の心をもととしてそれが表れて色々の詞となつた。凡そこの世の中にある人々は、一代の中いろいろなめにあふものだから、そのたびごとに、心の中に思ふことをその見聞きするものにつけていひ出したのである。かの花になく鶯や水にすむかはづの聲をきくとがりそめにもこの天地に、生を托してゐる何一つとして歌はないものがあらうか、(他の生物すらさうだからまして萬物の靈といはれる人間に歌があるのは當然といつてよろしからう)

藝術は吾人の遊戯本能から生まれるといふものがあり(遊戯説)模倣の本能によつて自然をまねて第二の自然を作る處にこのものの始源があるといひ(模倣説)吾人の生活は自家保存と子孫増殖とを第一義とするものだが、若しもこれ等の要求を満たしてまだ餘裕がある時に藝術が生まれるといふ。(生活餘剰説)けれどもそれ等にも増して安當な説は他の科學や宗教や道徳と同じく藝術も亦人の先天的賦性の一つであるといふにある。(藝術人性説)若くは藝術固有本能説とも謂ふべきもの)本文も亦和歌は人間の心に萌したものだといふ點は「和歌性情説」ともいふべく、この見地から見ると正しい。けれども「人の心を種としてよろづのことは」になつたものといへば、和歌の外凡ての文學が入り、文學の外凡ての文字的表現が入るから今日から観ると和歌の本質をいふ語としては少し逸として居る。「人の心の中高潮に達した感激」をば「よろづのことは」の中最も精煉した「形で表したのもの——それが詩である。(和歌も詩の一つ)と説きたい。

第二段 和歌の徳

ちからをもいれずしてあめつちをもうごかし、
にみえぬおに神をもあはれとおもはせをめとこ女の
なかをもやはらげ、くたけきもののふの心をもなく
さむるは歌なり。元語ナリ

是ヲ以テ逸スル者ハ其聲樂シミ、怨ムル者ハ其
吟悲シ。以テ懷ヲ述ブ可ク以テ憤ヲ發ス可シ。天
地ヲ動カシ、鬼神ヲ感ゼシメ、人倫ヲ化シ、夫婦
ヲシテ和セシムルハ、和歌ヨリ宜シキハナシ。

ちからをもいれずして云々和歌の神秘的効果をあげたもの。傳説によれば一年の夏連日雨無く、炎熱愾中の感ある時、朝廷の御召に應じて小野小町が神泉苑で雨乞の歌を咏すると、不思議にも、一天俄かにかき曇つて沛然たる洪雨盆を覆へさんばかりに降つたといふ

元祿蕉門の高弟寶井其角も亦

夕立や田をみめぐりの雨ならば

の一句で、美事夕立を降らせたといふ。そこで川柳子がこの二人を読んで

男十七女は三十一

といふ。一生を歌に凝つた能因法師も亦

天の河苗代水にせき下せ天くだります神ならば神

と咏んで雨を降らしたといふ。その他和歌にはこの種の傳説が澤山ある。否あまり澤山あるので宿屋飯盛が之をひやかして

歌よみはへたこそよけれ天地の動き出してはたまるものは

といつた位だ。めにみえぬおにかみをも云々 昔伊賀の逆臣に千方といふものがあつて、鬼神の助けによつて勢猖獗を極めたが、

の方に、

土も木も我大君の國なればいづくか鬼のすみかならまし

と咏むものがあつたので、鬼神は之に感じて千方をふり棄てて逃げたので、間もなく逆徒は平定したといふ。(これはこの好例に、ようといふので誰かが作つた傳説であらう。季吟もこれの出所は疑はしいといつて居る。)伊勢物語百十七には

昔、帝、住吉に行幸し給ひけり。

わが見てもひさしくなりぬ住吉の岸のひめ松いくよへぬらむ

御神現形したまひて

むつまじと君は知らずや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき

とある。そして木居宣長のいつたやうに、これはお供の人が「わが見ても」と咏んだので明神がそれに感じて御返歌になつたといふ作意で、丁度この所によく適つて居る。後のことだが古今著聞集卷五に和泉式部が夫の不機嫌が直るやうに貴船の神に祈念を捧げ

て
ものおもへば澤のほたるも我が身よりあくがれいづるたまかとぞ見る

と咏むと、神殿から

おく山にたきりておつるたぎつせのたまらるばかりものなおもひそ

としのびやかに御返歌があつて、やがてその御利益が見えたのであるなどがふさはしい。なとこ女のなかなも云々 本書九九四や一

一一〇や前掲和泉式部の歌などが、その適例である。尙一例をあげると

ある年白濱貫徳といふ人、製茶賣弘めの爲め飯島に行つた時、さる人の妻、この頃夫が外し女に心を奪はれ、内を外なる振舞に

ひどく歎いてゐるのを見かれて、その知人にあてて

朝夕に歎でくらす妻子ありと知らずて君は花がめづらむ

と諷めたので、その人それより前非を改め夫婦相合の慶びを見るに至つたといふ。(西村天因・磯野秋渚共著今古歌話) たけきもの
ふの心をも云々。これも後のことだが、前九年の役に源義家が逃ぐるを追うて敵將貞任に迫り、弓に矢をつがへて

衣のたてはほころびにけり

と歌ひかけると、貞任はさしもの危機にもひるまず

年を経し絲、亂れの苦しさに

とかへしたので、義経はこの一句に心和んで、つがへた矢を外してゆるし走らせたといふ。これなどが丁度適例であらう。(この註によく萬葉集十六卷の采女の歌があつてゐるが、これは相手の葛城王が武士でないから不適切でもあり、これについては少し思ふ所があるから本文の段に説かう)

力も入れないで天地を動かす、目にも見えない鬼神に物のあはれを感じしめ、男女の仲をも和合させ、あら〜しい武士の心をも慰めるものは實にこの和歌に外ならない。

尙和歌の徳の例話をあげると、

明治初期の女流歌人としても、淑徳高き婦人としても有名であつた、税所敦子が夫につれられて始めて夫の郷里鹿兒島に歸つた時、その姑といふのは名うての邪慳もので、或時敦子に「お前は歌が上手ださうなが一つわたしの下句につけてもらいたい」とて、

鬼婆なりと人のいふらむ

といつた。敦子はしばし打傾きやがて苦もなく

佛にもまさる心と知らずして

とつけたので、流石の姑もこれに氣が折れ、それが機縁となつてだんく敦子を信頼し、彼女が藩主に召された時には

泣いて「今御身に知られてこの年寄は一日片時だつて暮らすことが出来ないから是非辭退して家にゐてくれるやう」と懇願した。

難波の鴨橋に松永春庵といふのは性來和歌を唯一の楽しみとして居たが、或夜推敲の最中「ミシ／＼と音がするので、ヒヨイと顔をあげると夜盗が垣ごしにしのび込まうとする處だつたので、早速

垣こえてしのびに手折る花の露やがてその身にかへるべきかな

と咏むとその盗人にもいくらかの素養はあつたものだらうが、この一首にふかく慚ちてやがて「コソ／＼と立ち去つた。が、その翌年誰からともなくこの家に一首を贈つてきた。

言 葉の葉たよりて人の世の正しき道に立ちかへりけり

又或癩癖の隠居のある家へ、正月早々やつて來た賀客が持病の癩癩を起して、門松にもたれかゝつて泡をふいて居たので人々があわてて扶け起して手當をして本人の宅へ歸らせた。で、事は濟んだものの、隠居の胸はムシヤクシャとして「なんだ縁起のわるい、正月の朝つばらから癩癩持にかけこまれたりして……どうもことしは縁ではゆくまい」と苦りきつて居ると、そこへ又年賀に來たのは、狂歌も少々はいける馴れた先生で、之をきくと手を拍つて、「イヤこれはおめでたい

門松にもたれて泡をふくの神これやめでたきべきいてんかん

と咏んだので隠居の機嫌も直り一家も事故なく吉日を過したといふ。してみると、和歌の徳は邪慳な姑に感化を與へたり、盗人を改心させたり、縁起直しをしたり、また／＼澤山の徳があるやうである。近頃は又もつと高く深い見地から人間性の中最も神に近い表現として藝術があり、藝術の中でも最も多く神性を帯びたものは文學で、古來和歌に神祕の傳説の多いのは、この意味に於て興多いことだ」と様に説く人もある位だ。

けれども余の觀る所を忌憚なくいふならかうした傳説は、少しも和歌の地位を高める所以ではない。物の極致を謂はうなら、ひとり和歌とは限らない何の方面にも天地神人を感動せしめた神祕譚がある。巨勢金岡の描いた馬の話や飛驒内匠の泣き龍とか都良香の竹生鳥明神との聯詩、博雅の三位が羅生門外の魔笛、といった風の藝術奇譚を始めて徒然草には土大根の靈が人を救ふたとあり、雨月物語には夢應の鯉魚がある。譚としては面白いが藝術論としては荒唐無稽な迷信譚に過ぎない。

のみならず今日の文學論から觀て「和歌は云々の功德あるが故に貴い」といふのは一種の功利的藝術觀で、そんなことをいはいより、單刀直入「和歌は和歌それ自身の爲めに貴い」と謂ひたい所だ。

唯この一段の面白い所は、之を以て延喜朝廷頃に於ける歌觀が略どんなものであつたかを察知し得る一事である。あの頃の人々は和歌をこの様に考へて尊重したといふことは、我邦歌道史の考察上確かに意味がある。かの後來古今傳授で大驅ぎをする歌人の思想も、もとをたどればこの邊に胚胎して居るのではなからうか。

第三段 和歌の起源

此歌あめつちのひらけはじまりけるとさよより
いできにけり。俊成「あまのうきはしのしたにてめ神なをこ
神となりたまへる事なりことなひへるう
たなしかはあれども世につたはることは、ひさか
たのあめにしてはしてはひめにはじまり清原「したてる
はあめわかみこの女世せうとの神のかたちをかたにうつりて
かひやくなよめるす俊成うたなへしこれらほもじのかず

もさだまらすうたのやう「あらがねのつちにしては、すさ
にもあらぬことども也」あこりける。ちはやふる神
のをのみことよりぞ」あこりける。ちはやふる神
代にはうたのもじもさだまらずすなほにしてこと
のこゝろわさがたかりけらし。人の世となりて、
すさのをの「みことよりぞ」、みそもじあまりひと
もじ・はよみける。「すさのをのみことはあまてるおほん神
とて、いづもの國に宮つくりし給ふとき、そのところ
にやいろの（元節）くものたつをみてよみ給へるなり

やくもたついつもやへがきつまごめに
やへがきつくるそのやへかきを

かくてぞ、花をめで、とりをうらやみ、かすみを
あはれみ、つゆをかなしぶ心こと葉おほくさまさ
まになりける。遠き所もいでたつあしもとより
はじめりて、年月をわたり、たかき山も、ふもと
のちりひぢよりなりて、あま雲たなびくまでおひ
のぼれる・ことくに、このうたもかくのごとくな
るべし。

然シテ神世七代、時質（すなは）ニ人淳ク、情欲分ル、コ
トナク、和歌未ダ作ラザリキ。素盞鳴ノ尊ニ逮ビ、
出雲ノ國ニ到リ、始メテ三十一字ノ詠有リキ、今
ノ反歌ノ作也。
其後天神ノ孫、海童ノ女ト雖モ、和歌ヲ以テ情
ヲ通ゼザルモノナシ。

爰ニ人ノ代ニ及ビ、此風大ニ興リ、長歌・短歌・
旋頭・混本之類、雜體一ニ非ズ、源流漸ク繁シ。
譬ヘバ猶雲ヲ拂フノ樹ハ、寸苗ノ煙ヨリ生ジ、
天ヲ浮ブル浪ハ一滴ノ露ニ起ルガ如シ。

なには津の歌はみかどのおほんはじめなり。

「おほささぎのみかどのなには津にてみこときこえける時東宮を
たがひにゆづりてくらゐにつきたまはで三年になりければ
王仁といふ人のいぶかり思ひてよみてたてまつり
けるうたなりこの花は梅の花をいふなるべし」
あさか山の
ことのははうねめのたはふれよりよみて

難波津ノ什ヲ天皇ニ献リ、富緒川ノ篇ヲ太子ニ
報ズルガ如キニ至ツテハ、或ハ事神異ニ關リ、或
ハ興幽玄ニ入り、但上古之歌ノ多ク古質ノ語ヲ存
スルヲ見テ、未ダ耳目ノ翫ト爲サズ、徒ニ教戒ノ
端ト爲ス。

「かつらぎのおほさきをみちのおくへつかはしたりける時にくに
のつかさごとおろそかなりとてまうけなどしたりけれどすさま
じかりければ、うれめなりける女のかはらけとりてよめるなりこ
れにおほさき心の心とけにける」
このふた歌はうたの父母のやうにてぞでならふ人
のはじめにもしける。

此歌あめつちの云々 嚴密にいふと天地開闢のはじめは造化の三神の時で、この時に和歌があつたかどうかは今日不明であ
るが、こゝは大まかに諸冊二尊の御代をさして天地開闢といつたものである。あまのうきはしのしたにて云々 以下分註は延喜撰進
當時の本文には無くて後人が補つたものだが、傳來久しくして普通原文に併せ載せられてあるから、本書も之に倣つて全部を掲げて
説明しておく。(清輔本は頭註脚註とし頼阿本は本文と同大同列にし他は多く脚註としてある)併し時にはひどい誤謬もあるからそれ
はその都度断ることにする。そして、この註を入れたのは誰であるか、についても異説のあることは別項に説く通りである。
天浮橋は高天原朝廷代天上と地上の往來に便するために架けられた橋と想へば宜い。(詳細は記紀の註釋本にある)め神は伊弉册

尊、を神は伊非諾尊なりたまへるとは「結婚せられた」とする。この事實は記紀で有名なもので、その時男女二柱の御神が發せられた。

熹哉遇可美少女焉。熹哉遇可美少男焉。

は五五の音律で、好配神に遇はれた神の悦喜を表されたもので、これが我國和歌の起りだといふ意。

ひさかたの枕詞凡て天界の自然物や自然現象の名の上におく。この集では

二六九の雲、一七三・一七四・三三四・七五一の天、一九四・四五二の月、八四の光、一〇〇二の晝

の上に使つてある。語義は「ひさかたの」の約で大空のことを穹窿などいふ漢語に近いともいひ「日射方」の約で、太陽の光線のさして來る方向即ち天界の枕詞になつたともいふし、滑稽なのは、太古原始の渾沌から天地が分れた時、天の方が前に堅まつたから堅まつてから久しくたつといふので「久堅」などいふ。あめにしては高天原朝廷時代の意とすればよろしからうが記紀の傳ふる所によると素戔鳴命の方が前で、下照姫は後で、下照姫は國神の姫君であるからこゝは對句を仕立てるためにおかれたものであらう。

天若日子。古事記に天孫降臨の前提として、國狀視察の爲めに天菩比神を遣はされたところが三年たつても復命しないので今度はこの天若日子を征討使として精良な弓箭を賜はつて降されたが、これも國つ神の姫君下照姫を妻として復命を怠つた。そこで復々高天原會議が始まつて結局名鳴女を遣はして様子を視せしめられたが、木の枝にとまつてゐる處を天若日子が一箭で射殺した。弓勢が餘つて作の箭は高天原まで届いた。皇祖神が之を見て「これは曩に天若日子に與へたものだが、血がついてゐる處を見ると下界は今何か事があるのだらうといつて、その箭を遣り返されたらそれに當つて天若日子が死んだ。最後に建御雷之男神と天鳥船神とを遣はされたところが、この二柱の神が始めて使命を全うした。(日本書紀には一天穗日命二三熊之大人、三天稚彦四無名稚 經津主神・武甕槌神とあり、祝詞崇神遷却祭には一天穗日命二武三熊野之命三天若彦 經津主命・武甕槌命とあり神名や、事柄も多少の異同があるし、出雲國造神壽詞の本文によると天菩比神は立派に復命して居るが今本講義に關係ある部分だけをおけておく)さて天若日子の死につき方々から吊ひに來た。中にも姫の兄神味耜高彥根神は容貌が甚だよく天若日子に似てゐる

るので、他の神々がまぢがつて「あゝ天若日子はよみがへりました」といつてその御神に纏つた處が、兄神は以ての外だと激昂して「吾を死人によそへるとは何事ぞ」とばかりに席を蹴つて去られた。その時妹の下照姫が歌で以て「あれは私の兄です、實に立派な兄神です」と嘆美的に素性をあかされた歌は

天なるやおとなばたのうながせるたまのみすまるあなたまはやみたにふたわたらすあぢきたかひこれの神ぞや
(「かの高天が原でいと美しい棚機つ姫がうなじに飾りとしてゐられる穴玉(孔を穿つて紐を通すやうにした精巧な玉)のきらきらしさよ、その玉のかゞやく如く谷ふた谷までも光かゞやくあの神は我が夫の神ではなく兄神なる味耜高彥根の神ですぞ」との意で始めの六が、りの形容のゆつたりとした處が殊に面白い)えびすうた。古事記にこのつゞきとして「此の歌は夷振なり」とあるのから來たもので、この夷振といふのは世雅樂などと呼んだ名稱で多く最初の歌詞をとつて「宮人振」「天田振」などいふ。本書大歌所の歌にも近江振・水葦振・しほつ山振などあつて歌詞は皆その詞が一の句に入つて居る。するとこの歌は一の句「天なるや」をとつて「天なるや振」とすべきだが、こゝは書紀の方がくはしくて、この歌の次に

天さかる夷つ女のい渡らす瀬と石川片淵

片淵に綱張り渡しめるよしよより來ね石川片淵

とあるその「夷つ女」から來たものだらうといふ。後世「夷曲集」とか「ひなぶり」とか「へなぶり」とかいふのはこれとは又別で略「狂歌」といふに當る。にこれらほもじのかすも定らすうたのやうにもあらぬことども也。とあるのはこの歌を一寸見れば成程と思はれるが、古事記を讀んでその前後の文と比べると明らかに韻文の趣を具へて居る。

五、七、五、七、五

と大體七五を基調にして進んで來たものが、「あな玉はや」と感歎句になつて六音に崩れ以下は兄神の固有名詞のために三、六、四、六、四、(若くは九、十、四)となつたものでこの註は少しどうかと思ふ。(尙この天若日子は室町期お伽草紙をはじめ多くの文學に取材せられた)あらがねの 荒金を含むところから土の枕詞となつたもの(眞淵の冠辭考)とも、荒金は鎚で鍛へるから

同音の土にかゝる(石原正明)とも、殿裡で家の土臺は土だからとも、眞淵のでよるしいが生金で掘出されたまゝの金といふ意で眞金に對してなま金といふことだ(谷川士清)ともいふ。「あらかれの土」とつゞけた詞は、忌部、色夫知の祝詞や菅家萬葉集などが早いといふ(谷川士清和訓業)

契沖も

菅家萬葉集に

あらかれのつちのしたにてへしものをけふのうらてにあふをみなへし
ふるきものにはこれならではみえぬにや(古今餘材抄第一)

と謂つて居る。さて素盞鳴命を「あらかれの土にしては」といつたのは同じ續きに

すさのをのみことの御歌は、下照姫の歌よりさきなれど、此國にてよませたまへば、つちにしてはといふ

とある。けれどもこゝは唯單に詞のあやとして對句に仕立てる爲めに「ひさかたの天にしては……あらかれの土にしては……」と謂つたものに過ぎなからう。尤も話の内容から觀ると下照姫のは神話的で、素盞鳴命のは人間的で甲を神代の話乙を人代の話といつてもふさはしいやうにも想ふ。ちはやふる。道速振(記)殘賊強暴(紀)など宛て、萬葉では千磐破(二)千早振・千石振・千羽矢振・千葉破(以上十一)千波夜夫流(十七)知波夜布留(二十)など宛て、稜疾振るといふので神にかゝる枕詞(眞淵)とも、たぎちはやぶるの意(鹿持雅澄)とも、風疾やぶるの意(同上)ともいふ。萬葉では神・宇治・かれのみさきの枕詞につかひ、本書では

- 九〇四 うちのほしもり 一〇〇五 かみなつきとや
- 二五四 かみなびやまの 二六二 かみのいがき
- 三四八 かみのきりけむ 一〇〇二 かみのみよより
- 二九四 かみよもきかす 一一〇〇 かものやしろのひめこまつ
- 四八七 かものやしろのゆふだすき

など使つてある。(以下枕詞の用例は枕詞索引を参照ありし)さて「ちはやふるかみよにはうたのもじもまたまらす」とは、神代の

昔にはまだ歌の音數律が一定してゐなかつたといふ意味で、記によると前掲下照姫の歌よりも前に八千矛神と沼河比賣の贈答歌や、同神と須勢理毘賣命の贈答歌がある。(素盞鳴命のは別として)何れも音數不定である。降つて神武天皇が八十建討伐の時の御製

おさかの おほむるやに 人澤に 來あり居り 人さには 來あり居りとも みづくし くめのこらが くぶつゝい
石つゝいもち うちてしやまむ みづくし くめのこらが くぶつゝい 石つゝいもち 今うたげよらし

といふのも音數排列は四、六、五、五、七、五、五、七、七、五、七、五、三、であるし、神功皇后が皇子の御爲に伊弉和氣大神に醴酒を供へられる時の御歌は

この御酒は わが御酒ならず くしのかみ とこよにいます いはたす すくなみかみの かむほぎ ほきくるほし
とよほぎ ほきもとほし まつりこし みきぞ あさすをせささ

で、五、七、五、七、五、七、四、六、四、六、五、三、七、(五、二)となつてゐる。その他記紀に散見するもの概ねこの類である。次に「すなほにしてことこの心わきがたかりけらし」といふのはきまつた解釋がない。或はこれは前の「ちはやふる神代には」からすつとつゞいて皆餘計の文句で原文にはなくて前文から直に「人の世となりて」につゞいたものだ。(富樫廣隆)といふ。この方が文脈上合理的である。或は多少語句を訂正して

あらがれの土にしては、すさののみことよりぞおこりける。人の世となりてぞみそ文字餘り一文字はおこりける

とせよといふ(香川景樹)これは上二つを神代として、入皇の代を對立的にあげようといふ意から觀ては道理がある。けれども神人の二世はむしろ始めの下照姫と素盞鳴命で表したものと想はれるし、以下の註文の「やくもたつ」は明らかに三十一文字であるし、尙又この訂正案の口調は雅醇を缺いて居ると思ふ。之を漢文の序と對照すると、こゝの句に相當するものは「時質=人淳ク情欲分ル、コトナク、和歌未ダ作ラザリキ」といふのだが、國文の方が「和歌はあつたが文字の數が定まらなかつた」といふのに對して、漢文の方が「詞はあつても和歌はなかつた」といふのとは大變な違ひであつてこれは國文の方が正しからう。けれどもこの漢文の序を參

酌してこの本文を生かすやうにしひてこせつけるならば

人情が惇樸で言葉の技巧などのわきまへがまだ無かつたらしい

とでも解し得ると思ふ。諸君の御批評を俟つ。このかみは「兄」だがこは彼のアラザールと同様に「男兄弟」といふ意。(契沖はこの語然るべからずとして色々の用例をあげてゐる)女とは櫛名田比賣(奇稻田姫)でこの事實は大蛇退治の一段で今更いふまでもあるまい。やいろのくもは「やくもたつ」のやくもを穿きちがへたもので、うそである。「やくもたつ」の歌 いやくもたつ盛んに雲がたつ、いづもいでくもで立ち出でて居る雲のこと、それを出雲の國のとるのにはよくない、この國名は却てこの歌から産まれたものといはれてゐる。つまごめに「妻をこめておく料として」と解いてもよろしいが「つま」は男女互にその配偶をいふ稱へだから「夫婦ごめ」ととつて「ごめ」はくみど(殿所)の語系、「に」はなす(如)といふ形容詞的助動詞の第二活用形。さうむづかしくはないで一口にいへば、夫婦ぐらしの住宅にせよとばかりにいつた風の句である。「その八重垣を」の「を」は古い感歎助詞。

自分がこの須賀の地に宮造りなすると雲までが盛んに立ちこめて我がすみかをとほき顔に幾重の垣をなしてたなびいて居る、

か。く。て。ぞ。云。々。 以来この道が益々盛大になつたといつたもの、花をめで 萬葉以後梅・櫻・藤・山吹など花をめでた歌は非常に多い本書では

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

を始めこの種のもは春秋の味の大部分を占めてゐる。(題材索引参照)鳥を羨み うら(心)やみ(病み)で羨望の意となつた語だが、こは唯四つの述語に變化をつけるために「めで」としなかつただけである。季吟が「鶯の花に馴るゝを羨むやうなる心なるべし」

といつたのは當らない。鶯・鶯・時鳥・雁・千鳥などの味は殊に多い。本書でも 春來ぬと人はいへども鶯のなかな限りはあらじとぞ思ふ

など随分澤山ある。かすみをあはれみ 霞を興ありと見る。季吟は

かすくゝに我を忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ

を引例してゐるが、こは他の、めで、うらやみ、かなしび、と對して霞そのものの興趣をめでることであらう。かなしぶは可憐しぶでおもしろがること「悲しがる」ではない。遠きところも云々 小を積んで大を成すといふ意の語で、白樂天の座右銘

千里ハ足下ニ始マリ 高山ハ微塵ニ起ル 吾道亦此ノ如シ 之ヲ行クコト日々ニ新ナルヲ貴ブ

の附點の句意が之に近い。なには津の歌「大鶴鶴の帝」は仁徳天皇のこと、御生れの時み、つぐが産屋に飛び込んだので應神天皇が何の兆かと老臣武内宿禰にお尋ねになると「それは不思議です、私の宅にも男の兒が生まれましたが、これは鶴鶴が飛び込みました」と申上げる。そこでその兆を御取換へになつて皇子を大鶴鶴尊宿禰の兒を木菟とよぶことにせられた。是が即ち後の仁徳天皇である。いぶかり思ひて の句意は「不思議に思つて」に相違ないが、これを契沖は不安の意として

久しく位を空しくせさせ給ひては世の中いかゝあらむとあやふみ思ふ也

(「いぶかり」は「いぶり」「いほり」と同一語系だから契沖の説は尤もな點もある)

といつて居るし、季吟は御即位をお勧めすることとして

今は御位をいなとのたまふべき事にあらずとて歌にそへて難波津に冬ごもりせしこの花も今は春べと咲きたり位に即き給へと世一字のうたにてす、め奉るによりて(御位につき給ふめでたき歌の徳也)

といひ顯昭の序註に引く公任卿注にも

大鶴鶴天皇於難波津宮未即位。與太子相讓爲三年時王仁所詠。

とあるから大體御即位を勧めた歌と解してあるものと見てよろしからう。だが併し註文の作者は「みかごのおほん始なり」といつて居るし、御即位の處は紀に

元年春正月丁丑巳卯、大鶴鶴尊即天皇位。

とあるところから推して、これは御即位をこほき奉つたものとするが宜しからう。高津の宮の址は今史蹟調査會で標石を建ててゐ

るし、菟道稚郎宮居の址も今宇治橋近くに「叢の木立をなして歷存して居る。この花は顯註引用の孫姬式には「大根の花」だといって居るが、又「木の花」とすれば草の花に對して、何であらうと木に咲く花でよきさうにも思ふ。が尙顯註に公任卿注をあげて

木花者。梅花也。衆木之前先華。故號。

といひ、この註にも「梅の花をいふなるべし」といひ、この御即位が當時の正月三日（今の二月始め）である點から推して、又「難波の梅」が隨分古くから稱へられて居る點から推して、こゝは「梅の花」とするが宜しからう。さて「この花」は今「此花町」などの町名や名物「粟おこし」の包装花紋に名残をとめて居る。歌の意は

ながら冬ごもりをしてゐた梅も今や春が来たといふのでアレあの通り色香も妙に咲き匂うてゐることよその如く、ながらく御位譲りで人民がわびしい思ひをしたが、こゝに今上陛下が御位にお即き遊ばされることになつて、人民も始めてその堵に安んずることが出来る。時は新春處は難波、名物の梅が咲き匂ふ折柄我大君の御代の始めとはさても、季節柄場處柄一段と慶賀の至に堪へませぬとの意

春べの「べ」は邊で場所を大まかに示す接尾語だがそれを春といふ時を大まかに示すためにつけたもので「春の頃」「春さき」位な口吻である。

さてこの歌は王仁が作つたといふことになつてゐて誰も異存はないであらうか？ 王仁は百濟の王子で學問の指導を命ぜられて我朝に留まつた人である。あの文化の幼稚な時代に我國の皇子がこの歌をお咏みになつたといつても、吾々は今日から見てその巧緻さに驚かされる。況んや三韓生まれの王子であり又況んや漢學指導役である所の王仁が何でこんな御國振が作れ得よう。若し御代の始めを謳歌するのならお手本を兼ねて漢詩でも捧げるのが自然でなからうか。これが本當だとすれば今日永年我國に住んで居る外人にして王仁のやうなすぐれた歌人はめつたと見られなからう。とかう思ふと「王仁がいぶかり咏んだ」といふこの文が抑々いぶかり讀まれるものだらう。あさかやまのことは云々。かつらきのおほきみ。といはれる人、上代に三人あつて一つは伊豫風土記、一つは橘諸兄の早いよび名、今一つ紀の天武天皇八年秋七月巳卯朔乙未に四位で亡くなつた人、こゝなのは恐らく最後のものであらうと

いふ。政狀觀察の爲めに陸奥國へつかはされた時、地方の役人の應接振が失禮だといふので、ひどく怒つて御唄走を出しても、確に手もつけぬので、一座がしらけた時、元采女として朝廷につかへてゐたことのある婦人が氣をきかせて左に觴右に水を捧げて

あさか山影さへ見ゆる山の井の（こゝまでは序詞）淺き心をあがもはなくに

（私共はあなたに對して決してあだやおろかな考へは持ちませぬ、深く尊敬してゐるものなのですが、野人禮にならばすて、御氣にめさないことでもありませんならば、どうか悪しからずお許し下さいまし）

と歌つたので、葛城王の怒りも解けて快くその席を過すことが出来たといふ。萬葉集十六に

安積香山、影副所見、山井之、淺心乎、吾念莫國。

右歌傳云。葛城王。遣于陸奥國之時。國司祇承緩意異其於時。王意不悅怒色顯面。雖設飲饌不肯宴樂。於是前采女風流嬪子。左手捧觴右手持水。擊之王膝。而詠此歌。爾乃王意解脫。樂飲終日。

安積山は今日の岩代國安積郡にある。安永年間天野桃隣作の「陸奥千鳥」に

奥州路日和田村此村、北へ四丁許行きて道端右の方に淺香山、南都若草山の俤あり。名ある山とは見えたり。嶺に小さき榎三本あり。往來の貴賤登ると見えて徑有り麓より嶺まで四十三間。麓の廻り二百六十八間

五月女に土器投げん淺香山

此山より未申の方山際に帷子と云ふ村に采女塚、山の井も此邊麓の根に葎おほうて底も見えわかず。

山の井を覗けば答ふ蠶蚊哉

とある。采女は地方から選進する後宮女官の一種で、語義は頂居女（未婚の處女）とも頂懸部（襪をうなじにかけて進膳に奉仕する女官のむれ）ともいひ、「采女」と宛てるのは采擇の意からだといふ。早く仁徳、履仲、雄略、の諸朝にも見えたが、明文の規定は孝徳天皇大化二年のことと地方郡司その他の諸子より子女の容貌端正なるものを選んで進めさせることとなつた。年齢や人数は時によつて多少の同異があつたが、そのつとめは陪膳髪上御手水、飯饌といつた風の民間でいふなら上女中と小問使兼帯といふに當るが、時

には君寵を得て時めいたものあらう。奈良の猿澤の池に采女の衣かけ柳があり、萬葉にも采女を詠んだものがあり、有名な小野小町も采女として出仕したものだらうといふ。いはば采女は地方美人選手である。さて上文采女の記事は萬葉集古義によつたものだが「前采女風流娘」といふと采女の名が風流娘（さかづめ）（愚考風流はむしろ「みやび」と訓むべきだ）であつたかのやうにあるが、契沖の代匠記には

於是有前采女風流娘

とあつて風流はその女の「氣がきいてゐたこと」を示した語と想はれる。處でこの采女のことを右のやうな萬葉の歌傳によつて極生眞面目に解くのが從來の萬葉訓詁家一般の態度であつたのに對して、近頃は又極めて放膽に采女を一種の職業婦人（遊行娼婦）と見る人もある。けれども采女まで勤める女は當時の地方にあつては地位あり教養ある婦人であらうから、之を純娼婦と解くのは如何はしい。或は之をその同司の娘であつたらう、否な妾であつたかも知れぬなどいつて上代貴賓の接待に妻や娘を出した風俗を根據に論じたものもあるが、この風俗は賓客を心からもてなさうといふ主人側の用意から出るもので、祇承緩急で相手を怒らせる程の國司のすることではないとも想はれる。けれども「王の膝を撃ち」とあるより觀て如何にも嬌麗の態度を盡した有様が想像せられるから、こゝは常識的に「場面の白けたところへ紅一點の采女が出て氣轉をきかせてまゝ一つ召上れ、お酌はわたしがいたしませう、オヤこのお膝は變にかたいのネ」でボンと軽く叩いたので流石の苦蟲もそろ／＼口をあいて笑ふやうになり、とゞ舞へや歌へやの大はしやきとなつたものであらうと推測して大差なからう。このふた歌は云々。難波津あさか山の二首をいふ一は男子の作、一は女子の作彼は御代をことほぎ此は怒を解く、而かも二首ともに音調優雅誦にもよろしいところから、之を和歌の「ち、は、は」といつたもの、てならふ字を習ふことだが、歌や文を稽古に作りかけることをいふ。源氏物語若紫の巻に源氏が「紫上の直筆の御手紙を下さい」といつてやつたのに對して、祖母の尼君が「まだ難波津をだにはか／＼しう續け侍らざればかひなくなむ」と断ると、又源氏が「その幼い筆蹟で一字々々放して書かれたのが拜見したいのです」といつてあさか山あさくも人を思はぬになぞ山の井のかけはなるらむ

と書いて送つたとあるのも、この首が手習のいろはになつてゐた有様が想はれる。

この歌は天地開闢のはじめからあつたものだ。天浮橋の下で若册二尊がみあ。だけれども後の世に傳はることは天にしては下照姫に始まり、下照姫は天若日子の妻である兄神の容貌が岡や谷にうつり赫くことをよん。土にしては素戔鳴命から始まつた。（古い神代では歌の文句も定まらず、人情惇樸で技巧がそこまで發達してゐなかつたものらしい。）人の世となつて素戔鳴命から三十一文字の詞形がきまつた。

素戔鳴命は天照皇大神の御兄弟であるその妃櫛名田姫と御すまひにならうといふので出雲の國に宮普請をせられる時にそこに八色の雲のたつちを見てもよまれたものだ。

やくもたつちつとも八重垣つまじめに八重垣つくるその八重垣を

それからして、花をめでたり、鳥を羨んだり霞や露を打興する心詞が多く色々と言ひなされるやうになつた。遠い處も足もとの一步から始まつて多くの年月をかさねて達することが出来、高い山も麓の塵土から出来てそれが積り積つては天雲のたなびくばかり高いものになるやうにこの和歌も亦始めさ／＼やかな香嗟詠歌から出發して斯くも千詞萬葉の生長を見るに至つたものであらう。中にも「難波津」の歌は天皇御即位のはじめに謳はれたものである。

仁徳天皇が難波でまだ大鶴鶴尊と申した時皇太子を御弟菟道稚郎子と互にお譲り合ひになつて、御位に即させられないで三年もたつたので王仁といふ人がいぶかつておよみ申した歌で「この花」とは梅の花をいふのであらう。

あさか山云々の歌は、采女が戯れの即興で、

朝廷から葛城王をみちのくへつかはされた時地方の役人の態度が無禮だといふので御馳走など出したけれども大層不機嫌で瑛がしらけたので以前采女をつとめた女が土器をさ／＼けてこの歌をよんだのである。さてこの歌によつて葛城王の御機嫌が直つた。爾來この二首はまるで歌の父母のやうに誰も手習のはじめに書き習ふやうになつた。

■ その所々にいつた通だがすつと読んで見るとこの一段は

一、和歌の濫觴 此歌あめつちのひらけはじまりける云々。

二、和歌の發達 かくてぞ花をめで鳥を羨み云々。

三、歌の父母 なにはづの歌はみかどのおほん始なり云々。

と三つに分けることが出来る。處が二から三に移る口調は何としても突然の感を免れない「中にもかの」など置くべき處だと思ふが。元永本にもさうはない。和歌の早いものは下照姫素盞鳴命のことは記紀に徴しても明らかであるが、延喜當時の人は丁度彼のラテン語の詩でも暗記するやうに嗜みの一つにしてゐたものであらう。歌論や歌學の開けない當時たとひ大まかにもせよ斯うした和歌史觀を述べた作者の胸には已に立派な和歌沿革史が萌してゐたのでこの點は驚異に値すると思ふ。

第四段 歌 態

そもく歌のさまむつなり俊のころあり。からのうたにもかくぞあるべき。そのむくさのひとつにはぞへ歌ハおほさゝぎの御門をそへたてまつれるうた。

なには津にさぐやこの花冬こもり

今は春へとさぐやこの花

といへるなるべし。

和歌ニ六義アリ。一ニ風ト曰ヒ、二ニ賦ト曰ヒ、三ニ比ト曰ヒ、四ニ興ト曰ヒ、五ニ雅ト曰ヒ、六ニ頌ト曰フ。

ふたつにはかぞへ歌

さく花に思ひつく身のあぢきなさ

身はいたづきのいるもしらずて

といへるなるべし。

これはたゞことにいひてものにたとへなごもせぬもの也このうたいかにいへるにあらんその心えがたしいつゝにただことうたといへるなんこれにはかなふべき。

三つにはなすらへ歌

君にけさあしたの霜の俊あきていなば

戀しきごとにきえやわたらん

といへるなるべし。

これは物にもならずらへてそれがやうになんあるとやうにいふなり此うたよくかなへりとも見えす。

たらちめのおやのかふこのまゆこもり

かやうなるやこれにはかなふべからむ

よつにはたとへうた

我戀はよむともつきじありそ海の

濱のまさはよみつくととも

といへるなるべし。

これはよるづの草・木・鳥徳成をけだものにつけて心をみするなり
この歌はかくれたる所なんなきされどはじめのそへ歌とお
なじやうなればすこしさまをかへたるなるべし。

すまのあまのしほやくけぶり風酒なしをいたみ

思はぬかたにたなびきにけり

此歌酒なしなどやかなふべからん

いつくにはたゞこと歌

いつはりのなき世なりせばいかばかり

人の言の葉うれしからまし

といへるなるべし。

これはこととのほりたゞしきをいふなりこの歌の心さ
らにかなはずとめ歌とやいふべからん。

山櫻あくまで色をみつるかな

花散べくも風ふかぬよに

むつにはいはひうた

このとはうべもとみけりささくさの

みつばよつばにどのつくりせり

といへるなるべし。

これは世をはめて神につぐるなりこのうたいはひうたとは
みえずなんある。

春日野にわかなつみつよろつ代を

いはふ心は神ぞしるらん

これらやす宮御なししかなふべからんおほよそむくさにわかれん

ことばあるまじき事酒なしになん

歌のさま 歌態をいふ。むつ詩の六義から脱化して目をたてたもの。からのうた 漢詩。そへうた 意味不明である。之に相
當する詩の「風」は國風で各國の流行詩があがつて居るからこの意味をつたへるなら「さとうた」とか「地方歌」とかしなければなら
ぬ。又それなら、

ひだちうた

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかけにますかげはなし
などが好例であらう。かぞへ歌 これもわからない。もとの といふのは「平叙」といふのだから「あらはうた」とも謂ふべきもの
で、

年のうちに春はきにけり一年をこぞとやいはんことしとやいはん
などがふさはしい。さく花に云々 拾遺八雜上四〇五黒主の歌だが意味が聞えない。註の「これはものにたとへなどもせぬものな
り」とあるのは正しいが、この歌を「たゞことうた」に入れようといつたのは當らない。なすらへ歌 「比」は譬喩法といふことだが

らならずらへ歌の名稱は略當つて居る。但「君にけさ」の歌意は聞えない。本書修辭索引中直喩・暗喩のところにあげたものならばどれでもよろしい。註の「これは物にもならずらへて云々」は、まほりくごいが、まらがつてはあない。併し「たらちめの云々」の歌は萬葉十二の二九九一、二句母がかふこの序詞であつて此には當らない。たとへ歌の「興」は暗喩法を用ひたものだから、この名目も適確ではないが當らないことはない。我戀はよむともつきじ云々は、この例には嵌らない。これは註のすまのあまの云々の方が適切である。自分に背いて他に走つた對手を、あらはに云はないで「煙」と暗喩したものである。これはよろづの草木鳥獸につけて歌つたものをいふとの註は如何はしい。和歌では、さうした場合寄梅戀とか寄風述懐とかの題詠があるが、これは必ずしも暗喩歌ではない。たゞこと歌の「雅」は大雅小雅共に政治上のことを歌つたものだから、それを譯するなら「まつりごとうた」とでも謂ひたい。況んや例歌のいづはりの云々はそのあやまつた、「たゞこと」を「正しいこと」「眞實のこと」とつてあげたもので念の入つた誤である。それを評した註も全く意味をなさない。「とめ歌」なんていふものはてんでない。正しいことばを切に欣求した歌だから「求め歌」とでも云へといふのかどうも解釋に苦しむ。いはひ歌の「頌」に當る。頌は王徳の讚美歌であるから寧ろ「た、へうた」といつた方が適切である。さりながら之を頌の譯としないで、文字通り「祝賀の歌」とれば例歌とはよく一致して居る。例歌は後世新築落成祝とか、正月厄拂ひとかの場合に當てはまるうたである。さき草は異説が多くて、

- 一、一莖三枝にわかれて花をつける木（箋註和名抄）
- 二、「ちきくさな」といふ一種の菜（同上）
- 三、山百合（眞淵）
- 四、沈丁花
- 五、一種の瑞草（延喜式）
- 六、三椏ちりつた
- 七、楡

八、三つ葉のものもあるところから「三つ」の枕言葉としたもの（契沖）

など、物は何であらうと「幸草」「福草」の意を以て邸宅の廣大と繁榮にいひかけたもので、

この殿が富み榮えるのは尤なことだ。それはさき草の三つ葉四つ葉といふやうに三つ端、四つ端、と軒を並べ重ねて宏壯に建てられてあるから、

との意（一説三つ間、四つ間にかけたものだといふ）これは催馬樂呂の歌の一つである。註の「これは世をほめて神に告ぐるなり」は宜しいが、その句の外面に拘泥して「かすが野に云々」の例をあげたのは當らない。これは本書賀三五七で屏風の繪 費した算賀の歌で泉大將定國の四十を祝つたもので、何も「世をほめて神に告げたもの」ではない。

全體和歌の態は六つある。漢詩も亦同様であらう。その一はそへ歌で、

なにはづにさくやこの花ふゆこもり今は春へと咲くやこの花

といつた風のものであらう。

その二にはかぞへうた、

さく花に思ひつく身のあぢきなき身にいたづきの入るもしらすて

といつた風のものであらう。

これは單に平叙して他の物に譬へたりなんかしないものだ。がしかし、この歌はいつたい何をうたつたものか、さつぱりわからない。その五のたゞことうたといふのにこそふさはしからう。

その三はなすらへうた

君にけさあしたの霜のおきていなば戀しきことに消えやわたらん

といつた風のものであらう。

これは他の物にたとへて……のやうだといふのであるがしかしこの歌はよくあてはまつて居るとも見えない。

たちちめのおやのかふこのまゆこもりいぶせくもあるかにもあはずて
こんなのがこゝにはむくところだらう。

その四にはたとへうた

我戀はよむともつきじありそ海の濱のまさこはよみつくと

これは草木鳥獸等種々なるものにつけて懷を述べるのであるこの歌はかくれたるところなく明瞭であるけれどもはじめのそへう
たとまされやすいので少しやうすな變へたのであらう。

須磨のあまのしほやく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり

これなどが適例であらう。

その五にはたとへうた

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言のはうれしからまし

といった風のものであらう。

これは言葉が整つて正しいのないうふのだこの例歌はさつぱり合はないこれは「とめ歌」とでもいつたらよからう。

山櫻あくまで色をみつるかな花散べくも風ふかぬよに

といふのであければよろしからう

その六にはいはひうた

このとのほうべもとみけりさきくさのみつばよつばにとのつくりせり

といった風のものであらう。

これは御代をたへて神につげる歌である。この歌は本當のいはひうたとは見えない

春日野に若菜つみつよるづよをいはふ心は神ぞしるらん

これらが今少し適當であらう。全體我が和歌が六態に分たれることは不可能なことであらう。

■ この一段は本文中一番價值の乏しいもので漢詩の目を採つて本末をわざと轉倒して六義の本家は和歌であるか
のやうに裝うて強いて論陣をかまへた作爲の跡の反證と爲るものがある。而かも詩の六義は詩を内容によつて、

風雅頌

と分け、詩の修辭によつて、

賦比興

と分け、以て三百餘篇を分類したものでそれには意味が充分認められるが、全然異なる分類礎をこつちやにして風賦比
興雅頌として原意を穿きちがへた不適切な例をあげては何の見所もない。尙斯うした歌態の分類が眞に正しいと信ずる
ならば何故にこの古今集の歌態をそれによつて部立をしなかつたか、本集の方はこの、六義に何の拘りもなく春夏秋冬
と進んでゐながら「そもく歌のさま六つなり」とは何事ぞ？ 唯併しながら作者がこゝまで和歌第一を強調した熱
意に至つては眞に多とすべきものがあらう。(尙修辭上「むつにはいはひうた」の下に「なり」を補へといった景樹の評は至當
である。こゝは段の切れ目だから他の五つとひとしなみに云ひきつてはいけない。)

第五段 歌道の衰頹

今の世の中いろにつき、人の心、花になりける
より、あだなるうた、はかなきことのみいでくれ
ば、色このみの家に、元相傳のみうもれ木の人しれぬことと
なりて、まめなるところには、花すゝきはにいだ

すべき事にもあらずなりにけり。新清三た

大津皇子ノ初、詩賦ヲ作リシヨリ、詞人才子風ヲ慕ヒ、塵ヲ繼ギ、彼ノ漢家ノ字ヲ移シテ、我が日域ノ俗ヲ化シ、民業一ニ改マリ、和歌漸ク衰フ……彼ノ時澆漓ニ變ジ、人奢淫ヲ貴ブニ及ビテ、浮詞雲ト興リ、艶流泉ト涌キ、其實皆落チ、其花孤リ榮エ、好色ノ家、之ヲ以テ花鳥ノ使トナシ、乞食ノ客、之ヲ以テ活計ノ媒トナス有ルニ至リヌ。故ニ半バハ婦人ノ右トナリ、大夫ノ前ニ進メ難シ。

○。○。○。○。男女好色の事に即し、人の心花になる。人心浮華輕薄に墮する。あだなるうた。輕薄虚誇の歌。眞情の流露を缺いた歌。はかなきこと。たのもしげのない詞。うもれ木の。次の「人しれぬ」の序詞。まめなるところ。まじめな席上、一まめごとといへば用事で「あだこと」といへば遊び、「まめやかに」といふと「まじめに」の意。花すゝき。薄の穂の出でゐるものをいふ。こゝは次の「ほにいだす」の序詞。ほにいだす。「ほ」は「秀」「穂」などあてて、あらはなこと。即ち公然發表することの意。
○。今世の中は男女共に好色の一方に偏り、人心浮華輕薄となつたので、眞情流露の秀味乏しくなり隨て和歌なるものは一部好色の人々の間の密か事の媒として使ふものとなり眞面目な席で公然と發表すべきものではないといふやうな事になつてしまつた。

抑々王朝文化の一大特徴は文藝に在り。王朝文藝の一大特徴は女子に在りといはれてゐる事程この頃の宮廷生

活には女性の優越が認められる。こゝに長足の進歩を遂げた和歌が、或意味に於ては社交機關となることも勢の已むを得ないものがあつたらうが、當時の文献記録に徴すると、随分ひどいものがある。藤原兼家の「三つめ鐘」「尼歸る」伊周の法住寺殿通ひ、平忠の墨汁の涙、昔男の戀行脚。それを散文化した伊勢物語、戀の總決算を見せた源氏物語と一寸思ひ出しても可なりが多い。少し下つてのことだが、殊に人々の目して極端とするものは、古今著聞集にある。

かれてより思ひしことを伏柴のこるばかりなる思ひせんとは
と一首作つて、その歌の實行につとめ、筋書通りさる公卿に愛せられて棄てられて、この一首を口ずさんで慰めてゐたといふ「伏柴の加賀」である。萬葉にある歌は素樸ではあるが實感があつて、

我せこは物な思ひそ事しあらば火にも水にも我なげなくに

などを「たとひ火の中水の底」と鼻唄で大きくよりは遙かに熱烈な情緒が思はれるが、古今集の
我を君なにはの浦にありしかばうらみなみをつの尼となりなき

は技巧は遙に高いが、感味は淡い、讀み終へた吾々は唯々「うまくしやれたでせう」とホホ笑んでゐる浮れ女を想ひ浮べるだけである。古今集二十卷の中五卷は戀歌であり、一千一百一首の中三百六十首までは戀歌である處から推してこの時代の歌人の生活も略々察せられる。それでも古今集では双方共に秀味なものだけ贈歌と答歌と併せあげたが、後撰となり拾遺となり後拾遺となるにつれて戀歌は數をまし、贈歌にはきまつて返しをも併せあげるやうにし、勅撰集は或意味に於て戀の男女の贈答記録のやうになつてをる。かうした歌風變遷のあとを眺めて見るとこの序の作者の眼識は流石に高く、よく時弊に適中した言を吐いて居る。

第六段 和歌原始の面目、並に本集歌人の題材

そのはじめを思へばかゝるべくなんあらぬ。いにしへのよゝのみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとにさぶらふ人々をめでして、ことにつけつゝ歌をたてまつらしめ給ふ。あるは花をこふとて、たよりなきところにまどひ、あるは月をおもふとしてるべなきやみにたどれる心々をみたまひてさかし。おろかなりとしろしめしけん。しかあるのみにあらず。さざれ石にたとへ、つくば山にかけて君をねがひ、よろこび身にすぎ、たのしみ心にあまり、ふじの煙によそへて人をこひ、松虫のねに友をしのび、高砂住の江の松もあひおひのやうにおぼえ、男山の昔を思ひ出て、をみなへしの一時をくねるにも、うたをいひてぞなくさめける。又春のあしたに花のちるを見、秋の夕ぐれにこのはのおつるをき、あるは年ごとにかがみのかげにみゆる雪と漣とをなげき、草の露水のあわを見

古ノ天子、良辰美景毎ニ、侍臣ニ詔シテ宴筵ニ預カル者和歌ヲ献ゼシメキ。君臣ノ情、斯ニ由テ見ル可ク、賢愚ノ性、是ニ於テ相分ル。民ノ欲ニ隨ヒ、士ノ才ヲ擇ブ所以ナリ。

てわが身をおどろき、あるはきのふはさかえおごりて。時をうしなひ、世にわび、したしかりしもうとくなり、あるは松山の浪をかけ、野中の水をくみ、秋はぎのしたげをながめ、あかつきのしぎのはねがきをかぞへ、あるはくれ竹のうきふしを人にいひ、よしのかはをひきて世の中をうらみ。きつるに、今はふじの山も煙たたずなり、ながらのはしもつくるなりときく人は、歌にのみぞ心をなぐさめける。

春の花のあした云々。物に見えたのでは萬葉一に近江朝廷の御代に、藤原鎌足に御下命あつて春山萬花の艶、秋山千葉の彩を競ひ憐ばしめられた時、額田王が歌を以て判ぜられた長歌が早いものだが、個人としてこの種のあげつらひをしたことは代匠記あぐる所六種まだ外にもある。「春秋の争ひ」は近江朝廷以來寧樂平安にかけて一種流行の風流韻事となつた。が併しこの文は春の花長秋の月夕に入々をめでして折に觸れての感味を召されたといふのもつと意味の廣いものである。尤も定例行事として春秋の雅會といつた風のものには明文には見えない。が王朝に入つてからならば、春は南殿の花の宴、秋は朱雀院の紅葉の賀といつた風のもの源氏物語さながらの雅會も催されたことであらう。否なこ、はさうした年中行事の穿鑿はよして唯美しい對句で古代朝廷の自然美に對する享樂をたへたものと見たい。あるは花をこふとて云々。この長句は皆下の「心々」にかゝる修飾句であるから、誤解しては可くない。事實花見に道を迷つたり、月なき闇に迷ひ兒になつたりするのではなく、さうした心ばへを味んだとりくの歌をみそなはず

といふのである。「花をこふ」といふ所一本「そふ」とあるのは誤であらう。契沖はこゝに花を戀ふる心を詠んだ例歌として萬葉の足引の山櫻花日ならべてかくしきけらばわかこひめやも

以下五首をあげて居る。本集でいふなら

ふく風と谷の水としなかりせば深山がくれの花を見ましや

などが適例であらう。之に引きかへ月をおもて不知案内の闇夜に迷ふといった風の歌は多い。月を見て悲しむとか、月をめでて悦ぶとかいふのなら澤山ある。しかあるのみにあらず云々以下は本集 歌材を文章に繰り込めたものだから左にその句と之に該當する本集歌詞の番號とをあげておく。

さゞれ石	三四三	つくば山	一〇九五	ふじの煙	一〇二八
松虫のね	二〇二	高砂の松	九〇九	住の江の松	九〇五
男山の昔	八八九	をみなへしの一時	一〇一六	花のちるを見	七三
このはのおつる	二九二	かゞみのかけ	四六〇(雲)	一〇〇三ノ七八、七九の二句(浪)	
草の露	八六〇	水の泡	七九二	きのふはさかえ云々	九三三
したしかりしもうとくなり八九二		松山の浪	一〇九三	野中の水	八八七
秋萩の下葉	二二〇	しぎの羽がき	七六一	くれ竹のうきふし	九五八
よしの川	七九四、八二八	ふじの山	一〇二八	ながらのはし	一〇五一

引歌の語釋はその歌の處に譲るとして、尙この一段の結句を拾つて見ると、君をねがひ 君の幸と榮えを希望するといふ意、但筑波山の歌にはさうした意味はない。高砂濱手の砂の高く積もつてゐる所即ち「たかかさこ」ではあるが、これは播磨名所の一つとなつて居る固有名詞の高砂で松が名高い。住のえ 萬葉時代には「すみのえ」といひ後世は「すみよし」といふ。本集では句調上兩方も用例がある。地點はもと攝津の國武庫郡御影町の直ぐ東手住吉驛のある處(住吉神社もある)だつたのが、早くこの宮を同國東成

郡の今の住吉に遷したもので、本集に所謂すみのえ・すみよしはこの新住吉の方である。有名な叢の松原なんかも後の方の社の手前にある。あひおひについては異説がある。

一、相逐ひ おつつかつつ 古註

二、相老い 互に老いる 東磨・眞淵

三、相生ひ 同時代に生ひたる意 顯註・契沖

假名遣から見れば「おひ」で意味から見れば一と三との中三の方がこゝにはよくはまる。又同時に生へたものなら相共に老いても行く譯でもあるから三に従つておく。くれるといふのも、

一、くれくれといふに同じく女心にくれくれ物思ふ體をいふ。(季吟)

二、若かりし時を思ひ出でて年老いたるを歎息する意なり。(顯註)

などあるが愚考「くれる」は「捨る」とか「捨くる」とかいふので「文句をひねる」と解く。「あなかしがまし花も一時」と女郎花の花一時を句化する心であらうと想ふ。「きのふはさかえおこりて」のつきにけふはと補ふべきだと景樹がいつたのは至當だ。俊成本にはさう書いてもある。昨是今非の對照を述べた處だ。世の中は文字通り世間とつて可い場合もあるが王朝語としては多く「男女の中」といふことにつかふ。「世をまだ知らぬにしもあらず」といへば男女間の情事をまだ知らないといふ風にも見えない。つまり全部のおぼことは想へないとの意である。富士の山の煙云々 萬葉に赤人等の詠があつて火を噴いてゐるとあり、本朝文粹十二にも都良香の富士山ノ記に「其在遠望者常見煙火」とあつて、そして延喜五年の今は煙がたなくなつたといふのだからこれだけの文献から推すと富士が息火山になつたのは王朝初期のこととなる。つくるなりは本歌にもある通り「造るなり」で「盡くるなり」ではない。架けかへられたことをいふのである。

■ その始めを思ふに和歌本來の面目は、決してこんなものであつたとは思はれない。古の代々の天皇は、春の花咲くあした、秋の月照る夜といふ様に佳辰良夜の折々毎に、近侍の人々をお召しになつて、折にふれての歌を奉らしめら

れた。その詠進歌には或は花にあこがれて勝手知らぬ處に迷ひ歩いた心を詠んだものや、又は月を懐しむといふので不知案内の夜闇を辿りあるく心を詠んだものなどがあつて、とり／＼の着想になつてゐる、それをば帝がみそなはして此は秀歌である。これは歌作であると御見別け遊ばされたことであらう。のみならずさざれ石にたとへ、筑波山にかけて身にも心にもあり餘るよろこび樂しみを詠じては「……………」と詠ひ、富士の煙に準らへ人を戀うては「……………」と歌ひ、松虫のねに友を慕つては「……………」高砂・住吉の松も同じやうに時代のついたものであるかのやうに「……………」など歌ひ、男ざかりを思ひ出し、女郎花の一さかりに文句を捻るにも、先づ歌でいひあらはして慰み草としてをつた。又春の朝に落花を見ては「……………」秋の暮に落葉を見ては「……………」と云ひ、又は年毎にふけて見える頭の雪と額の浪とを歎いては「……………」水の泡を見て我身を驚いては「……………」と歌ひ、若くは昨日は榮華に誇り、今日は不遇に詫び、これまで親しかった人も向ふから疎んじるやうになつたといふ氣持を歌にし、或は松山の浪をかけて「……………」といひ、野中の清水を汲んで老來の咨嗟と自慰とを表し、萩の下葉に見入つては獨居の淋しさを想ひやり、曉の鳴の羽搔きをかぞへては、待つ戀の遣る潮なさを歎き、くれ竹のうきふし毎になく鶯を憐み、吉野川を引いて妹背の宿世に深い哀感をそゞぎなどしてきたのに、今は富士の山も煙がたゞなくなり、長柄の橋も架けかへられたときにつけても人々は矢張それ等の感慨をば唯一の詠歌によつてのみ慰めてゐる。

國文作出の初期に當つてこゝまで歌詞をとり入れて、文章のあやとしたことは作者の特技と謂つてよからう。後世には幾多の模倣を見るやうになつた。唯修辭の美を産むために事實を曲げてまで對句を敷いたのは、所謂文のために意を害するものであらう。以下本集の歌詞が隨處に文辭に取り容れてあつて少々繁縟な感じがする。が、仔細に見るとこゝにあがつて居るのは多くは一讀人しらす時代（本集中「讀人しらす」とあるのは大抵王朝初期の作品であるから假にさう呼んでおく）のもので以下の引歌は本集の目をいふところと、本集完成を謳歌するところとでそれ／＼必要缺くべからざる引用でもありその引用のしあんばいもちがつてをる。（それは以下を見ればわかる）唯一つ作者に飽かぬ節は、歌道の衰頹を歎いた續きだから、こゝにこの撰集の意氣と抱負を強調して「本集採るところはそれ等好色の亞流に超越して眞に和歌として價値あるものを嚴選したのである即ち……………」と謂つて當時にあつては近古ともいふべき王朝初期のものにして「さざれ石にたとへつくば山にかけて」歌つた秀歌のみを粒選りしたとありたいところだ。作者の意或はここにあつたかも知れぬが、この文章ではそこまでは表れてゐない。文章法の上からいへば構想上どうしてもさうあるべき處ではあるまいか。

第七段 萬葉時代

いにしへよりかくつたはるうちにも、ならのお
 ほん時よりぞひろまりにける。かのおほん時や、
 うたの心をしろしめしたりけん。かのおほん時に
 おほきみつのくらゐかきのもとの人丸なんうたの
 ひじりなりける。これは君もひと身（倭こゝろ）をあはせたり
 といふなるべし。秋のゆふべ龍田川（平俊朝）にながるゝ
 もみぢをば、みかどのおほんまなこには錦とみた
 まひ、春のあした、よしの山（三和）のさくらは、人まろ
 が心には雲かとのみなんちばえける。又山のへの

この段に相當する漢文序は唯左の一句だけである。

昔、平城天子侍臣ニ詔シテ萬葉集ヲ撰バシメキ。

あか人といふ人ありけり。うたにあやしくたへな
りけり。人丸は赤人がかみにたゝんことかたく、
あか人は人まろがしもにたゝんことかたくなん
りける。

ならのみかどの御うた

龍田川紅葉みだれてながるめり

わたらばにしき中やたえなん

人丸 梅の花それとも見えす久方の

あまきる雪 なべてふれよば

ほのふくとあかし 浦のあさざりに

しまかくれゆく舟をしぞ思ふ

赤人 春の野にすみれつみにとこし我ぞ

野をなつかしき一夜寝にける

わかぬ浦にしほみちくればかたをなみ

あしべをさしてたづなきわたる

この人々をおきて又すぐれたる人も、くれ竹の
世々にきこえ かたいとこのよりくりにたえずぞあ
りける。これよりささのうたをあつめてなん萬葉

集と名づけられたりける。

おほきみつの位 正三位のこと。従三位をひろきみつの位といふ。但人麿の傳記には不明の箇處が多くて、その榮達の極に正三位に叙せられたものか、正確な記録はない。或は此はおほきむつの位の誤ではないかといふ。位ならば、彼が石見の守になつた明文から推して官相當の位であるが字形の上では「む」と「み」とは魯魚の誤を起しさうもない。尤音の上では「み」も「む」も同じ唇音系統だから轉々して聽き損ひもあつたかも知れぬ。とにかく人麿の位は不明となつてゐる。柿本人丸 通常「人麿」と書く。いふまでもなく萬葉歌人の第一人者である。ひじり 「聖」とあつて「日を知る」といふ意から来て後世専ら知徳圓滿の理想的人格者をいふがこゝは大家といふ程の意。後世所謂「歌聖」といふに當る。本文では山柿二人を等しなみにほめたものだから、次の赤人者なことを謂つた「歌にあやしく妙なる」ことが即「歌のひじり」ととつて宜しからう。身をあはせ 一致合體とか協心戮力とかいふのだが、前文から推して「趣味が一致してゐた。同じく味歌の興味があつた。和歌の點に於てひどく共鳴せられて居つた」といふ程の心持。秋のゆふべ云々 次の註の左註擬作者平城天皇の御製をさしていふたのだが、以下文章に作者は寧樂時代とならのみかど即ち平城天皇とを混雜して結局萬葉集は平城天皇の御代に出来た（これも妄説とは謂ひ難いが）といふのである。萬葉撰集の時期については平城帝時代といふのも一説となつて居るが、少くとも平城天皇と人麿赤人を同時に看做したこの文は誤つて居るといふのが通説である。春のあした云々 人麿にかうした歌はない。比較的近いのは次の註にある梅が雪のやうだといふ味である。が、こゝは例の文辭を優麗にする爲の對句として美しく對立させたものだ。室町時代に一條兼良が人麿の贊にこのことを疑つたものにも「事とはん吉野の標雲と見しやまことばはありやなしやと」山のべの赤人 山邊、山部どちらも書くが、山部姓なら明記されたものがあるからこの方が正しからう。人丸は赤人がかみにたゝんことかたく云々 二人は兄たりがたく弟たりがたしといつた程の句。文字通りにいふなら人麿は始めに赤人の上にはたれたれないといつて抑へられたのだから次には何とか揚げる評が入る處をば「赤人は人麿の下にはたない」といへば又こゝでも抑へられて赤人一人が割のよい評になつて居る。でこゝは「赤人も人麿が上にたゝんことかたく

なんありける」などあるべきところだ(尤もそんなこまかな穿鑿をやめて大まかに讀めば、音調の上で「相伯仲す」と聴きとれないこともない)。ならのみかど。平城天皇をいふ。この天皇は當時唐制模倣熱の高い時代思潮を飽かず思召し古典的な御嗜好から奈良朝文化をめでさせられ、又御親ら奈良へ御こしにもなりしたので、崩御の後、平城と御謚號を申上げられたものだといふ。御歌は本集その處で解く。史上でならのみかどといふもの。一、聖武天皇。二、桓武天皇。三、平城天皇。四、奈良七代の天皇と色々あつて紛らほしい。梅の花それともみえず云々。解本集その歌の處に。次の「ほのく」との歌も同上。春の野に云々。萬葉集八の一四二四

春野爾 須美禮珠爾等 來師吾曾 野乎奈都可之美 一夜宿二來

歌の意味は明瞭だが「すみれ」は今のげんげだ(景樹)とも、葦菜といつて食用に挿んだものだ(契沖)とも、搦衣の染料に挿んだものだ(鹿持雅澄の古義、井上通泰先生の新考)ともいふ、一夜寝るといふ上から觀れば紫雲英がふさはしいが、さうすると古代に於て已に觀賞の爲めだけに野遊びかする風俗があつたといふ確證を要するし、食用・染料などいふのも正確に斷定せられたものではないから、こゝは唯さうした異説があるといふに止めておく。けれども歌の作意は明らかに葦の花をめでたものである。源氏には「野をむつまじみ」と變へて引いた處がある。わかうらに云々。萬葉六に

神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時山部宿彌赤人作歌一首並短歌

とある短歌の二番目(九一九)に

若浦爾 潮滿來者 鴻乎無美 葦邊乎指大 多頭鳴渡

和歌の浦は若浦とも書き、又明光の浦ともいふ。紀州名草郡和歌山市の南浦で聖武天皇の頃から聞えた名勝地である。和歌の浦が滿ちしほになると鴻(海邊の洲滿沙にはかくれ干沙にはあらはれる程度の濱)がないものだから、鴻は沙入りの芦の生へてあるあたりをさして鳴きながら飛んでくる」といふので即興の叙景として有名であるところから、催馬樂にも、

なには鴻沙みちくればあまごろも田蓑の島にたづなきわたる

と謡ひ、木集にもこの歌が採られてある。今日では舊和歌の浦の玉津島神社の近くに「あしべや」といふ旅館があつて、歌詞の一部

を屋號にし 別館の汐湯のある建物の前には當年の鶴の名残のつもりか雌雄一番を金網に圍うてあるし、そこから新和歌浦に行く海岸中特に「かたをなみ」と固有名詞の箇處も出來て居る。山柿二歌聖の比較は萬葉研究上興味ある題目だが、極めて大略をいふなら

柿本人麿

山部赤人

- 一、時代 持統文武の朝
- 二、萬葉に採られた歌數 六十餘首
- 三、抒情詩人
- 四、長歌ニ添テ
- 五、多ク人事ヲ歌ヒ
- 六、雄大莊嚴ヲ以テ秀デ

- 一、聖武の朝
- 二、四十九首
- 三、叙景詩人
- 四、短歌ニ得意
- 五、多ク自然ヲ歌フ
- 六、可憐優美ヲ以テ優レ

といふやうな對照は通説になつて居る。くれたけの節と同音の處から「世」の枕詞。かたいとの。片絲(一筋糸)は繕り合はせる處から「よりく」の枕詞。これよりさきのうたを云々。この「られ」は上の「集め」と「名づけ」と二つにかゝる尊敬助動詞であるから、作者は萬葉集を勅撰集と思ひ定めた形跡が認められる。この集の作者年代については多くの説があるが、要するに奈良朝末期から王朝初期にかけての人大伴家持が奈良・北越・中國・筑紫と轉任を累ねてゐる間幾切れにも分けて撰んだものだといふ動的家持私撰説とも謂ふべきものが妥當であらう。

昔から此の様に相傳はつてゐる中にも、特に奈良朝の御代からひろまつた。彼の大御代にはみかども「歌のころ」についての御理解があまりなされたものと見える。又彼の大御代に正三位柿本人麿といふ人があつたが、この人こそは、歌の大家であつた。これは君臣歌の趣味を共に有してゐられたものと謂つてよろしからう。秋の夕の龍田の川に、紅葉の落葉の流れるのは、帝には錦のやうに御見立てになつて「わたらば錦たえなん」と咏ませられ、春の朝の吉野の山に櫻の花の咲きの盛りは、人麿の歌心では、雲かとはかりにおぼえた。尙又當時山部赤人といふ人があつて、こ

れも斯道にかけては非常な名手であつた。人麿、赤人五に優り劣りのけちもつかぬまでに、すぐれた歌人であつた。
(註文の通釋省略)

この人々をおいて、外に優れた歌人も代々それ／＼絶えず續出した。(山上道良・橘諸兄・大伴旅人・同家持・笠金村・高橋蟲
麿・額田王・鏡女王・阪上耶女など)これより前のうたを萬葉集と名づけられた。

序文のことであるから作者の萬葉に對する考を詳密に表すには不便であらうが唯代表歌人を二人あげ、春晨秋夕の二叙景についての直觀を並べただけである點が物足りない。作者は言葉では頻りに古へ振りを主張して居るが、その實萬葉の眞髓を把握してしつかりした考へを抱きそこからこの主張をしたものではないと想ふ。この語を以て或人は「これ貫之が「萬葉に復れ」と叫んだ痛切な警告だ」などいふが、愚考ではさうまでは信ぜられないこと、丁度貫之の歌そのものが純萬葉振でないのと同じである。

〇第八段 六 歌 仙 評

こゝに、いにしへのことをも、歌の心をもしれる人わづかにひとりふたりなりさしかあれど、これかれ、えたるどころ、えぬ所たがひになんある。かの御時元俊よりこのかた、年はもゝとせあまり世はとつぎになんなりにける。いにしへの事をも歌をもしれる人よむ人おほからず。いまこのことをいふに、つかさくらゐたかき人をばたやすきや

近代古風ヲ存スル者纔ニ二三人ノミ、然レドモ長短同ジカラズ、論ジテ以テ辨ズ可シ。
爾リシヨリ以來、時ハ十代ヲ經、數ハ百年ヲ過ギタリ。(其後和歌棄テテ探ラレズ。風流野宰相ノ如ク、輕情在納言ノ如キアリト雖モ、而モ皆他才ヲ以テ聞エ、斯道ヲ以テ顯レザリキ)

うなればいれず。其外に、ちかき世に、その名さこえたる人はすなはち、

一、僧正元俊遍昭は、うたの元俊さまはえたれども、まことすくなし。たとへば元俊えにけるをうなをみて、いたづらに心をうごかすがごとし。

あさみどりいとよりかけてしらつゆを
玉にもぬける春の柳か
はちすばのにこりにしまぬ心もて
なにかはつゆを玉とあざむく
さがのにて馬よりおちてよめる
名にめでておれるばかりぞをみなへし
我おちにきと人にかたるな

二、在原の業平は、そのこころあまりて、こと葉元俊たらず。しほめる花の色なくてにほひのこれるがごとし。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
わか身ひとつはもとの身にして

花山僧正ハ、尤歌態ヲ得タリ。然レドモ其詞華ヤカニシテ實少シ。圖畫ノ好女ノ徒ヲニ人情ヲ動カスガ如シ。

在原中將ノ歌ハ、其情餘リ有リテ其詞足ラズ。萎メル花ノ彩色少シト雖モ薰香有ルガ如シ。

おほかたは月をもめでじこれぞこの
 つもれば人のおいとなるもの
 れぬる夜のゆめをはかなみまるとるめは
 いやはかなにもなりまさるかな
 三、文屋の康秀は、ことばたくみにて、そのさ
 ま身にお元徳はず。いはばあき人の、よききぬきたら
 んがごとし。

吹からに野への草木のしほるれば

むべ山風をあらしといふらん

深草のみかどの御國忌に

草ふかきかすみの谷にかげかくし

てる日のくれしけふにやはあらぬ

四、宇治山の僧喜撰はこと葉かすかにして、は
 じめをはりたしかならず。いはゞ、秋の月をみる
 に、あかつきの雲にあへるがごとし。

わがいほは宮このたつみしかぞすむ元徳

よをうち山と人はいふなり

よめるうたおほくきこえねば、抄かれこれをかよ

文琳ハ巧ニ物ヲ詠ズ。然レドモ其體俗ニ近ク、
 賈人ノ鮮衣ヲ著タルガ如シ。

宇治山ノ僧喜撰ハ、其詞花麗ニシテ、首尾停滯
 セリ。秋月ヲ望ムニ曉雲ニ遇ヘルガ如シ。

はしてよくしらず。

五、小野の小町は、いにしへの衣通姫の流西なり。
 あはれなるやうにてつよからず。いはゞよきをう
 なのなやめる所あるに元徳たり。つよからぬはをう
 なのうたなればなるべし。

思ひつゝぬればや人のみえつらん

夢としりせばさめざらましな

色みえてうつるふものは世の中の

人の心のはなにぞありける

わびぬれば身西をうきくさの根をたえて

さそふ水あらばいなんとぞ思ふ

衣通姫のうた

わがせこがくべきよひなりさ、がにの

くものふるまひかれてしるしも

六、大友の黒主は、そのさまいやし。いはばた
 きとあへるやま人の、花のかげにやすめるがごと
 し。

おもひ出てこひしきときははつかりの

小野小町ノ歌ハ、古ノ衣通姫ノ流也、然レドモ
 艶ニシテ氣力無ク、病婦ノ花粉ヲ著ケタルガ如シ

大友黒主ノ歌ハ、古ノ猿丸大夫ノ次也。頗ル逸
 興アレドモ體甚ダ鄙シク、田夫ノ花前ニ息フガ如
 キ也。

示徳助なきはたるとも、示徳助人はしらすや
なきてわたると人ばしらすや

か、み山いざたちよりみてゆかん
年へゆる身はおいやしぬると

このほかの人々、その名きこゆる、のべにおふる
かづらのはひひろごり、はやしにしげき木の葉の
ごとくにおほしおほかれど、うたとのみ思ひて、そのさ
ましらぬなるべし。

此外氏姓流聞スル者勝ヘテ計フ可カラズ。其大
底ハ皆艶ヲ以テ基ト爲シ歌ノ趣ヲ知ラザル者也。

註 いにしへの事 前記和歌原始の面目をさしたるもの。これ等の語によつて、作者の斯道観は幾分萬葉の復活にあつたことが察せられる。ひとりふたり橋諸兄・大伴家持などをさしたるものだといふ。かの御時より云々。これは萬葉興成立を「ならのみかど」即平城天皇の御代と解しての説き方で、それならばなる程。

平城天皇大同元年（四六六）から、醍醐天皇延喜五年（一五六五）までは百年で、天皇は平城・嵯峨・淳和・仁明・文徳・清和・陽成・光孝・宇多・醍醐

と十代になる。けれどもこれは今日の通説から見て誤であることは前に謂つた通りである。たやすきやうなれば、少し不明瞭な句だが「少し軽々しい嫌があるから」といふ程の意。高位高官の人についての歌を彼此批評することは何だか敬意を失するやうに思はれるので、今は何もいはないといふのである。けれどもこの古今集歌人について見ると六歌仙以外高貴の方で歌人と申して然るべき人は誰もいないが、さりとて「言ふに足らず」と感骨にも云へないし、全然黙殺するとしては一二首の秀味を詠んだ方々にすまないといつた心持の許に回避的に老翁に素通りした筆致である。

一、僧正遍昭（「照」が正しいが連火點を略して遍昭としたものも澤山にある。「三十六人歌仙傳」に顯昭流は「照」定家流は「昭」とある。二條・六條二派の對時がかうした用字にまで及んだものと見える。）

七十六歳。俗名を良岑宗貞といひ、桓武天皇の御子にして賜姓臣下に列せられた良岑安世の子で、仁明天皇に信任せられ從五位上藏人頭左近衛少將として時めて居たのに、嘉祥三年三月廿二日天皇崩御につき、出家遁世、近畿諸國を遍歴して修業を積み、一時雲林院を住持し、後、花山の元慶寺の座主に任ぜられ、又僧正にも補せられたので、世に彼を花山僧正といふ。内外上下の尊崇厚く、兼中光孝天皇はその七十の算賀を内裡仁壽殿に賜はり、食邑百戸を下賜せられ、轡車宮門に入るを許され、學徳高き一世の僧正として内外信望裡に一生を終つた。家集を通照集といひ、群書類從第二百六十五卷、刊本第九輯一〇八九—一〇九二や、續國歌大觀五〇九—五一に收められて居る。本集には俗名の宗貞といふ名では、

九一 八七二 九八五

の三首、遍照の名では、

二七 一一九 一六五 二二六 二四八 二九二 二四八 三九二 三九四 四三五 七七〇
七七一 八四七 一〇一六

の十四首計十七首採られ、その他の撰集にも數首採られて居る。（尙六歌仙のことは、頭十論のその項をも参照せられたい）歌のさまは、えたれども云々。歌態はそなはつてゐるが中實が不真面目だ。或は歌の形式は整つて居るが、内容に眞摯熱烈なものがない。詩としての眞實さが缺けて居る。といふのが作者の評である。たとへば云々。この譬へは不道理ではないが少しくどい。寧ろ「たとへば繪にかけるうましめの如し」とした方が明瞭だ。さすれば「繪にかいた美人は形は美しいが、愛がない。彼の歌も形は美しいがまことがない」となつて文意はよく透る。（此段註の例歌は本集中その歌の處で解く）在原業平 平城皇子阿保親王の第五男で、清和帝に仕へて近衛中將に任ぜられたので、世に彼を在五中將といふ。體貌閑雅・性格奔放・詩才縱横といへばその特徴は略いひつくせよう。家集を在原業平朝臣集（群書類從第二百四十八卷刊本第九輯五七九 五八一、歌仙歌集卷一、續國歌大觀四二二—四二二）とい

ひ別に伊勢物語といふのも、彼の作だといはれてゐる。此方眞偽は別として彼の詠を物語化したものが多く「むかし男」や「右馬頭」は大體彼自身と看做される（彼は中将以前右馬頭であつたのである）

そのころあまり云々。その詩想が有り餘る程豊かで、を表現する語彙形式が貧弱である。いひたいことが山々ありながら、それを充分にいひあらはせないといつた趣。しほめる花の云々。丁度しぼんだ花の色は褪めながら、その句をとどめて居るやうなものだ。句は詩想豊富、潤みは形式貧弱に相當する。文屋康秀「生死年不詳。ことばはたくみにて。修辭の技巧には秀でて居たが着想歌態は品位がおちる。いはばあき人の云々。譬へていはうなら商賈人が立派な衣裳を着たやうなものだ。いくら美服を着飾つても、身分は争へるもので、どことなく一沐猴にして冠した」趣を免れないと同様。いくら高雅に詠みあげようとかまつたものでも矢張氣品がない。宇治山の僧喜撰。生歿傳記共に不詳、その歌學に喜撰歌式といふがあつて。和歌の諸病類別等を記してあるが、これは後人の偽作であらうといふ。名の文字も甚泉とも窺詮とも書いたものがあるが、イヤそれは別人だとも云ひ、又桓武天皇の御裔だともいひ、でないともいふ。とにかくその詠としては唯この「我庵は」の一首だけが遺つて居る。外に玉葉に一首と法橋顯昭の序註に一首とあるのはどちらも後人の詠の混入だといふ。「宇治山の僧喜撰」といつたのは、この頃已に、彼をば唯宇治に庵居した歌僧としてのみ認めて他の生活が不明になつてゐたからであらう。今日宇治の平等院に遊ぶと丁度宇治の清流を隔てた川向ひに小さな山があつて、頂上に少しばかりの平地がある。それがこの法師の住んだ跡だといふ。ことはかすかにして云々。形式が晦澁であるとか表現が不明瞭であるとかの意、一首の詩想の始終が不確實である。落想が那邊にあるかどうも曖昧だ。いはば秋の月を見るに云々。譬へば秋の月を觀ようとして曉の雲にさへられたやうな趣がある。秋の月だから何れ正體は立派に澄みわたつてゐることだらうが、惜しいかな曉雲の覆へるあつてその美を心ゆくばかりめることが出来ない。じやうに、歌仙といはれた喜撰の歌だから、どこかにうま味があるらうとは思ふが、さて之を鑑賞しようとなると晦澁といふ雲にさへぎられて首尾何れを何れと捕捉することが出来ない。よめる歌おほくきこえれば云々。彼の詠歌は多く傳はつてないので、これかれ多くを通覽して公平に妥當に評價することが困難である。小野小町。王朝初期の女流歌人として、傳説の古美人として、室町期以後謡曲・歌謡・戯曲の題材として有るだが、生歿の年も傳記も不明である。が、大體弘仁八・九・十年の間に羽に生まれ、采女として選ばれて都に上り、時の東宮後の仁明天皇に愛せられて、藤原氏の壓迫を受け、小野に塾居を餘儀なくさせられて、宮中へは時折神泉苑の雨乞といつた風のお召の時だけしか出仕せられず閑々の中に當の天皇は嘉祥三年三月廿一日御歳四十一歳で崩御、彼女は五つか六つか七つの歳下で三十幾つといふのにこの爲めに有髮の尼となり清い餘生を送つたものだらうといふ。（黒岩源香氏小野小町論による）それを前提にすると、彼女の歌は幼時乳母に習つたものなど少しの例外をのけては、この一人の上つ方に注いだ悲戀と、この悲戀に捧げる貞操を守るが爲めに他の公達と言ひ寄りを拒んだものが多いやうに想はれる。家集を小町集（群書類從二百七十六卷、刊本第十輯一四五—一四八、續國歌大觀五三八—五四一）といひ、百十三首を収めてあるがこれは杜撰なものである。その後撰や新古今などに採られたものもある。衣通姫。稚淳毛二派皇子の御女で、允恭天皇の御妃御膚の澤が御衣を通すといふので、當時「衣通姫」と申した。御歌は日本書紀允恭天皇の卷にある外、多くは傳はらない。和歌の三神（人丸神社・住吉神社）の一つの和歌の浦の玉津島神社といふのはこの方を祭つたものである。あはれなるやうにて云々。哀婉の詩致はあるけれども一體が弱々しい。いはば云々。譬へば美人が煩悶してゐるといつた趣だ。見るから同情を惹く哀れさは充分こもつてゐるが、鬼も拉ぐと様の強いものは少しもない。その弱々しいのは要するに作者その人女性だからであらう。大友黒主。「大伴」としたのは誤、彼は近江の大夫の郷に生まれて郡の大領を拜し從八位上に叙せられ、寛平法皇が打出濱へ御幸あらせられた時は、特に選ばれて歌のお相手を申上げ、次の醍醐天皇御踐祚の大嘗會の御屏風にも召されて「近江のや」の一首を詠進した程の歌人でありながら、地位も低いし、都に居るも構へなかつた故か、それ程もてはやされなかつた。その詠は本集並に後撰・拾遺・續後拾遺・新千載等に散見して居る。この文の始めに景樹は「詞はなかくて。としてから。そのさまいやし」につづげよといつて、今は通常それが是認せられてゐる。なる程外の評論が一長を擧げて一短を示してゐるのにこの分だけおとす一方となつては不統一であるし。漢文序に「頗る逸興ありて。體甚鄙し矣」となつてゐる、その附圖の語に相當する國文序の語句がないといふのも變だし、次の譬への「花のかげに休む」といふのは衰めた見立て方であるのに、此に相當する被譬喩句がないといふのも文體上如何はしい。尙その上に事實黒主の歌は毀られる一方で、何等とる所のないものではないから、これ等の諸點を考へると景樹のいふ通りの

語句に拘泥せずとも、何等かそこに稱讚の語句があつたものといふだけは確かである。いはばたきぎおへるやまの云々。之を譬へて謂はうなら、薪を背負うた賤山がつが、花のかけに休んで居るやうなものである。花の下かけ」といつた風流は彼の修辭、形式のすぐれた點に、賤山がつといふのは彼の所詠の態に相當する。のべにおふるかづらの。は一見序詞のやうにあるが以下の排語は

野邊に生ふるかづらの這ひ廣がり

林にしげき

木の葉の——如くに多かれど

となつて數多いことを譬へた二句の中の一句に當る。うたとのみおもひて云々。三十一文字をさへ、型の如く並べたらそれが歌だとはかり思ひこんで歌の眞の精神、即ち歌の眞髓については未だ想ひ到らないのであらう。どうもこゝで特に此品さだめするだけの價値はない。

こゝに斯道發祥當時のことをも、歌の心ばへをもよく知つて居る人は、僅かに一二人になつてしまつたが、それも一長一短あつて全きものではない。かの萬葉撰集の時から今年までに、年は百年餘りたち、天皇は御十代を歴させられた。さうしてその御代々を歴るにつれて古のことをよく知つてゐる人や、古へ振の歌をよく詠む人は愈以て少くなつた。今このことについて少しく云つて見ようとするのだが、高位高官の人を喋々するのは、餘り輕率な嫌があるから、それはさしおいて、その他近世斯道に名を馳せた人々について云はうなら、即ち、僧正遍昭は歌態はよく整つてゐるが眞摯な趣がない。譬へば繪の女を見て徒に心を動かすやうなものだ。在原の業平は想はあり餘る程豊かだが、語彙が貧弱だ。之を譬へるとしほんだ花の色は褪せながら、その薰香の流石に見棄て難いといつた風である。文屋の康秀は修辭は巧緻だが、その氣品が鄙しい。いはば美服をつけた商人のやうなものだ。宇治山の僧喜撰はいひまはしが曖昧で、一首の落想が那邊に存するのかがどうもはつきりしない。いはば秋の月を見ようとして、曉の雲に遮られたやうな憾みがある。その咏する所多く傳はつてゐないために博く見渡して委しく考察することが出来ないのではよくはわからぬ。

小野の小町は昔の衣通姫の亞流である。哀婉の情趣をさぐるに讀者の同情を惹くものがあるが一體に弱々しい。丁度なやみある美人とでもいつた趣で強い趣の缺けてゐるのは作者が女性だからであらう

大友の黒主は(形式は面白いが)その歌態が鄙しい。まあ薪を背負つた山がつが、花の下蔭に休んで居るとでも見立てられよう。

以上六人の外の歌人達で、その名の聞えて居るものは野に生へた葛が這ひ廣がるが如く、又林に繁つてゐる木の葉の繁きが如くに非常に澤山あるけれども、唯型の如く三十一文字を並べさへすればそれが歌だとはかり思つて、歌そのものの眞髓といふやうなことに於いて未だ想ひ到らないのであらう。(とりたてて云ふが程のものもない)

この一段はこの序の中最も價値多いものと稱へられて居る。坊さん二人に公卿三人此に一美人を配した畫は「六歌仙」といつて後世幾多の畫家の彩官に描かれたが、色一つ線一本を使はないで簡結の筆でよく千古動かぬ六歌仙の素描を示したものは實にこの名文である。のみならず我文學批評史上彼の所謂「穴探し」でなく、眞に公平妥當なるものとしての魁祖はこの一段をおいて外にはないと思ふまで激稱せられて居る。この一段を撮要すると、

順	人	一	長	一	短	譬	喻
一	僧正遍昭	歌のさまを得たり	まことすくなし	詞足らず	繪にかける女を見て徒に心を動かす	凋める花	
二	在原業平	心あまりて	詞足らず	其様身におぼす	よき衣きたる商人		
三	文屋康秀	詞はたくみにて	詞がすかにして始終確かならず		秋月映雲		
四	喜撰法師	あはれなるやうにて	強からず		美人煩悶		
五	小野小町	(詞はをかしくて)	その様鄙し		花下の山がつ		
六	大伴黒主						

となる。この順位は何を基準にしたものか、年代か、性か、僧俗か、歌の巧拙か、但しは何等さうした考へはなくて唯思ひ出し順といふのか。年代だとすると喜撰や小町はどうしても、康秀より前に在るべきであらう。性ならば男子五人をあげて最後に小町を配すべきであらう。僧俗ならば一四二三五六と挙げねばならぬ。思ひ出し順といふのではその評の克銘なると釣合はない。するとこれはどうも作者から観て歌の巧拙順にしたものであらう。若しさうだとすると、今日吾々が、残存する文献によつて考へる彼等の所詠に關する考へは多少の異同あるを免れない。今それを各人別にいはうなら、

一、僧正遍照はなる程作者のいふが如く、一面には輕快洒脱とも謂ふべき詠が多いが、又他の一面に熱烈眞摯の詩致にも富んで居る。

たちればかゝれとしてしもねばたまのわが黒髪は撫ですやありけむ

昔人は花の衣になりぬなり苦のたもとよかわきたにせよ

かぎりなき雲井のよそにわかつとも人を心におくらさんやは

などを見るとこの評は彼の歌態につきその一のみをあげてその二を逸した感みがある。

二の業平は形式が貧弱なのではなく、よく詩語節約の精神に適つて餘情綿々の詩趣を發揮し得たもので、寧ろ天才歌人として稱揚すべきであらう。

三の康秀は正にその通りで適確に出來て居る。

四の喜撰は「我庵は」の一首に絶つた評で、この一首の評としてはよく嵌まつて居る。が併し「秋の月」に譬へた所は長所をしかといはないながらも、暗に或美點を認めたとはいふ評し方だと思ふ。喜撰が本當に一代唯この一首だけしか作らなかつたものなら到底歌仙の班に列せらるべきでないが、恐らく當時にあつてはまた外にくらも「傳喜撰」の程度で人口に膾炙した秀詠が澤山あつたものであらう。

五の小町は歌風の論とよりは寧ろ小町その人に因はれた評のやうに想はれる。近頃その一節を推稱する説があつて、「この小町の評こそは作者は「文は人なり」、「生活即和歌」の見地から論じたもので、文藝批評としては遙かに後に起つた歌學よりも進んだものである」と様にいふ。けれども近代批評に所謂人格表現・生活表現なるものはこの小町の評などとは大分その旨意を異にしてゐると思ふ。このは何となく今日の選者が投書の女名前であるばかりに、割増をして、當選させるといつたやうな心理に近いものがありはしないだらうか。

六の黒主は康秀の評と略同じ程度に妥當だと思はれる。さてかう批評する作者貫之の歌觀はどんなものであるか、土佐日記に散見するものと、本集探るところの百餘首と貫之集と、以後の勅撰集所採とを照合すれば略わかるやうに彼が口でいふが如き純萬葉集振ではない。否さうなればこそ古今集振といふ一つの時期を劃し得たのだから、その詠について別に難すべき點はないのであるが、但その作風は必ずしもその所論を裏書してはゐないことだけは事實である。ともあれこの六歌仙評は日本文學批評史の第一頁に特筆せられるもので、爾後幾多の歌論に於て、俎上にこれ等の人を戴せる毎に先づ顧られる言葉である。

第九段 撰集の謳歌

かゝるにいますべらぎのあめのした・しろしめ

伏シテ惟ミルニ

す事よつの時こゝのかへりになんなりぬる。あま

陛下ノ御宇今ニ九載ナリ。

ねさちほんうつくしみのなみやしまのほかまでな

仁ハ秋津洲ノ外ニ流レ、

がれひろさおほんめぐみのかげつくば山の麓より

惠ハ筑波山ノ陰ヨリモ茂シ。

もしげくおはしまして萬のまつりごとをきこしめ
 すいとま、もろくのことをすて給はぬあまりに、
 古の事をも忘れじ、ふりにし事をもおこし給ふと
 て、今もみそなはし後の世にもつたはれとて、延
 喜五年四月十八日（相五）に大内記紀友則・御書所預紀
 貫之・前甲斐目大凡河内躬恒・右衛門府生壬生
 忠岑等に仰せられて、萬葉集にいらぬふるさう
 た・みづからのをも奉らしめ給ひてなん。それがな
 かにもむめをかざすよりはじめて、ほととぎすを
 きき、もみぢを折り、雪をみるにいたるまで、又
 つるかめにつけて、君をおもひ、人をもいはひ、
 秋はぎ・夏くさをみてつまをこひ、あふさか山にい
 たりてたむけをいのり、あるは春夏秋冬にもい
 らぬくさくらのうたをなん・えらばせたまひける。
 すべて千うたはたまきなづけて古今和歌集とい
 ふ。かくこのたびあつめえらばれて、出した水の

既絶ノ風ヲ繼ガムト思ヒ、久廢ノ道ヲ興サムト
 欲シテ、

時ニ延喜五年、歲次乙丑四月十八日。

爰ニ大内記紀・友則・御書所預紀・貫之・前甲斐少
 目凡河内・躬恒・右衛門府生壬生忠岑等ニ詔シテ、
 各家集並ニ古來ノ舊歌ヲ献ゼシメ、續萬葉集ト曰
 ヘリ。是ニ於テ、重ネテ詔有リテ奉ル所ノ歌ヲ部
 類シテ、

勒シテ二十卷ト爲シ、名ツケテ古今和歌集ト曰
 フ。

たえず、濱の眞砂の（元俊詔）かすおほく。つもりぬれば、
 いまはあすかがはのせになるうらみもきこえず、
 さぐれいしのいはほとなるよろこびのみぞあるべ
 き。それまらら、言葉は春の花（元俊詔）にほひすくなくし
 てむなしき名のみ・秋の夜のながきをかこてれば、
 かつは人のみにおそり、かつは歌のころには
 ぢ・思へど、たなびく雲のたちぬ、なくしかのおき
 ふしは、貫之等かこの世におなじくむまれてこの
 事の時にあへるをなんよるこびぬる。人まろなく
 なりにたれど、歌のこととまされるかな。たとひ
 時うつり事さり、たのしみかなしびゆきかふとも
 このうたのもじあるをや。あをやぎの絲たえず、
 松のはの散うせずして、まさきのかづら、ながく
 つたはり、とりのあと、ひさしくとまれば、歌
 のさまをもしり、ことの心をえたらん人は、おほ
 ぞらの月をみるがごとくに、いにしへをあふぎて

淵變ジテ瀬トナルノ聲寂々トシテ口ヲ閉ヂ、砂
 長ジテ巖トナルノ頌、洋々トシテ耳ニ滿テリ。

臣等詞ハ春花ノ艶少クシテ、名ハ秋夜ノ長ヲ竊
 メリ。況ヤ、進ミテハ時俗ノ嘲ヲ恐レ、退イテハ
 才藝ノ拙ヲ慙テヌ。

適和歌ノ中興ニ遇ヒテ以テ吾道ノ再昌ヲ樂シ

嗟呼、人麿既ニ沒セシカドモ、和歌斯ニ在ラズ

すまをこひぢらめかも

臣貫之等謹ンデ序ス。

すべらぎ 統べら君即ち天皇の敬稱。しるしめす 統知あらせられる。よつとき 春夏秋冬このかへり、四季が九へんまはつた即ち九星霜を経た。醍醐天皇は寛平九年（一五五七）七月三日御即位で今年延喜五年（一五六五）四月十八日まで七年十月月足かけ九年になる。あまねきおほんうつくしみのなみ云々 古來賞美の對句。大内記 中務省の役人で詔勅のことを司る。紀友則十論四撰家の處參照（以下同上）御書のところのあづかり 御書所は式乾門内東掖にあつて宮中の書籍を掌る所、その職員に預書手などがおいてある。紀貫之 傳省く。大凡河内躬恒 「おほしかうち」か「おほいかうち」かが宜からう。「おほちかうち」は訛である。古事記上卷素盞鳴命字氣比の段に凡川内國造といふがある。或は彼の祖先と關係があるのでなからうか。「あふし」と「おほし」は違ふが「かうち」は「かふち」が約まつて「かふち」その「ふ」が音便で「う」と轉化したやうに想ふ。右衛門の府生は六衛や檢非違使廳におかれる等外（四等官以外）の下役。壬生忠岑 傳はぶく。それがなかにもむめをかざすよりはじめて云々 以下はこの集の部立をあげたもの。

むめをかざす	春	ほととぎすなきき	夏
もみぢを折り	秋	雪をみる	冬
つるかめにつけて云々	賀	秋はぎ夏くさ云々	戀
あふさが山云々	羈旅	くさくさのうた	雑歌

となつて全部はあがつて居ないが、大體こんな風に部立をしてといふこと。たむげないのり 「た」は接頭語で旅行く方向についての幸を祈ること。千うた 大凡の數をいつたもので實際は一千壹百首之に所謂墨滅の歌十一首を加へると一千壹百拾壹首なる。山した水の云々 以下終りまでは澤山序詞がつかつてあ。序詞は枕詞と同様、美化、整調、洒落、修飾等の爲めに上におく特種の修飾句

で、枕詞よりも形の長いものから左に一括してあげておく、

序 詞 序詞を承ける詞

山した水の	たえず
濱の眞砂の	數多く
春の花	にほひ
秋の夜の	長き
たなびく雲の	たちぬ
なくしかの	おきふし
あなやぎの糸	たえず
松のほの	ちり
まさきのかづら	ながく
とりのあと	ひさしくとゞまれば

眞砂 「まいさご」の約とも「ますなご」の約ともいふ。眞は美稱の接頭語。あずか川のせにならうらみ 九三三の歌をひく。さいれいしの云々 三四三の歌 さてこは各歌人はこの撰集のお蔭で自分の咏んだ歌が、世の變遷によつて後世に傳はらないといふやうな恨みはないといつたもの。それ枕言葉は云々 これは問題の句である。この語のまゝでは何とも解せられないので、

- 一、漢文序には 臣等
- 二、舊注にも 臣等
- 三、江本には つらゆき
- 四、或一本には つらゆき丸

五、同 　　それがしら

六、季吟は「臣等」と書いて「臣」を「まく」と讀め

七、三井高隆は 　　われら

八、景樹やその門人等は「われら拙き」とある拙の字形が枕と紛れたものだ

九、眞淵は難波木によつて「まろら」

が正しいといふなど、まだ尋ねれば色々あらうが難波木に有るのが本當なら「まろ等」で宜いと思ふ。まろは「圓」で賢いことを「かざあり」といふに對して愚かなことないひ、轉じて自己謙遜の代名詞になつたものである。但天皇に對してならば「臣等」とあるべきだからその點がどうかと思ふ。若し此れが公然の上奏文ではなく、唯だこの撰集が成るについて一言したい位な動機から書いたも「まろら」といつて不都合はなからう。にほひ少く、詞藻の才が貧弱で、まきをなかにてれば、未長く傳はることを省みて恥かしく思ふ。(一説に詞藻の才に長じてゐるといふ空虚な名譽を氣にけるのでといふやうに解いたのはどうかと思ふ)。おそり恐れ、人の聽いての思はくはくはに憚り。歌の心に恥ぢ思へど。歌若し心あらば定めて言々如き未熟の輩が撰をしたことを嘲り笑ふことであらうと歌の思はんことも恥かしいとは思ふけれども、たちあゝおきふしは、たちあおきふしにつけ、行住座臥心に思ふことは、つらゆきらが云々。私どもがこの大御代に生れて斯る御盛舉に遭逢したことは無上の光榮であり此上なき悦びである、人まるなくなりたれど云々。この文を結ぶに當り今一度彼の歌聖を顧みて、前の「かきのもとの人丸なんうたのひじりなりける」に呼應し且つ一面に於て窃に自ら現代の人鷹を以て任じてゐる意氣をも込めたもので、丁度孔子が「文王既に歿して文、に在らずや」といつたのと似た口吻である。たとひ歌聖人鷹が亡くなつても、かうして歴とした撰集が遺つて居ることゝいしへあふきて云々。この後の人がこの撰集に依つて古い上代の歌の風を懐かしみ且つはこの様な結構な撰集の擧のあつた延喜聖代の今の大御代を讃仰しないことがあらうか。必ずや上代の風を忍び、現代當朝の盛事を思慕するであらう。

○ しかるに、今上陛下が天下を統治あらせられることになつて以來九年の春秋を過した。至らぬ限もなき御恵み

の波は國の外までもあふれ、廣大無邊の御仁慈の蔭は「は山しげ山しげけれど」といはれた筑波山のかげよりも繁くわたらせられ、萬機の御政務をみそなはず御暇には、凡ての事をも棄てさせられず御心を行き届かせられる餘りに、古の事をも忘れまい、廢れた事をも再興しようといふ御思召から、御親らも御覽になり、後の代にも傳はつてもろ人の見ぬる爲めにといふ御趣意を以て、今茲延喜五年四月十八日に、大内記紀友則・御書所の預紀貫之・前甲斐目大月河内躬恒・右衛門府生壬生忠岑等に仰せられて、萬葉集に入つてない古い歌や、又各自の詠をも奉らせられた。そしてそれ等の中から梅をかざす春の歌を始めとして、時鳥をきく夏の歌、紅葉を折る秋の歌、雪を見る冬の歌に至るまで、又鶴龜につけて君を壽ぎ知り人を祝ふ心の賀の歌、秋萩・夏草を見て妻を戀ふ戀歌・逢坂山にいつて旅の幸を祈る禰旅歌(昔の旅には幣を道祖神に手向けて旅の幸を祈る風俗があり、その道祖神はよく國境に祭つてあるので逢坂山は山城近江の境にある所から京を旅立つ人は先づこゝに幣を手向けるといふ心で謂つたもの)や、或は春・夏・秋・冬のどれにも入らぬ雜歌といふやうな部を立てておえらばせになつた。その總數は千首二十卷、書名を古今和歌集といふ。斯の如くちやんとえらび集められて、多くの秀詠が今後永久に傳はる譯であるから、今や我詠んだ歌の運命について、飛鳥川を引合はせにして歎く必要はなく、さざれ石の巖となり、その巖の上に苔が生へる迄も榮えるとある賀の歌そのまゝの慶びばかりを享け得ることであらう。抑々私たちは詞藻の才は何の秀でた點もなく、實のない虚名ばかりこの後幾久しく傳へられることを恐れてゐるものであるから、一面人々の手前に懼ぢ憚り、又他の一面そのものの思はくも恥づかしいとは思ふけれども、併し又あけくれ始終心に思つてゐることは、何の幸かこの聖代に生を享けて、而かも斯る未曾有の盛舉に遇ひ、尙且つその撰集の爲めに幾分たりとも大馬の勞を捧げることが出来たことこそは、無上の光榮と謂ふべきである。噫々歌聖人鷹は亡くなつたけれども、斯道のことは斯して儼存してゐることよ。だからこの後どのやうに、時世時節が移り變ることがあらうとも(陳鴻が長恨歌傳に「時移り事去り、樂シミ盡キテ悲シミ來ル」とある句を採つたもの)この二十卷の金玉の文字は

歴として残るであらうよ、即ち青柳の糸の絶えるといふやうに絶えることなく、松の葉の散りうせるとやうに散迭する事なくして長く傳はり、久しくとゞまつたならば、後世斯道に興味と理解を有するものは、この撰集によつて宛ら大空に照る月を仰ぐが如く、歌道發祥の古を慕ひ、又、歌道中興の延喜聖帝の今の御代を讃仰しないことがあらうか、斷じてそんなことはない。

この一段は現代を謳歌し、撰者としての謙遜な告白をし、この集の前途を祝福し辭令の巧みなものがある。處でこの「延喜五年四月十八日」は本文の通りだと勅を拜した日附になるのだが、前後の筆致から推せば、これを撰進奏覽の日として述べたものと想はれる。卷頭十論を参照せられたい。

さてこの段の現代謳歌の句「あまねきおほんうつくしみの波は云々」の對句は着想上已に漢詩集に先例あり、又形式上四六駢儷の對句の格は萬葉の詞書にも見られる位だから、後人の褒めはやす程創造的なものではない。凌雲集の序（小野岑守作）には

伏シテ惟ミルニ皇帝陛下、紫極ヲ握哀シ、丹霄ヲ御辨ス。春臺展潔ニ秋茶煎繁ナリ。膚知天縱ニ、艷藻神授ナリ。猶且學以テ聖ヲ助ク。間ヒテ裕ナ増スモノ也。世機ノ靜謐ニ屬シ、琴書ニ託シテ日ヲ終フ。光陰ノ暮レ易キヲ歎キテ、斯文ノ將ニ墜チントスルヲ惜シミ、爰ニ臣等ニ詔シテ、近代以來ノ篇行ヲ撰集セシム。（原漢文）

とあり、經國集の序（滋野貞主作）にはもつと詳細に

伏シテ惟ミルニ皇帝陛下、教化簡樸、文明舊典、以爲ラク、傳へ聞クハ親シク見ルニハ如カズ。古ヲ論ズルニハ今ニ徴スルニハ若カズト。爰ニ正三位行中納言兼右近衛ノ大將春宮大夫良岑ノ朝臣安世ニ詔シ、臣等ナシテ斯文ヲ鳩訪セシム。詞ニ精麗アリ、濫吹須ラク辨ズベシ。文一骨ニ非ズ。備善維レ雜ハル。若シ琳瑯益光瓊瑤圓色無ケレバ、則チ虬龍ノ片甲、麒麟ノ一毛ヲ取ル。既ニシテ太上聖皇、玉璽ヲ推シテ蹤寂シ、皇帝親主昭華ヲ受ケテ德隆ナリ。共ニ積學ノ明ヲ添フルヲ勉メ、同ジク博文ノ道ヲ助

クルヲ要ス。慧性並ニ慧メ、天才俱ニ聰ナリ。雅操飛文、兩龍ノ燭ヲ分ツニ似タリ。典寄清澹雙曠ノ暉ヲ齊シウスルカト疑フ。繁健ノ詞、物ニ體シ殊ニ聳ユ。清拔ノ氣情ニ緣リテ増、高シ。寶鞘毫ヲ染メ、八體ニ勝負アル無シ。翡翠匣ヲ開キ、六書ニ優劣アラズ。堯ノ克ク讓リ、文思ナル、舜ノ浴哲ニシテ好ンデ間フ。先聖後聖、其撰一ナリ焉。又先歳昇霞ノ駕、與藻猶當代ニ遺ル。重輪ノ光、精華彌盛ナリ。臣史藉ノ卷ヲ閱スルニ、未ダ此ノ如キノ時アラズ。とある。「撰者の名」は當時の地位の順序によつたものと見える。

大内記は正六位上

御書所預は相當位が不明だが貫之が正七位上相當の小内記から、正六位上相當の大内記に任せられるまでになつたものか若くは小内記以前につとめにかと想はれる。次に「前甲斐目」とある、

目（さうくわん）もわからぬが二等官の介が六位相當だから、正八位相當位の所、右衛門府生は本官でないのだから右衛門の本官の最下位、少志が従八位上相當だから位階があつたとしても低いものだと思はれる。かうした地位の低い四人が斯道の精通者であるといふだけの廉で選ばれたばかりにこの集と共に、その名を不朽にすることが出来たのを見ると、そゞろに「人生は短く藝術は長し」の感に堪へない。「萬葉集に入らぬうた」といつて實は萬葉の歌が混入して居るのは千慮の一失か？ 後人の挿入か？ 即ち一九二・二四六・一〇七三は明らかに萬葉の歌なり。六九九・七二〇・一〇八〇・一〇八二・一一〇七・一一〇八の六首も萬葉の訛りや一部改作なり。元永本・清輔本には七五八の次に萬葉七七六の歌があり、元永本には四〇八の次に萬葉の一四〇が入つて居る。部立は萬葉集の挽歌をうけて哀傷、相聞をうけて戀と様に、前集已にその型のあるものもあるけれども、多くは撰者の創意に出で且つ各部に於ける各詠の排列も人しれぬ苦心を拂つた跡がある。紋も型もない時代に、これだけの整つた集を撰ぶには、容易ならぬ苦心があつたものと思ふ。それにつれても一〇〇二に貫之が、

としなへて	大宮にのみ	久かたの	ひるよるわかす
つかふとて	かへりみしせぬ	わがやどの	しのぶ草おふる
いたまあらみ	ふる春雨の	もりやしぬらん	

と詠進した、この末句は強ち空虚な誇張ではなかつたらう。(二〇〇三にも忠岑の詠進がある)

以上本集の序の大意を説いたことになる。實はこゝに「纂評」の一章を設けて、諸家の本文に對する批評を列記しようと思つたが、冗長を恐れて省いておく。

とにかくこの序は毛詩序や文鏡秘府論や己出詩集序などに暗示を得たことは從來説かれた通りであらうが、作者貫之の歌道に對する自信と熱意とに加ふるに天賦の文才を以て、創作されたもので後の歌集の序や一般國文の模範となつたことは勿論、この一篇に含まつた。和歌本質論・本邦和歌史觀・歌學・文學批評・萬葉考等は之を源泉として次第に派生し開展して、それ／＼文學史上の主たる流れを見るに到つた點からしても、重要視すべきであらう。そして又その形式はと見れば漢文から獨立して日尙淺い國文體を以て、叙事と叙情と議論と上表とを併せて斯くまで複雑な長篇なのだから貫之はその文才だけででも日本文章史上永く創始の功を認めらるべき人と謂つて宜しからう。

卷第一——第六 春・夏・秋・冬序説

古今集といはず、爾餘の勅撰集といはず、集を味讀する二大綱となつてゐるものは四季と戀とである。この二つに寄せる歌人の詩趣があらゆる場合の詠歌の根調になつてつき纏つて居る。でこの集が戀に五卷を、四季に六卷を裂いたことは權衡宜しきを得たものだと思ふ。北半球の温帯に位置する我邦は略各地を通じて四季折々の變化があつて、自然が國民に與へる官能の享樂は他の諸外國に比しては遙かに豊かである。物質に於ては貧しいかも知れぬが、自然美に於ては恵まれて居ることは内外共に等しく認めて居ることで今更喋々するまでもない。(漢文序には少目)

さて本集の四季の歌を讀んでの感じをいふとその題材に於て感情思惟の形式に於て、縦には純日本式の傳統的なものに繼ぎ横には隋唐朝外來の影響を受け、この經緯の上に逍遙遊した王朝歌人の風貌を忍ばせるものがある。梅の花を見れば主にその香をめで、百花に魁けて咲くことを歌ひ、月夜の清楚、水邊の雅趣、凋落の愛惜など、早春の歌は大部分梅である。處がその梅の香はといふと、なる程薫りは高いけれども之を今日のヴァイオレットやスピードビーの芳烈に比べては極めて淡泊なもので、この淡泊を愛することはこれは支那に教へられたものではなくて早く萬葉歌人のたゞへた趣味を繼承したものである。(その萬葉歌人の愛梅は支那よりの移入もあらうが)宮中の植樹にも、承和十二年の紫宸殿前の梅、同十五年の仁壽殿前の紅梅、天曆の御時の梅の微發など有名な史實もあり、わざ／＼その樹を名に負うた後宮梅壺もあり、雉子を贈るにも定つてこの花の折枝(無ければ遣花の梅)につけたともいふ。

その梅にも増して多く詠まれたのは櫻である。萬葉では櫻の歌の數は梅の歌の半分にも達しないのに此集では、梅の

十七首に對する櫻の四十一首といふ驚くべき多數に上つて居る。それは一面に於ては、王朝趣味そのものが最早無刺戟單調な色彩では嫌らずとしてこの絢爛彩華を愛好するやうになつた故もあらう。又旨とその一理由に歸して居る學者もある。けれども余が思ふには、矢張此も日本趣味の延長である。早く古事記神代の卷に櫻を以て、木華咲耶姫と神格化した話があり、允恭紀第八年二月に天皇が、衣通姫の美を櫻に比して作られた御製がある。中にも面白いのは履仲天皇紀、三年冬十一月といふに磐余の市磯の池で御うたげの最中川上から櫻の花が流れて來たといふので、「この花の有處求めよ」とあつて長眞瞻連が勅を拜して櫻の探索に出かけ、掖上室山でつきとめて歸つて復奏したので、天皇は非常に御悦びになつて、そこに磐余若櫻宮といふを設け、長眞瞻連には稚櫻部造を賜つたとある。因て想ふに上代に櫻の歌が少いのは、まだ單なる自然木として山野にあるだけで歌人寓目の機會が乏しかつた故ではあるまいか。それが平安の都が敷かれる段になると「柳櫻をこきまぜて」との歌句通り、この二樹を御路樹として人足しげきやちまたに紅白繚亂の美を呈することとなつたので、どんな無神經な者でも之をほめ嘯さすには居られなかつたであらう。元來この櫻は我邦特有の美花だと聞いて居る。(今日では方々外國にも移植されつゝあるが)だから櫻の歌は決して支那の受け賣ではない。若しもこの櫻が日本同様咲き盛る國があつたらどうかといふにまさかこれを見て「どうも不愉快でたまらぬ」などいふ國民もなからうから、日本に櫻の歌が發達したのは唯植物分布の關係であるといへばそれまでだが、此花と我國民性との間には深い相似があつてその淡泊無執着・その感激性・その逸早き活躍性と脆弱性、言ひかへれば、そのあつさりとしてしつこくなくそのかつとなる處、そのすばしはいはでなはたらき、それでゐて脆く直ぐほろりとして弱るところまで、まるで日本人に根が生へたやうな花である。だから後世武士道の萌芽するまでもなく此花と此國民とは、合縁奇縁の自然と人生であつた。

次に夏の大立物は時鳥であるが、支那人のこの鳥に寄せた情は悲哀感傷、厭ふべく、悲しむべきもの勝たのに、本集

歌人の時鳥の歌にはその初音をゆかしみ、そのなく音の常住ならんことを望み、この集にはないことだが、清少納言の如きは時鳥をけなすものがあると向きになつて憤つた位であつてこゝにも日本人固有の樂天的、親自然的な傾向が見られる。次に秋の呼物は紅葉である。龍田姫を想像した日本人はこゝに造化が綾なす黄紅の錦繡をたゞへること、已に前代からあつたが一つ注意すべきことは、こゝにも王朝趣味を見せて「もみち」といつても多くは紅を呈した、それをめでるやうになつたことである。萬葉では黄葉・黄變・黄などを「もみち」とよませて柞のやうな黄葉するものを稱へたのに當期に入つて、黄が紅に代位したことは白梅の外に紅梅をもめで、その紅梅にも増して櫻をめでた好みと相通するもので、之を女性の好みに譬へるなら嘗ては濫いお召を好んだ中年の夫人であつた上代日本が、今は紅紫絢爛の友禪縮緬を愛する妙齡の令嬢とも謂ふべき王朝日本と變つたからであらう。冬の景物の最上は、雪となつて居る。これにわびしい情をよせたものも幾らかはあるが、大體に於ては雪は觀て樂しむべきものと歌はれて居る。無論山城の京か、でなくば近畿地方に降る雪が目標で津輕の雪や北海道樺太の雪を見せたら古今集歌人も大分ちがつた雪の歌を詠んだらうと思ふが、何しろ今でからに少しばかり降つても「サア雪見酒を」などと騒ぐあたりの雪の歌のことだから、觀はやすべきものと思ふに無理はない。天平十一年正月二日の雪見は名高いが、大同三年の十二月、貞觀十四年十一月の八日、元慶五年十一月十九日の雪など面白をかしく寫されてある。雪を面白がる餘りに、雪の山を作ること一つは雅遊となつて居た。枕草子雪の山の一段をよむものは如何に一條の御代の宮廷がのんきなものであつたかが察せられよう。瀧口、所の衆、上番のもの、非番のものと二十數人の奉仕人が夢中になつて雪かき集めて積み上げるのを、玉簾半ばまきあげて中宮定子を中心に清女や宰相の君や多くの才媛が見てめでた處は、想像するだに一幅の土佐繪が出来る位だ。時代は少し下るが、紀元一千八百五年近衛天皇の久安元年十二月二十日に洛中、殿上共に九寸許雪が降つたので宇治の左大臣藤原頼長は自邸を出て雪見に出かけ辰刻舟岡に向ひ次いで東北院へ見に行くところまで權中納言と落ち遇ひ、それから歸つ

て雪の山にとりかゝり翌二十一日戌の刻に完成した。この山の大きさ、東西一丈五尺南北一丈二尺七寸高さ一丈八尺二寸とある（台記）以上は日本固有の自然美の観方味はへ方の一例を謂つたものだが、更に他の一面に外來思想の影響感化殊に支那文化の示唆多いことを看過してはならない。二十四番花信風から「浪のはつ花、二二」といひ「年々歳々花相似、歳々年々人不_レ同」から「我ぞふりゆく、二八・年ふる人ぞあらたまりぬる五七・昔は又もかへりきなまし、九八」といひ、「洛蕩三月春如錦」から「都ぞ春は錦なりけり、五九」「大抵四時心摠苦、就中斷腸是秋天」から「物思ふことの限なりける、一八九」「燕子樓中霜月夜、秋來唯爲一人長」から「わが身ひとつの秋にはあらねど、一九三」「月中桂樹あり」から「久かたの月の桂も、一九四」「歳寒知松柏後凋」から「つひにもちぢぬ松もみえけれ」三四〇など、これ等何れも支那に泣き方、歎き方、興じ方を教へられて着想を豊かならしめてをる。一九七の「よるの錦」の如き全く支那的着想に救はれた含蓄であり、秋の景物の菊なども大分その受容の跡が見られる。けれども又時には悪趣味をも受けついで居る。一七四から一八三に至る七夕の歌の如き、全く支那の牽牛織女が崇つた拙劣歌ばかりだ。佛敎的厭世觀の影はこの部には極めて稀薄で、二六の西大寺の柳や、六五の蓮葉の如き寧ろ明るい聯想である。けれども七三の、うつせみの世にも似たるか花櫻咲くと見しまにかつ散りにけり

の如きは明らかにその影響である。

此部にとられた、題材は目錄や題材索引で見てもわかるやうに後世の俳諧季寄や、今日のカレンダーに比べると大分無いものがある。春の菜の花、蒲公英、菫、げんげに、四十雀、こまどり、かしどり、燕に蝶といふやうなものは平安の京にも見られたであらうが、これを歌はない處を見ると此も漢詩集などをまねて一種の型に囚へられた氣味がある。同じ行き方で、夏の螢・夕立・あやめ・朝顔・納涼・月・朝風・夕風・空蟬・蜻蛉・雷鳴・瀑布・秋の果實・稻田・桔梗・砧・冬の山茶花・水仙・讀書・夜話など一寸思ひ浮べても歌ふべき景物は可なりに遺されて居る。けれども春と秋とに各一卷を夏と冬とに各一卷を割りあてたのはこの頃の自然美鑑賞の比例に準じて、よく釣合がとれて居る。これで見ると王朝人が春に笑うて夏にわびて秋に泣いて冬に歎いた生活調子が大體窺はれる。そして清少納言は春曙夏夜秋夕冬曉といったが、本集では春に晝の歌が多く、夏は夜の歌が多く、秋は朝晝・夕・夜・夜更けと擴がり、冬も晝の歌が多い。

卷第一 春 歌 上

ふるとしに春たちける日よめる

在原 元 方

「年のうちに春はきにけりひとせをこぞとやはむことしとやはむ

詞書 清「……春のたちけるによめる」

元「ふるとしに春のたちける日」

六帖一 春立日

同 狂言餅酒 年のうちに餅は搗きけり一年を去年とや食はん今年とや食はん

立春といふ。禮記月令に「某日立春、盛徳在木」とある。これは立夏の火、立秋の金、立冬の水と對稱的にあげたもので、古代支那

式の配行である。我邦でも地方によつてはこの日「立春大吉」などと麗々しき札を家の戸口に貼つたりする處があるのは想ふに支那の風俗から來たものであらう。年内に立春になつたので、驚き興じてよんだもの、さてこのやうに「この歌は云々の場合に咏んだ」と歌の始めにあげた文を「詞書」といふ。詞書は外的歌境の説明と思へばよろしい。俳句に俳境あり、詩に詩境ある如く、歌に歌境がある。その歌境の内面的なものは、とりも直さず歌自體であるが、さうでなく、これは「いつ幾日ごそこそで斯様々々の場合に咏んだものだ」といふ風に外部的な事情をあげるのである。春木の芽が張るから「はる」といふとか、晴れるから「はる」といふとか色々語原説もあるが、唯「春」でよくわからう。そんなことをいふと「年」も「疾し」で早く過ぎるから名づけたなごもいふ。來にけり」は過去から轉じた咏歎助動詞で來たなあ、來たことよの意。一年を 既往今年の正月元日から昨日までをこぞ去年

と云はむ。「や」は疑問助詞の倒置せられたもので「と云はむや」……と云はうか……と云つたものかなどの意。

（こりや驚いた）年内に立春がやつて來た。かうなつては今日からは年が改まつて春だから、昨日までを去年といつたものか、それともまだ暦の上では新年にはならないのだから矢張今年といつたものか、（その名稱に迷ふなあ。）

當時の暦は無論舊暦であつて、宣明暦といふのを用ひて居た。これは清和天皇の貞觀三年（一五二一）六月十六日から採用せられたもので、高頭式氏の日本太陽暦年表によると、この六月十六日は今日の太陽暦に直すと七月三十一日に當るといふ。尙この事については、好古類纂第一編第十集八——九に尾島碩有氏が「本朝天文曆通の沿革」と題した論文の一部として記述して居られる。

さてこの歌に對する評は褒貶區々であるが、ひどく褒めたのは抄で「卷頭の面目比類なし」といつて居る。この集の一番に選ばれたのは素敵だといふつもりだらうが、之に反して打聽は「つまらない歌だが外に持つて行き處がないので、こゝにおいたものだ」といつた。思ふに撰集で一番最初にあげられるのは、それが秀味であるからといふ場合も後世數多例のあることであるが、古今集の他の季節の歌と照らし合はせて四季の歌は主として、季節順に排列せられてあつて春の部とても早春・中春・晩春と順序が立つて居るのだから、これは秀味とか駄作とかの意味でなく、季節の上で一番早い時を歌つたものだから始めにおいたものである。尤もその季節の早い歌が二首以上ある場合には、勿論その中優れたものが始めに出されようが、こゝでは同じ立春の歌と云つても二、三、四は年が立つてからの立春で、舊年の中に立つた春の歌としてはこの歌がたつた一首あるだけである。

この歌の面白いのは一二句で先づその事柄をあげておいて下の句でそのをかしみを輕快な對句で歌つた點にある。「年内立春」といふことを一二句に示しておいて「こぞとやはむ云々」と對句で疊句で而かもその口調を推すと「去年といはうか今年といはうか、去年のやうにもあり、今年のやうにもあり、去年でもなければ今年でもないとも云ひ得

■ 去年の夏の暑い盛りには、袖をぬらしてまでも手で掬つて飲んだ水もその夏暮れて秋となり、秋亦暮れて冬となり、寒さにいと凍りつめてゐるが今や季節は立春となつた。彼の月令にも孟春之月、東風解氷とあるやうに、けさ吹きわたるアノ春風が、その氷をば解くことであらう。

■ この歌の佳處はその餘情に生々の氣を含むことと、上の句三つで三季の推移を機用に歌ひかけた點にある。語句の方面では水と氷、むすぶと解くの對照が面白い。但「解く」はむすぶと對語をなしては居ない、縁語的に選ばれた語である、解くに對するものは直ぐ上の「こほれるを」である。一葉落ちて天下の秋を知ると同じく、一氷解けて天下の春を卜することも出来る。水にとつて「凍る」といふことは生命の涸渇でないまでもたしかに一つの凝滞である。今や東風習々よくこの凝滞を解放させて水は固有の流動性に活氣を呈する。草木はめぐむ、花は咲く……と聯想すれば、立春初頭已に心の春光融融たるの感がある。袖をぬらして渴を醫したそれは去年の夏のこと、それから秋が来て（秋はこゝの字面では飛躍してなる）それから冬枯といへば作者の心境にはその時々々に於けるその水と自分の生活とが結びついて聯想内容が豊富になる。けれどもこの歌で遺憾なのは「水」そのものがそれ／＼ちがつて去年の掬んだ水と、冬凍つた水とは別々のものであるべき筈だから、難併に

夏にげた日なたを冬はおひまはし

といふその「日なた」のやうな固定した歌材となり得ない點が一つと、作者は唯「孟春之月云々」の月令や

池凍東頭、風度解、窓梅北面雪封寒。（立春日、書懷呈芸閣諸文友、篤茂）

の朗咏の句によつて、掬つちあげたものかのやうにとられて、うるほひの少い概念詩に墮した氣味があることである。この歌を讀んで作者が或る特殊の水邊に立つて景に即して懷を賦したものでないことは明らかだが、

あゝ立春といへば思ひなしか、吹く風もかなやうに思はれる。この分では板井の水の凍ても——ホラあの去年北山へ遊びに

行つての歸りに袖をぬらしながら掬つて飲んだ——あそこいらもホツ／＼解けることだらう」

との意に歌へば自然味があらう。

けれども尙よく考へて見ると今日は立春だといふ特別の感で曆日を迎へ、靜かに一室の裡に安坐して「ハ、ア朗咏には云々といつたな、禮記月令の文句にこんながあるな」など思ひめぐらして、つひかうした表現となつたことを想へば作者の歌境は「春待つ心」の悠容と和暢にくつろいでゐることも想見せられる。これを現代人が日々の生活に追はれて親の瞑日も忘れ勝といふのに比べて轉々歎羨の至に堪へぬものがある。

題 しらす

よみびとしらす

三 春霞たてるやいづこみよし野の吉野の山に雪はふりつゝ

二句 元・風 「たたるやいつこ」

五句 濤「ゆきけふりつゝ」

六帖一 霞、新撰 同。

■ 霞。マ行四段第二活用より名詞となつたもの、この霞は歌では通常春の景物として歌ふこと、宛も秋の霧のやうなもので「春霞」「秋霧」といふ歌語はよく使はれて居る。たてるや。餘材抄に風體抄を引いて、

風體にはたゝるやいつこと有てさていはく、「此うたはたてるとかきたる本も侍れと、よき本には皆たゝるやとかけり。歌だけしかたなといみしく侍を、今の世にはたゝるの詞のふりにたるなるへし。たてるにては又あまりにつよくてしなのおくるゝなるへし。」

と云つて、「しかし今は流布本によつて「たてる」を探ると斷つてなる。思ふに一首の歌振可なり古調を帯びて居る點から推して察る

「たちたる」の約「たる」の方が正しいのではなからうか。疑問。みよしのよしのの里。「み」は美稱の接頭語よしのが二度あるのは音調美化の疊句を仕立てる爲めで、之を上吉野は郡名下の吉野は村名なごとして、吉野郡の吉野の里などいふのはくだましい。さひのくまひのくま河、眞玉手の玉手など類例が他にもある。つ。進行現在時を示す爲めに、現在完了の「つ」を二つつけた助詞で、こゝならば「降りつ降りつして」「降りくして」などいつても合ふ。現に雪がチラ／＼降つてゐることを指している。

本集にはこの種の見出しの歌が大分ある。(歌境索引参照)これは「詞書を何として可いかわからない」といふことで、詞庭しらす。昔とは前にいつた通り外部的な歌境をいふのだから、つまりは「味んだ場合が不明」といふことなのである。後世頤味の風が盛になつてからの「題」とはちがふことを注意する必要がある。後世流に題をつけるのだから大抵は何とつけられさうなものが本集では「題しらす」となつて居る。次に

よみ人しらす。といふのも「作者不明」の意に解すれば宜しからう。後世には「讀人しらす」としたものは、

一、眞に不明の場合。

二、作者の地位が卑しいので名を出すのを憚かる場合。

三、作者の地位は相當だが當時勅勅の身となつてゐる場合。

などがある。本集では三八七の白女は遊女であり二七二・四二〇の菅公は當時左遷の身でありするが共に名がちやんとあがつて居る。「讀人知らず考」には、この集の「よみ人しらす」とした歌に一々作者を當てて居る。ついで見ると作風と照らし合はせて、成程と思ふやうなものにはあるが、然かく推定した根拠が明示してないから採る譯には行かぬ。それに又、後世の揣摩臆測てわかるやうな作者ならば、その當時の實に當る選者がんで知らないといふこともない筈である。傳説程度の歌境や味み人は早くから一々左註に附け加へて「この歌は或人の曰はく云々の人が云々の場合によんだものだといふ」としてある。契沖は、後撰には題しらすよみ人もとなくみにもかけり。

と云つて居る。けれども題何々、讀人何々と一項々々を別けた本書の書き振も拙いとは云へなからう。

こゝみよしのの吉野の山には現にこの通り雪がふり／＼して、春とは名のみの一向春らしくもない。が、春が来た以上どこかに最早春めいて霞がたちわたつてゐる處もあるだらう。あゝ一體春はどの里を訪づれて居ることだらう。

深山春來ること遅きをわびて雪に焦躁の感を授けたもので形式も亦蒼古簡結である。二の句が殊に褒められて居る。これを、

何處に立つや 立つは何處ぞ 何處たつらむ

などしては折角の重みが浮いて來る。吉野は早くから聞えた名山で、而かも深山で麓に春は訪づれても、こゝは雪氣のいつ／＼までも寒日和、こゝにして四方の景色を見渡しても山といはず岡といはず里といはず川といはず凡てが冬枯れの物蕭々たる舊觀を改めてゐない。そこで「春霞たてるや何處」と咏歎的に問ひかけた心持も充分肯かれる。強ひて難をいはゞ表現稍上品に過ぎ大まかに過ぎて、「九の「みやまには松の雪だに」の咏に比べると冬をわびた感じも春にあこがれる感じも強烈に表れてゐないといふ一點である。お負けに冬の名残ある作者の立ち場を「みよしののよしの」といつたので音調からは救はれたが、それだけ作者はその地點を愛好しつゝある者の如くにすら解せられる。

尙類歌として契沖のあげたものが三首ある。

梅の花ちらくはいづくしがすがに此きの山に雪はふりつ、(萬葉五梅花卅二首の中八二三大伴百代)

は深山梅ちること遅きを悦んで心靜かに宴でも催して遊ぼうといふので想はこゝとは正反對だが、想路(想の開展状態)はよく似て居る。

雪もふり霞もたてるよしの山いつかたなかは春とたのまん(新拾遺二春上二八、東三條入道攝政の家の賀の屏風に大中臣能宣)はこの咏から一步を進めた作意だが、題材繁多で主想が強く表れてない。吉野山をまるで、冬春の兩刀使ひに見立てた

もので、さうした吉野山に打興じる趣旨の歌にするなら面白からう。

山みれば雪ぞまたふる春霞いつとさだめて立わたらん(貫之集一、延喜十四年十二月女四宮の御屏風の料の歌亭子院の仰せに
よりて奉る十五首の其二)

はこの歌の吉野山といふ個想をおしなべての山といふ類想にしたもので、これより劣つてをる。
拾遺集の九に、

わが宿の梅にならひてみ吉野の山の雪をも花とこそみれ(題しらす、讀入しらす)

とあるは作者の位置をこゝと顛倒して詠んだもので、これも一つの趣向である。

續古今の九に

春霞たちはそむれどみ吉野の山にけふさへ雪はふりつゝ(初春の心を紀貫之)

とあるは想こゝのと同じく調は和偕を缺いて居る。

續拾遺の七に

今もなほ雪はふりつゝ朝霞立てるやいづこ春はきにけり(寶治元年十首歌合に早春霞、萬里小路右大臣)

とあるは、口調相似て遙に劣つた凡作である。

玉葉の七に

いつしかも霞にけらし三吉野やまだ古年の雪もけなくに(早春の心を前關白太政大臣)

とあるのは前掲大中臣能宣の詠と同じ着想だが、措辭はずつと高雅で殆どこゝの詠に追隨する觀がある。その他の代々の撰集には却つて吉野の山までも霞みわたつて世はなべて春と様に歌つたものが多くなつた。

二條のささきの春のはじめの御歌

四 雪のうちには春は來にけり鶯のこぼれる涙いまやとくらむ

詞書 元、「春のはじめに、二條后宮御歌。」

二句 新撰「けふやとくらむ」但し今の刊行群書類從卷百五十九の同書には「いまやとくらむ」とある。

六帖六 うぐひす、新撰 同。

二條の後 御名は高子、贈太政大臣藤原長良の御女、承和九年(一五〇二)御降誕、始め叔母君五條后順子の許に人とならせられ(その頃業平との情事を傳へられる。(このことは大鏡や伊勢物語にある)大鏡裏書によると業平は五條后よりは十六年下で、二條后よりは十七年上である。貞觀八年十二月廿七日清和天皇の女御として御入内、之より先兄基經が吉夢を見たが、後果して陽成天皇を御産みになつたといふ。

后襲^三臥庭中、苦^三腹脹滿^三頃之腹潰、氣昇屬^三天即便成^レ日、其後以^レ選入^二掖庭^一途在^レ身焉、貞觀十年十二月十六日乙亥生^三帝於^三染殿院^一(三代實錄)

引續き貞保親王・敦子内親王を御産みになり、貞觀十三年從三位に敘せられ、元慶元年正月三日御子陽成天皇の御即位と共に夫人と稱し、次いで中宮と申し上げ、世間ではその御住まひの場處によつて「二條の後の宮」と申上げた。同六年陽成天皇の御退位と共に皇太后と申上げたが、寛平八年九月廿二日に東光寺の僧善祐と密通の廉により后位を停めて唯前の皇太后と申すことになり、相手の善祐は伊豆の講師に左遷せられた。そして勅勘のまゝで延喜十年三月廿三日に六十九歳を以て薨去。後、朱雀天皇天慶六年五月廿七日に勅によつて本位に復せられた。

元慶皇后、在昔停^三徽號^一、稱^三前皇太后^一、椒庭之月長閑、芝砌之霜多改、未^レ及^二渙汗^一、早斷^三德音^一、往事在^レ耳、朕猶慟焉、故追復^三本號^一、以慰^三芳魂^一、(本朝文粹卷二 二條后復^三本位^一詔 管三品)

そこで問題は、この詞書である大體はこの集を撰ぶ時は正しく廢太后の御身であるものを二條の后と書くことはどうも不穩當であるか

ち、これは始め讀人しらすとするか前の皇太后の宮とするかしてあつたものを、天慶以後復本位詔と共に手稿本に之を訂正したものが傳はつたものであらう。或は又次のやうにも想像される。

よしや後には尊稱褻奪でもこの御歌を御味みになつた當時はまだ中宮若くは皇太后と申して居た頃ではなからうか。又廢後の詔をお下しになつたのは宇多天皇で、延喜の醍醐天皇の御代となつてはこの皇后に對して廢后といふ程の御告めもなく、さりとして次の朱雀天皇のやうに態々尊稱追復の恩詔を賜はる程の御意志もなく、マア、無關心の状態であらせられたが爲めに、その御心理を反映して撰者もこんな書方をしたものでなからうか。とも、

一方で「二條の後のまだ東宮のみやす所と聞えける時」と斷つた詞書があるのから推して、この御歌はその頃ではなく、どうして元慶元年以後におよみになつたものだ（契沖）とも、

廢太后始めての新年即ち寛平九年の御述懐だ（金子氏）とも解せられる。

何にしても他の作者の署名と一致させる上からは元永本の方が宜しい。が又思ふにこの書皇族の歌は敬遠してたま／＼あげたものは皆左註や詞書だけであるから、その點からこの體裁の方が撰者本當の書き振であつたらう。春の始め、早春といふことだが、歌の意味からいへば矢張立春の御歌である。御歌「おほんうた」と訓む「大御歌」の鼻音便。雪のうちに、殘の雪のまだ消えやらぬ中にと解く、「現に盛に降つてゐる中に」とも解せられるが、それならば「雪ふれど」である。それに下の鶯の涙の解けるといふ想像と合はない。春は來にけり。曆の面で立春の節に入つたと解く。若し見渡す四方の景色が春めいたといふ心ならば他に言ひまはしがあらう。鶯、春の名鳥で詳細は之を主想にした一〇の處にあげよう。こほれる涙。寒さに凍つてついた涙。この語句につき古註様々の詮議があるがつまらない穿鑿だ。鶯は人間のやうに涙をこぼすであらうか、よしやこぼすとしても温血動物の涙が凍るといふ理窟がない。これは死んだ鶯のことである……とマアかういつた意味合の議論だが「歌は理るものにあらず」と景樹がいつた通り、寒暖計で涙の温度を測定して歌つたりはしないものである。神經の繊細な王朝女流歌人が、「鶯が啼く、人も泣く、人は泣くと涙をこぼす、鶯も啼くと涙をこぼす、涙は一種の液體で液體は極寒には凍る、そこで鶯の涙も凍ると想像するのも面白からう」位な聯想を斯う理窟張つた

思惟形式ではなく極くなめらかに直感的に馳せた結果の表れで、これもこの集繊細の歌風を表して居ると想ふ。いまやの「や」は強調と味歎で「今しも」の「しも」と略同じである。とくらむは自動詞で解けるであらうの意。

■ 殘の雪のまだ消えやらぬ中に早くも立春とはなつたるよ。さては、一冬の寒冷になきの涙の、その涙さへも凍りついて打詫びてゐた鶯も春の陽氣に促されて凍て解けとなりやがて嚙曉のやさ音に啼くのも遠いことではあるまい。

■ 撰者がこの御歌をこゝに入れたのは、三以下暫らく早春の雪を詠じたものを採るつもりなのであらう。處でこの歌雪のことは極めて軽く第二句に片附けて、更に鶯にロマンチックな想像を投げやがて來る百鳥千鳥囀りかはす陽春二月の序幕を切つて落したかの感がある。が併しこれを廢太后後第一年の正月の御歌とすると、大分趣を變へてとる必要がある。契沖は餘材抄に廢太后の事實を詳細に説いては居るが、この御歌の解としては單純に、

「ふる年の雪はいまだ消ぬに日數は春になりければ、涙も氷雪にとちられて過つる鶯も、今はおの時待出て花にこつたふ心もつきぬらんのよしとぞ聞侍りし」と定家卿釋したまへり。鶯に涙あるにもあらず、こほるべきにもあらねど、啼物なれば涙といひ、涙あればこほるといふは歌の習也。

といふ處が評釋には「これは廢太后後第一年の春の御歌で、涙々に明け暮れて、やがて一陽來復の春が來た。お屋敷近く飛んできてさ／＼なく鶯も、我ごと物悲しさの音に啼いて居ることであらう。その鶯の方はやがて陽氣の暖まるにつれて、いつか凍て解けて鶯固有のほがらかな歌を奏でもしよう。それに引きかへ、この我身にはいつ樂しみの春がめぐることか思へば心細いことだ」と様に解いて御意裏さこそと傷ましいと評せられてある。始めて讀んだ時は「これある哉」と感歎之を久しうしたものであつた。が段々考へて見ると若しさうした御歌ならば撰者とても「御述懐の御歌だ」といふことがわかつてゐる筈で、當然雜歌の部に入れらるべきであるし、撰者の主なる一人紀貫之が業平の歌を見てすら「詞足らず」といつた位だからこの解釋のやうに一首の中心思想は、全く字面から隠れて含蓄として鑑賞し得るに止

まるやうな歌ひ振は恐らく歌態不充分として、撰に入れなからうではあるまいか。して見るとこの御歌は矢張字面通りにとつて早春生々の序曲として繊細な想像を以て咏まれたものと見るのが正しくはなからうか。

題 しらす

よみ人しらす

五 梅がえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

詞書 元、「不知題、讀人不知。」

四句 清「なけとんいまた」

六帖六 うぐひす、新撰 同

梅がえ。は梅の木の枝には違ひないが已に破蕾開花しかけた梅の花の枝と想はれる。きゐる。來居る。「ある」は「たつ」に對しておちついてちつとしてゐること。來てとまつて居るといふ程の心。春かけて。「かけて」といふに二つの解釋がある。「兼ねて」で兼任官を「大納言にて中宮大夫をかけ給へり」などの「かけ」である。けれど歌や文で「曉かけて」「春かけて」などいふのは、その直前時から過渡する意味で、夜中から曉へかけて「一日の暮から夜へかけて」「冬から春へかけて」といふ意で、こゝもその方にとる。處でこの句は一句隔て、「雪は降りつゝ」にかゝると説いた舊註がある。「梅が枝に來る鶯鳴けども雪は春かけて降りつゝ」といふので一通り意味は通じるが、折角語句の聯接がうまく出來てゐるものを強ひて破すことになるから、矢張直ぐ下の「なけども」に係ると解くべきである。

梅の枝に來てとまつてゐる鶯は。(もう冬の暮から)春へかけて(春を知らせ顔に)啼いてゐるにも拘らず(心なの)雪は今に毎日降り／＼してゐる。(冬から啼く鶯のめでたいのに引きかへて、春まで降る雪のわびしさよ)

有情の鶯、無情の雪、兩々相對照して春また浅い庭の面の媚目、そして鶯に興じた心持よりも、雪にわびた心持

の方が少しく重いことを「なけども」の「ども」によつて表して居る。催馬樂呂の歌から唯しを抜いて採つたものであらう。萬葉十九の四二八六に、

御そのふの竹の林にうぐひすはしはなきにしを雪はふりつゝ(天平勝寶五年正月十一日積雪一尺二寸にも達したといふ時)

とあるのは梅と竹とのちがひはあるが、殆ど相似て居る。尤もこの時は一尺二寸許も降つてこの歌の前にはその雪を珍らしんだ歌がある。けれどもその次に、

鶯のなきしかきつ(垣内)に匂へりし梅この雪にうつるふらむか

は梅のために雪の害を氣遣つた歌であるから、他に關係なくこの一首を抜けば「御そのふ」の歌はこゝの歌と略相徴逐して居る。けれどもこれは暗合で模倣ではない。が、新古今一春上一八に、

和歌所にて關路鶯といふことを

太上天皇(後鳥羽院)

鶯のなげごもいまだ降る雪に杉の葉しるきあふさかの山

はこれを本歌として梅が枝を杉の葉に、庭前を逢阪山に目先を變へて清新味を出されたものである。

雪の木にふりかゝれるをよめる

素性法師

六 春たてば花とや見らん白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく

詞書 素性集「木に雪の降りかゝるを見て」元「雪の樹に降りかゝれるを」

二句 清「花とやみえん」清「伊勢大輔自筆本には、花とやみらん」

結句 六帖一 のこりの雪「鶯ぞなく」

新萬上 春來者花砥哉見留濫白雪之縣禮留柯丹鶯之鳴。

❶ 降りかゝれる。降り懸れるで降り初めるではない。見らむ。見は上一段で「らん」につづくのは第三活用だから「見らん」とするのが正式だが、句調上「らる」の連続が語路流れ易く、それに字餘りになる處から「る」を省いて「見らむ」とすること萬葉に澤山ある例だが後世は衰へた、「見るであらう」といふ意。但しこの見るは眼で見るとよりは心で想ふこと。

❷ 春になると花が咲くといふ思ひなしで雪の降り懸つて居る枝を、花が咲いたと想つたのであらうか、アレ鶯までがとまつて啼いて居る。

❸ 幾ら近眼の鶯でもまさか花と雪とをまちがへるやうな、うつけはあるまいなどいふのは常識上のことで、こゝは作者まづ枝の雪を花かと思ひ、ついでその景に興じ、自分がまちがつたではまた興が薄いと見て鶯をやとつて來たもので、詞書によれば「雪の木にふり懸れるをよむ」のが主なので、そこまでは實景に即したものだ、これに鶯をとまらせて啼かせたのは恐らく作者の想化によるものであらう。而かもその奥には鶯を有情化して、花が咲いたら逸早く啼くのを我が使命と自覺せるが如くに取なし、その上に擬人法を使つて、雪を花と見るだらうといひ、その擬人法の中に「積雪花の如し」といふ直喻を含め、一見淡白なやうでなく、小手がきかせてある。がそのために詞書では「雪の木にかゝつて居る有様」が主であつたものが、歌の方では「枝になつて居る鶯」が主になつた趣がある。若しこの鶯を今少し強調して、

かゝれる枝に驚なくも

などいつた程なら全く鶯の歌になりきつてしまふものだ。とにかく、着想逸興を以て優れ表現巧緻を以て優れた歌である。新撰萬葉集でこの歌の對として、

噓見深春帯雪枝。黄鶯出谷始啼時。初花初鳥皆堪。自此春情可得知。

の七絶があがつてをる。起句「深春」は「浅春」の誤であらうが、それにしてもこの詩はこの歌と大分意味が違つて

居る「花の魁ともいふべき梅に春告鳥と名に負ふ鶯が來て鳴いてをる。あゝ楽しい春は、これを先驅として次々訪づれて來ることであらう」といふ轉結の句は全く別である。

題しらす

よみびとしらす

七 心ざしふかくそめてしをりければさえあへぬ雪の花と見ゆらむ

ある人のいはく、さきのおほきおほいまうちぎみの歌也。

詞書 元、「不知題、よみびとしらす」

二句 元、「深くしそめて」

左註 元、「或人のいはく、この歌、前のおほいまちぎみのなり」

三句 遠鏡 「をりければ」

結句 清「はなとみゆるか」奥 顯、「見ゆるか」

❶ 心ざし。「志」花を見たいとあこがれる心。かり「折り」としたものは「辭案抄・密勘抄「居り」としたのは、餘材抄で、今居むとしたら餘り感心しないが、物思ひなればとも、うらぶれなればともいふから、深く染めて居つたからととる」と様にいつてある。鄙言の譯も同様であり、金子氏も之を採つて居られる。今も此方に随つておく。きえあへぬ。消えようとして消えない。「あへぬ」といふのはいつも云々しようとして、さりとして云々するといふ譯でもないといふ、機微なたゆたひとさゆらぎとを表して居る。「渡りもあへず」「流れもあへず」「散りもあへず」など皆さうである。

❷ 一時も早く花を見たいと待ちこがれて居るものだから、また消えやらで梢にたゆとうて居る雪までも花かと思えるのであらう。

その花は梅であらう。その梅は白梅であらう。さてこそ切に下待つ花待人にはこの熱心な豫覺と残の雪とが、融合して花の幻想美を醸成したものであらう。スタートに立つランナーが會圖の砲の鳴らぬ前に、會圖の砲と聴きちがへて、飛び出すやうな焦躁を花にそゞげばこの歌が産れようとは思ふが、表現稍力を缺いて内容と對照すると、冷熱そぐはない憾がある。類咏には後撰一春上の二に左の躬恒の咏がある。

春たつ日よめる

春たつと聞きつるからに春日山消致へぬ雪の花と見ゆ覽

又壬三集中に「古今の一句をこめて秋の歌よみ侍りしに」

心ざし深く染めてし龍田姫おるや錦の山のみち葉

の初二句も此をふまへてある。左註「前太政大臣」とは前官が太政大臣といふのでなくこの頃、良房と基經が相前後して太政大臣になつたので、良房を前太政大臣（忠仁公と謚し）基經を後太政大臣（昭宣公と謚し）といったものである。「まうちぎみ」は「前つ君」即ち天皇の御前近く侍る朝臣といふ意味である。その他この歌詞につき色々相違のあることは「考異」にあげた通だが、さして修辭的效果に異同のないものと思ふ。（今後もさうしたものは唯一通りあげるだけであつた）

二條の後のとう宮のみやす(一)む所。(二)きこえける時正月三日おまへにゆめておほせごとあるあひだに日はてりながら、雪のかしらに(三)ふりかゝりけるを、よませ給ける

文屋康秀

八 春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

詞書 (一) 清「みやす」ところ

(二) 元「まうしける」

(三) 筋「ふりかゝりける」

三句 清 「花なれど」

二條の後。清和後陽成母高子のこと四で述べた。とう宮。東宮即ち皇太子のこと、もとは東宮御所のこと、それが皇居の東にあつたから東宮といひ轉じて皇太子の敬稱ともなつた。處が支那では四季に方角や五行や色や徳を配して、

- 春 東 木 青 元
- 夏 南 火 赤 享
- 秋 西 金 白 利
- 冬 北 水 玄 貞

などとするから東宮を又春宮とし春の宮などいひ、秋の宮即ち皇后宮と並べ稱し奉つて居る。春宮は専ら御座所にいひ東宮は官職についたが、彼此混用した例もある。三代實錄などはこれと正反對に、春宮傳、東宮坊と様に傳つてある。この東宮とは、二條後の御子貞明親王即ち後の陽成天皇を申す。みやすむ所の原義は御息所、即ち天皇が御くつろぎになる便殿のことだが、轉じて女御・更衣及び君寵を受けた女官などの便殿に奉仕する人々をいふ稱呼となり、後には東宮や親王の御妃を申すことになつた。さてこの東宮の御息所とは後世所謂「東宮妃」の意味ではなく東宮をお産み申した母御息所といふ義で、それは貞觀十一年二月一日この親王立坊(三代實錄十六)以後、他の御息所と區別してこの様に申上げたものであらう。陽成天皇御即位は貞觀十八年十一月廿九日であるから、二條后を「東宮御息所」と申したのは

貞觀十一年(一五二九)二月一日から

貞觀十八年(一五三六)十一月廿八日まで

のことである。よませ給ひける。の「せは使役助動詞歌をよめと仰せられたの意。私に歌をおよませなされたのといふも同じ。春の日のひかり。文字通りの春光か春の宮の御惠澤に暗喩したもの。以下凡て同様の暗喩をかかせて、あたる。日に當る。御惠みに浴する。かしの雪となる。實物の雪と、白髪と雪とをからませ、わびしき。と一筋に受けたもの。これは寂しく難儀な感で、雪がふるのもわびしいし年をとるのもわびしいといふのである。

二條の後をまだ東宮の御息所と申し上げて居た頃の或年の正月三日に、御前に私を召されて御用を仰せつけられたが、その時、日は照りながら雪が頭にふりかゝつたのを、この光景で一首詠めよと仰せられたので、次の様に詠進した。

表・私は今この通春の日に照らされて暖かではありますが、一方空から折ならぬ雪がふつて頭一面眞白の雪になつてしまひますのは何とも困つたことでございます。裏・私は今、東宮の親王の御惠澤に浴しまして、その點は無上の恐悅に存じてゐるのでありますが、何分にも老齡餘生幾ばくもなくして、末永く御奉公申上げられない身だと思ふと、わびしくてなりません。

「ですから私を不感と思召すなら今の内何分の御引立を願ひたいもので」といつた餘情で、ころんでもたゞは起きぬ老猶な併し機用な歌である。唯この餘情が餘りにも利己的であり、功利的であるから、貫之に「そのさまいやし」と評せられたのも無理はない。こんな時には自分のことなどは取りのけて、折にふさはしく、面白をかくしてめでたい即興を以てお答へしてこそ貴人の心持は御満足のことと思ふが、こんなみやびた歌の中にまで、申文に似た運動を歌ひ込むとなつては興さまされることであらう。この節の俄大盡の腰巾着になつた期間の心理とも通つて居て面白くない。だが、併し當時はこの詠をば却て興多いことにされたものでないかとも想はれる。それはこの親王御即位間もなく、元慶元年に作者は山城大掾に榮進して居るのから觀ても察せられる。權勢欲が變じて御機嫌買ひとなつたものそれが當時の貴族氣質であつたらうか。

さうした着想を抜きにして單に技巧の上からいふなら、即席にかうまで自然の聯繫で表裏二様をからませた手なみけ流石に文琳の巧緻を忍ばせるに充分であらう。

萬葉卷十七には天平十八年正月に雪が降つて元正上皇が群臣に宴を賜はり、歌をお召しになつたので左大臣橋諸兄以下二十三人の者がめい／＼詠進したといふ詞書して、その中五首を載せて居る。

三九二二 左大臣橋 福應詔歌一首

降る雪のしるかみまでに大君につかへまつればたふともあるか

流石は臺閣の重臣だけあつてその氣品は堂々たるものがあると評せられて居るが、大臣でなくても當時紀清人の詠んだものに

三九二三 天の下すでおほひて降る雪の光を見れば貴くもあるか

といふがあつて、露微塵、すがる處、求むる處を含んでゐない。これ等を思ふところの康秀もいつそ

春の日の光にあたる我なれば頭の雪となるは物かは

とでもいつてほしい處だ。事實これに似た詠進が後拾遺の一一一六にもあるではないか。

後拾遺十九雜五

上東門院は家民部卿の三條の家に渡らせ給ひける頃、俄に御幸ありて近き人々のいへめされければ、よかるべき所なきよし

そうせさせ侍りけり。其御返事に歌をよみて奉らせよと仰せられければ、雪ふる日よみてまゐらせける

伊勢大輔

年つもる頭の雪はおほ空の光りにあたる今日ぞうれしき

雪のふりけるをよめる

雪のふりけるをよめる

九 霞たちこのめも春の雪ふれば花なき里も花ぞちりける

詞書 元、「雪のふりける日」

このめ。木の芽のこと。顯註に「但人ノ食スル物ニキノメトイフハアケビトイフモノノ葉ナイフ也」とあるが、今關西地方では山椒の新芽を「木の芽」と謂つて食用にする。尤この解には交渉のないことだ。こゝは唯春先出る凡ての木の嫩芽をさしていつたもの。も。同類並列。はる。木の芽の延びひろがることを木の芽が張るといふそれと季節の春と秀句にしたもの。「木の芽の張るところの春の」といふ心（秀句の解き方はいつもこの形式になる）里は言葉通り村里の意味に用ひるが又時には我家を中心とする附近をホンヤリと指すこともある。こゝもさうした我家中心の里であらう。金子氏は作者の實際見たのは我家の庭前の木立であらうけれども「花なき庭も」では上の句の「霞たち云々」の大規模を承けるに狭小に失するところから、わざと擴大して庭を「里」と變へたものだといはれたのはよく考へられたものだが、又見やうによつては里といふ語は當時一般にさうした使ひ方をしたものだとも想はれる。本集二四八僧正遍昭の例などもさうである。下の句の頭韻をなしてゐる。花の後は雪の暗喩である。

春霞がたちわたり、木々の枝や梢も芽張る今日しも、その芽の張るといふなる春の雪がふつたので、季節柄とて花のまだ咲いてゐない我里にも雪の花が咲いて花ならぬ花の美又早春の一佳趣なるかな。

抄は初句から「木のめも」迄を「はる」の序詞と見たが、さう見てはこの歌は毫無しにならう、降雪の續紛たる光景が若し、つらとち木の葉もちつた冬であつたなら之を「花」と見立てるのは無理であるが、曆は巳に春立つて幾日となり、春霞四方を罩め、嫩芽新緑に息吹き……といふ矢先に降つた雪だから花と見立てるのに無理はなからうと、抑々第一句から豫防線を張つたも構想の而かく緊密でチツトの隙もないことと下の句の「花なき里も花ぞ」と花を表裏に折返して無有を歌つたその音調の輕快流麗とが一首の生命であらう。春雪花の如しといふならば、他に幾らも類詠があつて必ずしも斬新とは謂はれない。

春の始によめる

一〇 はるやとき花やちそきときゝわかむ鶯だにもなかずも有るかな

詞書 元、「春のはじめに」

六帖一 七月・新撰 同。

や。二つは倒置疑問助詞。春が来ることが疾きや。花咲くことが遅きや。春が早く來過ぎたのか、花がいつもより後れたのか。わかむ。聞いて判別しよう。だにも。こゝでさへも。なかずも有るかな。「も」と「かな」は味歎助詞啼きもしないなア。ふぢはらのことなほ。藤原言直、從五位下安繩の男昌泰三年因幡内豎頭。

（最早春になつてゐるのに今に花が咲かない。一體今年は）春の訪づれが早過ぎたのか、それとも春は當り前にやつてきたが、花の破蕾が後れたのだらうか、それを判別して確かめようと思ふ證據鳥の鶯が啼きもしないなア、（いやどうもぢれつたいことだわい。）

初二句、花故にいらたつて居る作者の「どうたらうかうたらう」といふ心の調子をさながらに疊句として「春やとき花やちそき」としたこのいひ方がめでられて居る。この強い疊句を承けるのに若し「鶯だにもうたはざるかな」と七七調を以てすると頭重尾輕となつて音調のおちつきを失ふところから五句を字餘りにして安定させた用意も宜しい。雅かな不安と焦躁を鶯といふ美的アンパイヤに捌かさうとしたところが、そのアンパイヤからしてアヤフヤでしかとした消息がないといつた趣向も面白い。稚想即詩想といつて、こんな歌はおぼかな着想に詩味がある。理窟で推すなら立春はチャント曆に書いてあつて、正にその通り訪づれて來たものだから何も早い遅いかなと疑ふ餘地のないものだ。

ふぢはらのことなほ

花は植物學的に觀て開化の内部的條件が具備して外部的好事情さへあればいつでも開くので、今更遅いといはれても急いで咲くわけにもいかず、又早過ぎるといはれても「ア左様か」などと、もとへつぼむ事宛らカンニの菓物のやうな譯のものでもない。ナニ鶯？ 鶯にきいて見た處が、ホホーほうけとるといふだけで、何の埒のあくことではない……などといへば、それまでのものだが、その雅想が詩趣の主内容を爲してゐる。餘材抄に奥儀抄や顯註や定家の評をあげて居るが、その要旨も大體この旨趣と一致して居る。

春の始のうた

みぶのたゞみね

一 春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞおもふ

六帖一 む月・忠岑集九品中上 同

餘材抄に初句六帖「むつき來ぬ」とあるが今の刊本六帖にはこれと同形に出て居る。

人は「は」は區別の助辭、暗に「我は」に對照したもの。この「人は」一人ではなく「皆人は」「人々は」ととる。なかぬかぎり^{なかにぬかぎり}は^は啼かない以上は「かぎり」は限度で「なく」の境界としてそれまでは「イヤ春ではない」と頑張らうといふのである。あらじ^{あらじ}は^は面白い略句で「春にてはあらじ」といふその「春」は上の初句に兼ねさせたものである。「今は確かに鶯なりともいひ、あらじともいひ、口々罵るほどに云々」の「あらじ」などと同類である。ぞ^ぞ強意の指定助辭。

皆のものは春が來たといふけれども、自分はアノ鶯が啼かない以上は、イヤ春はまだ來て居ないと思ふよ。

鶯は萬葉以來春の歌の主なる歌材となつてゐる。支那には「縉蠻タル黃鳥」など詩經や大學に出てゐるが、それは、所謂朝鮮鶯で我邦の鶯に近い鳴禽であるといふまでである。獨にナハチガルといふは蛙のことだといふ英にナイテングールといふは夜鳴く鳥で、これも我邦の鶯とは大分趣が違ふといふ。にも拘らずナイテングール女史のことを鶯女

史など書くところから我邦の鶯は向ふにもあつてナイテングールといふのがそれだなどいふ人がある。イヤ外國に有る無しはさておいて、春のたよりを音響の側に於て逸早く齎すものは、我邦に於てはこの鶯を措いて外にないといつてもよろしからう。アノ嘯曉の音に谷わたりしてケツキヨクといふ音色は、全くこれ春姫の召す聖なる車の美しい轆りとひたひた。近頃都鄙を通じて、富豪豪禽の樂隱居が一羽に千金を投じて尙惜しまないのも故ある哉である。鶯の一名を「春告鳥」といつて春信をもたらす鳥といふ。そこでこの鶯を以て春そのものの中心生命と看做したこの歌も、強ち突飛な着想ではない。無論作者とても唇で立春位は知つても居ようし、雲雀・山雀・四十雀・五十雀が囀つても春が來たとは思ひもしようが、趣味的にピツタリと「あゝなる程春だ、いかにも春らしい」といふ心持を起す爲めにはアノ鶯が聞らかな音に啼かなくてはならないといふのがこの作意で、それを初らしく思ひつめた口調で「インニヤー誰が何といつても承知しない。肝腎要のアノ鶯をぬきにして、春も何もあつたもんかい」と強くいふところが面白い。尤もその強くいふ爲めには鶯そのものが春の景物として上乘なものだから詩趣をなしてゐるが、次の會根好忠の歌などは、どうも肯けない。

冬きぬと人はいへども朝ほりむすばぬほはあらじとぞ思ふ(曾丹集)

朝氷の冬に於ける猶鶯の春に於けるが如き感味がないからこれは拙い。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

源まさすみ

二 谷風にとくる氷のひまごとにうち出る浪や春のはつ花

作者 期詠上「正澄」

初句 元・期詠上・筋切・相清「山風に」

春 上 一一・一二

寛平歌合 一右・金 同。

新萬下 谷風丹解留凍之毎隙丹打出留浪盡春之初花。

寛平御時きささの宮の歌合 寛平は宇多天皇の御即位第三年(一五四九)四月廿七日から醍醐天皇の御即位第二年(一五五八)五月十三日までの年號で、後の宮は七條后温子(基經女)のことで、當時恐らくはまだ後の宮でいらせられなかつたものを、後の尊稱を溯らせた詞書であらうといふ。大日本史料第一編の二の四四七—四八六には「寛平御時后宮の歌合」の項をおいて、班子女王御主催百番歌合といふのをあげて居る。班子は宇多天皇の皇后でこの方ならば正しく後の宮であるが普通七條后温子の御主催としてある。後考を俟つ。こゝは二二から一五までがその時の歌である。との意である。何れにしてもこの歌合の月日は明らかでない。唯寛平五年であらうとの推測が多い。が歌合の歌は群書類従や、續國歌大觀に收められてある。源まさすみ。源當純右大臣正三位能有の五男で、寛平昌泰延喜の朝に仕へた従五位上少納言。谷風 毛詩に「習々谷風以陰以雨」といふ所の註として、東風之を谷風と謂ふ」とあり、爾雅にも「東風 謂之谷風」とあつて之は東風のこと即ち春風のことといふとの解と、これは矢張文字通りの谷風だとの解とある。思ふにこの一首凡て漢學仕立の着想だから毛詩の注文の意味は無論こめてあることと察せられるが、それでは「東風」に「春風」になしても可いではないか、否谷風よりは春風の方がすつとみやびやかな語であらうとの疑が起る。がこゝが作意の巧敏な處で一面春風をきかせながら下句「打出づる浪」は溪流の涉だと伏線したものであるまいか。に。原因を示す助辭谷風によりて、浪の「や」は軽い疑ひ……否疑ひから一轉して強調の指示となつた氣味行ひの語で「打出づる波や春の初花なるべき」といふ處だと思ふ。打出づる浪や春の初花ならむ」といふのが普通の解のやうだが、「ならむ」よりは確信の度が強いと思ふ。

谷間にそよぐ春風に解けた氷のどの隙からも、美しく泡立ち流れる浪は全く花といつてよい。而かも梅櫻桃李の何一つ咲かない前に逸早く咲く先登第一の花と謂ふべきであらう。

浪を花と見立てたのは當時にあつては面白い暗喩である。浪の花が咲いたといふ處から、作者は支那の花曆とも謂ふべき二十四番花信風(一番梅・二番山茶・三番水仙・四番瑞香など……)を聯想し、一番の梅がまた破蕾の兆を見せない中

に早くも咲いたこの浪の花は、つまり番外一番の花と謂つてよろしいと打興したものであらう。實にや一陽來復して東風徐ろに暖を煽る處、堅氷次第に溶けて、谿流俄に水かさを増し、秋に潺湲たるもの時に滔々澎湃の奇觀を呈する光景は伸び行く物皆の生命と共に活氣の横溢を覚えしめるものがある。題材已に積極的光明感を盛つてゐる上に、句調又緊縮して宛然新古今時代の體言どめと相似た風格がある。後年壬生二位(家隆)が之を踏襲して、
谷川のうち出づる波も聲たてつうぐひす誘へ春の山風(新古今一七)
といつたものも亦名高い。

紀 とも の り

一三 花のかを風のためよりたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

詞書 友則集「寛平の御時の歌合。初春」

三句 古典本「隨伴へてぞ」

五句 六帖一 のこりの雪「知べにはする」

新萬上 花之香緒風之便丹交倍手曾鶯指南庭遣。

六帖一 春の風・六帖一 うぐひす・寛平歌合左一・新撰 同。

花 何の花ともいはぬ時は「櫻」とするのほ後世の様で、こゝは下の「鶯」によつて「梅」であることを暗に示したものである。風のためより 今の俗語では「誰いふとなしに云ひ傳へたこと」「風評」「うはさ」の意に使ふが、こゝは風を擬人して風をいふ幸便、風を使者としての意。たぐへ は伴へ、他動詞で伴はせの意(この語四段なのは自動詞、下二段なのは他動詞)つまり「連れさせ」といふことである。契沖は新撰萬葉集の「交倍手曾」を「まじへてぞ」と訓んで、この方がよろしい「たぐふ」は「副」と萬葉に宛てて居る云々と謂つた。題註にも「加へる」ことだと解いてある。が、刊本の新撰萬葉集には右の字を書いて「たぐへてぞ」と

假名が振つてある。或はもとは「まじへてぞ」といつたものを後様に直して「たぐへてぞ」と言ひ做したものが、とにかく、こゝは「たぐへてぞ」を右の様に解してよく通ずる處だ。鶯誘ふ。鶯に来て啼けと促し立てる程の氣味合。しるべ。お迎ひ、道案内、には「に」は目的趣旨を受けた助辭「は」は區別を示した助辭

梅の香を吹く春風にことづつて鶯に早く來啼くやうと誘ふ使にやらうよ。(梅が香を他へ離すは惜しいがあの外ならぬ鶯への使だから)

「には」が含む餘情は作者が鶯に憧がれてゐることと、梅と鶯が好配合であることを含む「滅多とよそへやる梅が香ではないがアノ私の待ちこがれて居る鶯を引張り出す爲めには割愛しよう」といふのが前者で、「使に立つものは少くとも自分自ら進んで、目的地へ行つて見ようといふ興味のあるものでなくてはならぬし、人を誘導させるには少くとも相手に親近なものでなくては効果が無い。然るに梅と鶯は丁度好い仲だから、外の誘ひには乗らぬ鶯でも梅から「いらつしやい」といへば「ホホー」とやつて來ようといふのが後者である。而かも一首凡てを擬人法で構想して客待のあるじが、迎への使者をやるのに生憎宅には子供より外手透がない……と折柄向ひの八兵衛さんが、丁度その直ぐ隣まで行くとのことこれ幸とその子を托して前招興にやるといふ格も面白い。梅に鶯、柳に燕、牡丹に唐獅子、竹に虎と様の配合は後世追々に出來たものと想ふが「梅に鶯」はこの頃已に歌人の咏唱に上つて居たのである。

大江千里

一四 鶯の谷より出る聲なくば春くることをたれかしらまし

結句 元・「いかで知らまし」(景樹もこれを可とす)寛平歌合右二・六帖六 うぐひす「誰か告げまし」

四句、五句 新萬下、鶯之自谷出留音無者春來則誰告申

寛平歌合 右二・五句、誰かつけまし。

六帖一 残りの雲 同。

大江千里。音人の子、美濃守・六位・兵部大丞と閥歴し、漢學の素養を以て能く歌を吟んだ、大江千里集一卷並に句題和歌(群一七九・七・一〇一〇——一〇一六)があり中古世六歌仙の一人谷より出る。鶯に對する趣味の型を支那から傳へられた當時の歌人は、彼の毛詩に「伐木丁々、鳥鳴嚶々。出自幽谷、遷于喬木」といつた風に、鶯は冬の間、谷間に巢籠つて春になつて里へ出て啼くものと看做して着想することが多い。こゝもその一例である。三句は聲なくば、といふもあるが「聲なくば」と濁つた方を採りたい。聲がないならばといふ口語に當る。「は」を澄めば上を一つの名詞句と看で「聲のないといふことは」といふ意になる。誰かの「か」は反語、知らまし。のましは「む」と同じで「誰か知らむ誰も知るまし」といふのが五句。

鶯が谷間を出て啼く聲がなかつたならば、春が來たといふことを誰が知らうぞ、誰あつて知るものはあるまい。鶯こそは實に唯一の春の報道者である。

このいひ方は已に鶯の聲を聴き得た人の悦びが餘情になつて居る。「あゝよかつた。若しも……だつたら、かうした好結果を得ることはむつかしかつたらうに……」といふことは吾人の日常よくある。満足の感の底からこみあげてくる假定的追懐である。一〇や一一の歌と對照して見ると、彼等は鶯の未得者のわびしさと堅一徹で、此は已得者の自足と讚美である。思ふに吾人をして、しみじみ春だとの感を起さしめる、内部的春信者とも謂ふべきもの、之を觸覺にしてはそよふく風、之を色彩にしては紅紫絢爛の美や満山滿野の霞や嫩葉、之を行事にしては、花見、摘草、郊外あそび、若しそれ之を聽覺にしては何であらう。曰はく百鳥千鳥就中彼の婉轉球をまらばすが如き鶯であることに於て誰しも異議はなからう。

新たまの年たちかへるあしたより待たるものは鶯の聲

と素性がいつたが、これは強ち雅人の雅懐ばかりではない。野らにおりたつ田づくりまでも抱く感じである。

尚又「知らまし」といふことを文字通りにとると、作者が山里人になりすまして、山中曆日無く、寒過ぐれども時を知らずにウカ／＼としてゐる中、幽谷の阿嬌艶やかにも「春ですよ」と啼いたので「ホホウ鶯が啼いてゐるな。さてはもうそんな時候になつたのか」と驚いたとの感じを表したものと解せられる。が「知らまし」は「しみんく春らしい心持を覚える」こととして始めに謂つたやうに味はへる方、作意に適ふものではあるまいか。即ち春を知らぬといつても曆の上や、風物の上では已に春だと百も承知してゐながら、それでも肝腎の鶯の啼かぬ間は正客の來ない宴席と同じく、どうも始まらないといつた感じを歌つたものと想ふ。併しこれから脱化した、左の一首は明らかに、山中無曆日且つ山中春來ること遅しの感を歌つたものである。

鶯の聲なかりせば雪きえぬ山里いかで春をしまし 拾遺一〇、天曆十年三月廿九日内裏の歌合に、中納言朝忠(一本中務) 尙この歌は近年筆歌新譜「春の曲」に入つてから頗に民衆的となつた。

在原棟梁

一五 はるたてど花も匂はぬ山里は物うかるねに鶯ぞなく

初句 寛平歌合「春なれど」

五句 新萬上「春立砥(イ雖春立)花袋不匂山里者、類聲丹鶯うぐすやなぐ哉鳴」
古典本「鶯のなく」真淵も之を採る

在原棟梁(むねやな) 業平の一男貞親より朝仕して昌泰元年に卒、從五位上筑前守。春立てど 立春の語によつて、春の來ることないふ、夏立つ、秋立つなど皆同じ。春になつたけれど、花も匂はぬ、花も咲かぬ。匂ふは鶯のことだから、こゝは花は咲いたが

唯匂がないだけといふ意だと解く(富樫廣隆など)はよくない。尤花の中にはその色のみ優れて香の乏しいダーリヤのやうなものもあるが、こゝではさうまで別けていつたものではない。殊に鶯を對照してゐるところから推して暗に梅花などを旨とほのめかした花である。さてこの「匂はぬ」は山里春遅くして未だ咲き匂ふに至らずと解しては面白くない。元來花の木に乏しい山里で、いくら春がたけても花の咲く望みのないことをいつたものと解したい。山里 山邊近き村里、山村僻地、もつかる。物憂くあるの約形容動詞、物憂しの「物」は廣く何にもつける漠たる直覺感を示す接頭語的な語。物さびし、物がなし等、ものうしには備し、懶しなど宛てて「ものぐさい」「うるさい」「しんきな」などの意につかつて一體に倦怠の氣分や、臆空の感じにあてはまるが、こゝでは「つまらない」「張合がない」といつた心地である。鶯ぞなく「ぞ」はしみんくと聽き入つた強意の指定助辭で、こゝを「や」としては疑問助辭となつて「吾は同とより懶いが汝も同じ思ひにないか」となり、感歎助辭としては調子が浮いてそぐはない。寧ろ鶯なくもの方が宜しい。又「の」としては一通りの指定で意調共に淺くなる。でこゝは流布本の「ぞ」がよろしいが、この「ぞ」は「元來我が泣く所をばアノ鶯が啼いてゐるわ」との餘情までは無い。唯鶯の啼く音に耳を傾けたといふ作意である。

春が來ても、花も咲き匂はぬこの山里は鶯もさもつまらなさうに啼いてゐるなあ。

自己の主觀を客觀に投影する所に詩趣は成り立つ。山里のとりへは何であらう。春の花秋の紅葉これをおいては人もすさめぬ淋しい朝夕である。然るにその花すらも咲かないとなつては山里人は全く埋らない、丁度吾々が「夏の涼しい」のをとりへに弘前にやつて來ながら、今年のやうな熱いめに遇つてこぼすのと相似て居る。人は張合に生きるもので、事々物々他を對照的に考へる。「あゝこの節都ならば南枝北枝の紅梅白梅が、已に十分の春を含んで笑みさかえでも居らうにと思ふと、明けても暮れても木の根っこしか見られない今の住居の颯風景さが、心からつまらないと思はれる。折から鶯のささなき春淺くして調もまた整つてゐないものを、我思ひなしで相手の花無しではつまらないとやうに聽きとり鶯を憫れむと共に自己を憫れんだものであらう。若し之に寓意ありとすれば作者一時失脚して、山里の生活

を餘儀なくし、折からの春愁をなひませに、前途の希望なきをかこつたものとなるが、作者の閱歷にはさまでの感慨をこめるやうの蹉跎はなかつたと想ふ。

題しらす

よみ人しらす

六のべちかくいへるしをれば驚のなくなるこゑは朝なくさく

詞書 元、「不知題」

二句 元、「家居をすれば」

清・頼・抄「家居しせば」

四句 元、「啼くなるこゑを」

野へ。野のほとり、郊野、近郊、家居しなれば、「家居」はすまひ、「し」は「やすめたる詞にて家住すれば」といふ（契沖）のは如何はしい、「し」が強意の助辭ならば之を抜きにして「家居なれば」といふのも一つの句であるべき筈だが、何となく耳に雅順でないし用例も見ない。「し」は矢張「爲」といふ動詞である。元永本「家居をすれば」から推してもその方が宜さうだ。尤も一本「家居しせば」といふのがあつて「爲る」の意は「せれば」の「せ」で表れてゐるのだから上の「し」は強意とせなければ意を爲さない様にもあるが、これは語格上奇妙な謂ひ方で、通常「すれば」とする所を古格で「せらせりせれ」とつゞけたものであるが、尙よく考へると「家居をすれば」の「な」が變態假名の「せ」と近い字形だから轉寫の誤かとも察せられる。鳴くなるの「なる」は詠歎助動詞の五活連體形、聲はの「は」は區別に強調の氣味をこめたもの、朝なく、毎朝々々で、實は日々澤山にの意、これをひるもゆふべにも驚はなけど、曉驚とて、朝にはめづらしくとくなければ、つとめてことに鳴くことを悦ぶよめるなり（顯昭）など解くのは餘りに語句に拘泥したものだ。朝なほもと朝魚・朝で朝の副食品から來た語だといふが、こゝは朝なくと覺んで一日にち毎

にちといつた口調を示したもので、事實は「朝な夕なき」といふも變りはなく、否更に一步を進めて「朝も晝も晩も幾らでも聴かれる」程の心である。

野邊ちかく居をかまへて居ると萬事不自由勝だが、都人の珍らしがる鶯の啼く聲だけは毎日々々心ゆくばかりきくことが出来る。これが野邊住まひの一得とでもいふものか。

鶯を除いて餘他の事凡て非なりとの餘情があると解くと作者は世にわびしれた失意の人となつてくるが愚考では、さる事情はなくて始めから野邊に住居してゐる作者が、たまく春先知人の來訪を受けるか、知人へ消息をやるか若しくはさる所なくして單なる述懐として軽い自足を言外に含めて歌つたものと思ふ。由來自然美と文化とは兩立し難いもので、自然美に恵まれる處は文化に遠く、文化に恵まれる土地は自然美の享樂がない。これが近頃汽車の窓から「福助足袋」の廣告を見て憤慨する人のある所以である。狂歌に、

時鳥自由自在にきく里は酒屋へ三里豆腐屋へ五里

とあるのは、箇中の消息を歌つたものである。そこでこの歌も、文化には恵まれないが自然の幸の有がたきにはかうして鶯のなく音を心ゆくまで聴き得ることよと悦んだもの、萬葉十の一八二九に、

あつき弓はる山ちかく家居らしつぎてきくらむうぐひすの聲

とあるは人の山居を欽羨したもの、同一八二〇に、

梅のはな咲けるなかべにいへ居ればともしくもあらぬ鶯のこゑ

とある方がこの歌には一段近い。これを併せて以下四首は凡て、題しらす、よみ人しらす、である。（以下この種の書き方について一々断らないから、題しらすのつゞきで次の詞書のあるまでは同様と心得られたい）

一七 春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

初句 勢語一「武藏野」は

春日野 大和國添上郡、奈良の興福寺の東の大鳥居から東大寺の南の邊までをいふ。今日では三條の大通から猿澤池の處へかかると、もう公園の設備があつて春日神社まで一帯奈良公園となつて居る。往時の春日野の傍は見る由もなからうが、それでも春先などに杖を引くと風物何となく天平の古を聯想せしめるものがある。春日野は「は」は他の處と區別したもの、「よそは」ともかく、この春日野ばかりは、今日のは「は」は他の日と區別したもので、外の日はともかく今日ばかりは、な「そは」否定の特別副詞で「なほ」「勿」と拒非を含み、「そは」と指定の強意を含んでその中間に連用形根帶句を挿んで、それを否定する。こゝでは焼いてはならぬ、焼いてはくれるな、さて草を焼くのは草焼き、土堤焼き、山焼きなどと稱してその年の新芽がよく出るやうに春先にすること、これを一個の定例年中行事として壯大に行ふかの山城如意ヶ嶽の大文字は日も趣旨も之とは趣を異にして居る。若草の「又」「弱草の」とも書いて妻の愛らしく美しい處から之を「妻」の枕詞にしたが、又「いや珍しき」「若く」「新手枕」「思ひつきにし」「あゆび」「こと」の葉つてよ「花のさかり」「ほのかに見てし」「日暮里」「菫崎」などの枕詞としておいた。この種の事は近刊福井久藏氏の「枕詞の研究と釋義」に委しいから就いて見られたい併しこゝは「若草の如き」といふ意で形容詞句としておいたもので、春日野といふ處から、早春といふ季節柄妻の形容として最もふさはしい。尙「若草の妻」を本當の若草の端と解いて「若草も今やつと芽を出しかけたばかりで、下にこもつてゐるし、自分も居ることだから」と様に解いた古註もあるがそれでは歌興が半減せられる。又妻は古へ男女互にその配偶を親しんで謂つた稱呼だから、これは妻が夫をさしていつたものだといふのもある。これは前掲伊勢物語（日本文學大系本による、以下勢語の記事は便宜上いつもこれから採る）十一段に、昔男がさる人の娘と駈落して武藏野まで逃げて行つて隠れて居つた處、男は盗人であつたから國司に捕へられ後から人がやつてきて、とゞ野原に火をかけたので女の方が「武藏野は云々」と咏んだとあるのなどにはよくかなふが、伊勢物語はむしろこの歌に小説的の趣向を結びつけたもので信憑すべきではないし、上に「若草の」とあるのに「夫」とつけては妙でない。こゝれり 籠・單・隱・幽居など宛てて中に入つて居ること、ひそかにかくれて居ることなど伊勢物語の方では「かくれて居る」と採つたものである。隠れるといふ程でないまでも忍びやかに、ひそやかに居る程の心持はある。

草焼をする野守男よ、外ならぬこの春日野は、いつはともあれ今日だけは焼いてくれなよ、なぜかといふに我最愛の若草なす妻も居れば我も居ることだから。

上句二個の「は」下句二個の「も」下句全體の反覆句凡てこの歌を優麗都雅に仕立て、野守に懇囑する情は倒置句の構想にもよくあらはれてゐる。歌境は奈良の町家住まひの青春男女——それは相思の戀仲と見てもよし、新婚日淺い新郎新婦といはれる程の夫妻と見てもよろしからう、春日和のどかな日に相携へて近郊散策の折柄野邊の一角に草焼の煙を見、此も面白しと軽く打興じての述懐で、思ひ切つて戀と風雅のエゴイストとしての自己を歌つた素材さも愛すべきである。類歌、神樂歌「しなが鳥」にあり。

尙「武藏野」は大和志料上九七に、

「若草山ノ西麓ヲ稱ス登大路ト野田トノ間即チ大佛ヘノ辻ノ良方ニ俗ニ木魅探ト稱スルアリ。是所謂武藏探ニシテ武藏守長岑安世ノ墓所ナリ。武藏野ノ稱ココニ起レリト。又一説ニハ否ラス武藏守小野美作吾ノ事跡ヨリ名ケタルモノナリト云フ、是非ナ知ラズ。

とそして、その續きにこの歌をあげ、

古今抄云此うたは業平朝臣二條の后をぬすみならの京へ具しけるときに后のよませられし歌なり

とある。が、伊勢物語の原文は前後から察して「武藏の國の野」のことであらう。尙この物語の引き様本によつてまぢまぢのやうだから左に原文をあげておく。

「昔、男ありけり 人の女をぬすみて 武藏野へ、率て行く程に、盗人なりければ、國守にからめられにけり。女をば最の中に

隠しおきて逃げにけり。道くる人「この野は盗人あなり」とて火つけむとすれば女わびて、
武蔵野は今日ほな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり
と詠むを聞きて、女をば取りて、ともに率ていにけり。

一八 かすが野のとぶひの野もり出て見よいまいくか有て若なつみてん

〔考〕 順序一九と前後してなる。

六帖一 む月・新撰 同。

〔注〕 とぶひ は烽火・飛火などかいて所謂狼煙のこと。狼煙は今の花火のやうなもの。打上げて非常を警戒したもの、この烽火臺が春日野におかれたのは續日本紀和銅五年正月壬辰で、

廢河内國高安烽一始置高見烽及大和國春日烽一以通平城一

とある。けれどもその迹はつきりしない。大和志料上九七に舊迹幽考を引いて「東大寺の前に北向荒神がある」といひ、又「あの社の近くだ」といひ、又「その附近に『野守の池』といふがあつてこれはその當時の野守がほつたものだといふ。そして、かうした警備の由來としては「八重櫻」を引いて、

人皇四十三代元明天皇御宇和銅年中に關の東より軍おこらんとせしかばその急なるを、他の國へしらしめんため、此野に初て飛火（脚子）ナリを立られ其火を守る人を置せらるこの人を野守とよぶ、それよりして一名を飛火野と號す。

といひ、別に舊志を引いて、

志烽火山在鹿野苑東山中有一民居名鉢伏和銅五年正月始置春日烽一以通平城一

ト之ニ據レハ春日烽ハ鹿野園ノ東烽火山ニ置カレシニテ所謂飛火野ハ高圓ノ原野ヲ斥スニ似タリ。

といふ。そして今日烽火山一名鉢伏山といふのは後の舊志の通である。けれどもこの歌の字面では春日野に烽火臺があつてその火の

番人を呼びかけたものと推せられる。野もり 野の番人をいふこと山守・關守・村守・子守と同様、たとひ野の番が職掌でなくとも、永年この野に住みつてゐる人をも野守といふ。とぶひののり とつゞくと飛火野野守ともとれるが烽火の番をして永くこの野に住み慣れてゐる人と採る。出でて見よ といふのは、春まだ浅く外面は寒くて野守が我住家の中そこは淺間てつひ外から覗けば言葉がかげられるばかりの處に居て炬燵に當るとか、爐を擁してゐるとか、又は爐のはたで薬細工なんかをして居る、それを促して出て見てくださいといふので今の婦女子の口吻を以て言はうなら「まあ、ちよいと、出てこらん、ちいやさん、ヨウぢれつたい」位な處。いま「もう」の口語に當る。今でも口語で「ま一つ召上れ」「今一枚書いてから」などいふ。對未來の少時間を示す。いくか「いくひ」とよまない。わかな 春先食用にする草の新芽の總稱。てん 未來完了時の助動詞だが、つむことが出來ようか位の意である。〔考〕 春日野のとぶひの野守のお爺さんえ、（お前さんは永らくこゝに住んで野の勝手はくはしからう。）もう、何日程たてば若菜つみが出来たらうか。（コレそのやうに内にはかりないで）一へん出てしかと見て下さい。

〔注〕 花がたみの空を片手に、奈良の町家の子女が數人野守の小屋の通りがかりに焦れつたさうに、呼びかけた場面を想像すればこの歌境は了解されよう。「若菜つみ」といふのが上代以來當期にかけて男女を通じての大なる享樂であつて、萬葉開卷雄略天皇の「こもよみこもち」の御製を始め、この行樂を中心にした歌詠は數しれずある。この今古風俗の相違を前提において、この種の歌を味へれば、よく作意が窺はれる。後年金槐集にこの歌の心をとつて、

屏風の繪に、若菜つむ所

春日野の飛火の野守今日とてや昔形見に若菜摘むらむ

一九 み山には松の雪だにさえなくに都は野べのわかなつみけり

〔考〕 位置 順一八の前にある。

春 上 一八・一九

四句 清・元・筋「宮古は野べに」(清は「に」の傍に「ノ」とある)

相「宮古はばるの」

○**み山** 深山とも宛て、「み」は山の接頭語に過ぎないけれども、深山と宛てるにつれて、外山や端山に對して奥山の意につかふ。神樂歌の

み山には霞ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり

の如きはその好例である。には、といふのは他處と區別する語氣で、こゝでは山の句部はと對照的においたもの。松の雪だに、松の雪でさへも、春の雪解はまづ梢から始まつて次に地上の日なた最後に地上の日蔭となると見立てて、こゝは地上の雪は勿論松の雪さへとの意、その上松は雲に配合して景氣惚れたものだから同じ常緑木でも、杉の雪だに、柏の雪だにとはしないで特に、松をあげたもの。だに、輕きをあげて重きを推す助辭で、こゝでは松の雪(輕)から廣く深山路一帶の雪(重)を推すやうに按配してある。消えなくの「なく」は「ぬ」の延音で、*niku* (八十) *niko* となる。消えなくにの「に」は「のにそれに」といふ程の意で前件後件不順當の接續的助辭である。こゝでは松の雪さへ消えない山里(前件)と松の雪は勿論、地上の雪もとけて、とける處が若艸が萌えて、それが寸延びて若菜摘をしてある(後件)といふ二つのひびきを對照する喫子となつて居る。都は宮處で、宮は御家又は御屋で、即ち皇居のあるところ。けり、は詠歎の助動詞。

○**春遅き深山**には地上はさておき、松の梢の雪すらも、消えてゐないのに、都は早くも野邊に若菜が伸びて、人々は若菜つみに出てゐるとは(ナーンと大した違ひだなあ)

○この歌で問題になつて居るのは、作者の視野の中心點である。之を

- 一、都とするものは舊法や眞淵の打聽や宣長の遠鏡
- 二、山里とするものは景樹の正義
- 三、それ以外とするものは、金子氏の屏風繪説

都と山里の對照が字面になつてゐるのだからどれにしても一應は聞える。殊に金子氏が、之を都山里の何れでもなく、丁度葉平の「から紅に水くゝるとは」の歌のやうに屏風の繪に一方は山里一方は若菜摘を畫いたものがあつて、それをよんだものだと思はれたのは實によく機微を把へられたものだ。

けれども撰者は一體何とつたものか? といふに、一八から二二までを若菜の歌として排列したものと見えるから、これは右の第一種と同様に視點をおいて解したものに相違ない。

が、自分一個として云ふなら屏風繪云々の確證があがらない以上は、飽くまで、この歌詞を味讀して、どうも景樹の山里觀が妥當だと思ふ。一首を讀下した後に残るものは都人士の自足よりは、山里人のぢれつたきの方が強い。即ちこの歌の口つきは山里の方により多く關心性が認められる。山里から都へを遠望した處か、山里からたま／＼都に出て近郊の様子を實見しての感じか、都の知るべからの消息を得ての感じか、それは不明だが、少くともこれは、若菜摘の人々の行樂よりは山里人の春色遅きをわびた趣の方が強い。これを今日に直せば、毎年二三月頃吾々が九州や近畿や東京の知人・友人から受取る春信を見ての感じとよく似て居る。大森の梅はもう大分咲きかゝつてゐます。昨今は岡本の梅は見頃です。彼岸櫻に稍春めいて來ました。こんな手紙を受取る吾々は、この弘前に於てストローの薪が不足してまだ大分買ひ足しをせなければならぬなど騒いでゐるのだから、丁度こゝの山里人と同様のぢれつたきを痛感する。

○**梓弓おして春雨けふふりぬあすさへふらばわかなくつみてむ**

○六帖一 雨新撰 同

○梓 異説がある。が、今、松山亮藏氏の「國文學に現はれたる植物考」二五五——二五七の大意をあげておく。

一、「さきさげ」だといふ説 伊勢貞丈の弓材考・具原益軒の大和本草。

二、「アカメカシハ」といふ説 小野蘭山の本草綱目啓蒙、昨田翠山の古名録。
 三、「みづめ」といふ説 理學博士白井光太郎先生の論文（植物學雜誌第二百五十八號掲載）

右の中第三説が正しい。これは樺木科に屬し、學名は、*Betula ulmifolia* Sieber. 又の名を「よくそみればり」といひ、信濃・甲斐を始め方々の山地に産する落葉喬木で、幹の高さ二三丈に達し、材は少し惡臭があるが、質はればり強く弓材とするに適して居る。葉は長い心臟形で、葉縁には細かい鋸齒を具へ、互生で裏の葉脈の上に毛茸を有してゐる。この説公表の後、伊勢の神官某から同博士に寄贈せられた梓の古弓について詳細に顯微鏡的組織を調査せられたが、矢張り「みづめ」であつたといふ。さてこゝでは梓弓は弓杖を押して絃を張るものだから「梓弓押して」は「張る」と同音の「春」を引き出す爲めの序詞においたものである。「押して」を強くとか、押しなべてとか、押し通してとか解いたものは不賛成である。「押して」が他でそんな意味に用ひられた例がないと思ふ。「春雨」といふのに「梓弓押して」といふは我國特有の序詞であるが、一頃流行した樂劇の叙事詩にはその「梓弓」をいふのにまだ序詞をおいて、

御代を守りの梓弓押して春雨降る毎に

としたものもあつた。春雨は勿論春の雨のことだが聯想の故か「はるさめ」といふその音調が如何にも和暢の氣を含んで居る。「雨」を「さめ」といふこと、むらさめ・ひさめ・こさめなど他にもある。あすさへ、のさへは副の轉で添加の助辭だが、こゝの語調は殆ど、後世俗語の「さへ」「さや」と同じく、完成の希望に燃えて「これさへあれば大望成就」「もう一つさへしたら今日は遊ばれる」などいふ「さへ」と近い。

今日珍しくも春雨が降つたがこの調子で明日もう一日さへ降つてくれたならば、若菜も大分のびてアノ楽しい若菜摘みが出来よう。

「さへ」をどこまでも「副」と解して「今日は春雨が降りつゞいた、この調子で明日までも降るやうだつたら、ママヨ雨にぬれてもかまはぬ若菜つみをしよう」としたのは可けないと思ふ。尤も「降りつゞいた」は下の句から推してさう

つけるのも無理ではないか。「明日までも云々」以下はよくない。

若菜摘みにあこがれた人の春雨を見ての感じと想ふ。將基好きが一人で敵味方になつてきて見たり、釣狂が疊の上で釣竿を垂れて見たり、する程の熱中さはないまでも、庭球ファンが、ラケットをふり／＼雨後のコートのかわきを待つてゐるやうな、又は茸狩を當てこんだ都人士が初秋の暖雨に「サアこの雨で大分茸が出るぞ」と悦に入る位のはやりかは見られる。細く緩く暖かく銀絲のやうに雨煙る初春の黄昏、葺・遣戸を細目にあけて、心は早も若菜摘の豫感にはしやぎ切つた情趣眞に明るい春風詩である。

仁和のみかどみこにおましくける時に人にわかな給ひける御歌

君がため春の野に出て若なつむ我衣手に雪はふりつゝ

詞書 元、仁和帝のみこに抄同おはしましける時人に若菜たまひける歌。

清「仁和のみかとの……おはしまし……」

相 仁和のみかどの、まだみこにおましくける時に、人にわかなたまひけるおほみうた。

新撰・百ノ一五・六帖一 若菜 同。

仁和のみかど 光孝天皇のこと、この天皇の時の年號が仁和であるところから申した名稱（序に仁和寺といふのもこの御代、の帝の御發願で建つたものだといふ）仁明天皇第二の皇子で、時康親王と申し、御母は藤原澤子（贈太政大臣總繼御女）大鏡による、この親王は到底皇位などに即させられる御望みがなかつたのを、昭宣公基經かれてその御仁德をお慕ひ申し、別けて大饗の時陪膳の失敗でその日の正客の膳に雉子の足がついてなかつたので、あわててこの親王の前のをとつて持つて行つてすゑたその刹那フツと御灯を吹き消されたさぐくの御仕打を深く感じて「あはれ君かな」と思ひ入つたこともあり旁々源融等の意見を排してこの親王

を御位にお即きになるやうに祭議をまとめた。それより後は君臣水魚の御仲らひめでたく天皇の御裔も昭宣公の御子孫も双方共に榮えさせられたといふ。事實この親王は嘉祥元年正月常陸太守に任せられ累進して一品式部卿にまで達せられ、内外の信望も厚かつたが、とりわけ基經輔翼の功も多い。さてこの帝崩御の御臨終に王侍從(即ち後の宇多帝)と基經との手を左右の御手にとらせられ、具に後事を託せられたので、基經は王侍從の君を諸王の列から昇せて親王とし、親王より昇せて立坊、御即位と全速力で御立て申すやう計らつたものだといふ。さてこの光孝天皇は御即位の時已に五十五歳であつたといふから「みこにおましましたける」時期は非常に長かつたものである。みこにおましましたける時に、この天皇は天長七年(一四九〇)御降誕で親王宣下のあつたのは承和の初(一四九四)御五歳の時だから五歳から五十五歳(元慶八年二月五日御即位)の二月四日までの間のこと、但し、人に若菜を贈つてこゝな立派な御味があるのだから、これは相當御年を召してからのことであらう。給ひける。給ひは今普通に「賜ひ」と書いて天皇から御下賜になる場合、使ふのが普通で親王に「給ふ」とあるのは後の天皇の御身分を測らせたものであらうといふ。人に若菜を贈らせ給ひける」などありたい處だ。君がため。君は對稱代名詞「御身」「あなた」などの意。「君」を天皇の意に歌ふことは、次の後撰集頃以後のことだといふが、少くともこの集にある「君」は對稱代名詞である。賀の始めの「我が君は千代に八千代に」といふのも「我が親愛なる御身は」である。併し「君」の用例としては、

- 一、天皇 萬葉十八「あまつ日つきと知らしくる岐美のみよ〜」
- 二、自分の奉公して居る主人 竹取物語「君の使といはんものは、命を棄てても、おのが君の仰せ事をばかなへんところと思ふべけれ」
- 三、人の敬稱 對稱 こゝのものや、わがせの君、他稱 業平の君。

尙かばれ(姓)にも「きみ」といふのがあつて、これは始め「君」と書いたのを後に「公」と改められた。愚考「きみ」は「きむち」の約で「きむち」は「きむぢ」「きんじ」となつて早く對手の卑稱に用ひられて「きんち」が姓は何ぞと仰せられしかば「夏山」となるといふと申ししをやがて「繁樹」となむつけさせ給へりし(大鏡序)などいつた、もと「きむち」の「むち」は大名貴命の「貴」と同身のまばりに「位」ところである。

このやうにして摘んで來たものだから私の志をめでて召し上られよ。

書物を忘れたが、これは乳母なる人に贈られたものとあつたと記憶してをる。この歌の餘情に「雪の爲めに格別難儀をしました。でも御身の爲めだと思つて態々摘んで來たものです」の心がこもつて居るのは宜しいが、これは親しみだての言ひ振りで、向きになつて、恩に着せたものでなく「これでも可なり冷たいめをして摘んで來たものです」と戲談半分にはれたものとするべきであらう。どうせ春の雪のことだから大したものでもなく、軽く快く降つたもので心から冷たいとか苦しいとか流懷せられる程の大雪とは受取れない。若し對稱の「君が爲め」と、詞書とが無かつたならば、此は寧ろ「早春の雪」を詠んだ歌として面白い。京は嵯峨野や紫野、さては船岡、芹川のあたりとこゝろ若菜が萌え出でる矢先、當時の風俗としてさる上つ人までが花がたみやみふくし提げて悠々と出かけられると、淡雪がチラリホラリと降つて來る。青い若菜、白い雪、紫か黒か色美しい上衣指貫如何にも雅かな一幅の土佐畫で畫中の人亦自らこの景氣に興を覺えて、「斯る矢先に斯る雪」と詠んだといふ立意でも面白い歌が得られると想ふ。が、併しこゝは詞書と初句とによつて飽くまで始めにいつた通りの歌境と解すべきである。

枕草子にも「七日は雪間の若菜の青やかなるを云々」とあつて、上下おしなべて郊外に摘みに出て摘んだものを自らも食ひ、人にも贈ることがこの頃一般の風俗であつた。ナニ若菜といつた處が、現代風のカラーで測れば大したもの

ではなからうが、そこに古代日本人々の質朴で且つ清楚な趣味が忍ばれてゆかしい。又さうした贈物にはきつと風流の意匠をこめた歌や文をそへてやつたもので、此も亦日本趣味の一つとして保存したいものだ。さて類咏としては萬葉十春雜歌一八三九に、

君が爲め山田の澤にゑぐつむと雪解の水に裳の裾われぬ

といふのがあるが、これは「雪とちがつて雪解の水に濡れたといふのだからそれこそ「ひどく苦勞をした」といふ意がこもつて結局こちの心づくしを買つてくれるやうに「これ程私は御身のためなら骨を惜しまずつとめてゐるのです」となつて、形式は似て居るが想は大ちがひだ。

又大和物語（校註日本文學大系本百六十九段）七四三に例の遍昭在俗當時の相手の女が、

君がため衣の裾を濡らしつゝ春の野に出でて摘める若菜ぞ

とある、これは男に饗應するに物げ乏しくて「せめてこれなり」といつて出して、箸に折つた梅の花びらに書き添へたもので「何も召上るものありませんが、私の心づくしの程を」と挨拶したもので稍これに近いが、雪が衣手にかゝると、水が衣の裾をぬらすのとは感じの上で、大へんちがひがある。尙又、古今和歌六帖第四に貫之の歌、

朝露にしとゞに袖をぬらしつゝ君が爲とぞ若菜摘みつる

も類咏ではあるが、露の聯想は矢張わびしさが勝つて、雪のやうな軽い明るい感じがない。（それに五句は舌音が重なつて口調がギョチナイと思ふ）

歌たてまつれとおほせられし時よみて奉れる

つらゆき

三二 春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人の行らん

作者 六帖一 若菜、「讀人しらす」

詞書 元、「歌たてまつれとおほせありける時に……」

新撰 同。

歌たてまつれ云々。自作の咏歌をお目にかけるやうとの御沙汰があつた時、新規に咏進したものと意、歌人の歌を召されたこと本集中所々に見え（歌壇索引参照）て居る。わかなつみにやの「や」は軽い疑問——否な疑問といふよりも寧ろ推測を示して下に「あらむ」を省いた格と看たい。但しこゝではその「あらむ」が最後に廻つてゐる。白妙の「白妙」はもと「白栲」で「栲」は楮の木のような繊維の強靱な樹皮を洒して織つた布で、太織を荒栲、細織を和栲といつたが、又色が白いので通じては白栲ともいつた。それから轉じて袖・衣・袴・袂・天領巾などの枕詞に用ひるやうになつた。こゝもその枕詞である。「妙」を宛てて「白妙になりて」などいふのは眞白になつてといふ程の意。ふりはへ、振延と宛てて、下行下二段活用。わざ／＼大袈裟にひらめかせてといふ程の心、これを「振り合ひ」とした語釋を見たが、恐らく間違であらう。用例には、
くすしふりはへて 屑蘇・白散・酒加へてもて來たり。（土佐日記）
ふりはへて 君がためにと春の野につめるかたみの若菜なりけり（忠見集）
などがある。らむ、これは遙に二句の「や」につゞくもので直ぐ上につゞくものではない。人の行くことは眼前確實の景で最早疑ふ餘地はない。「人が行くがあれば多分は春日野の若菜つみにやあらむ」である。

……と見れば人々がヒラ／＼と袖や袂を大袈裟にひらめがへしながら、ゾロリ／＼と通つて居る。あゝあれは多分春日野へ若菜摘に行くのであらう。羨ましいことよ。

この歌の面白い處は作者が奈良の町娘になりすまして、美的に羨んだ着想にある。家事にかまけて若い年頃の娘が掃き拭き雑仕にいそしんで居る矢先、通できやツ／＼とはしやく聲がして、ふと見ると自分と同じ年恰好の麗衣の子が、手に／＼花がたみなどをさげて、快活に春日野の方を指して行く。折からそよ風に翻る袂は本人の嬉しさが反映してまるで袂で悦んでゐるかのやうにヒラ／＼といつまでも後から眼につく。あゝ羨ましい、わたしも行きたいナア、と指をくはへてヂツと立ち見して居るといつた心境。併し指をくはへては餘り不上品過ぎるから、そこを美的にこんな形で表したと見れば實に作者貫之の常の作風にも似ず輕快な着想である。

以上でこの歌に對する感想は盡きてをるが、こゝに一つ著者の恥をいほうなら、實はずつと始めこの歌の本文を見た時かの西行が、

あはれいかに草葉の露のこぼらん秋風立ちぬ宮城野の原
や源三位頼政が、

こよひたれす吹く風を身にしめて吉野のたけの月を見るらん

などと同じく、風物の推移につれて、會遊の地や歌枕の地で自家の感興の油然たるものがあつた。

あゝ春になつた。定めしあの奈良人は春日野の若菜摘に白妙の袖ふりはへて出かけて居ることであらうと採つて、「や」を強調の指定「らむ」を直ぐ上の「行く」に直屬するものと思つたのだが、後類本をあさるにつれてその謬見であつたことに心づいた次第である。

尙「白妙の袖」を「ふりはへ」の序詞と見た本もある。單に語格の上から見ればさうもとれないことはないが、二句に跨つた序詞は口調もわるし、又さうなれば右いつたやうな情趣はなくなつてしまふ。

題 し ら す

在原行平朝臣

二三 春のさる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

詞書 人名 元、「不知題、在原行平」

結句 元、筋「たゝるべらなれ」(斷たるべらなれ)

六帖一 霞、新撰 同。

在原行平 一四七九——一五五三、弘仁一〇——寛平五、七十六歳、阿保親王の第二男で、母君は桓武天皇の皇女伊登内親王で、即ち彼は業平の同母兄である。天長三年に兄の仲平、弟の業平等と共に在原姓を賜はつて臣下に列し、承和七年正月藏人を振出しに仁和元年按察使まで累進同三年四月十三日に致仕。仁明天皇から五代に歴任し經世濟民の功績、著しく、又和歌に巧みで、古今後撰、新古今、玉葉などに採られて居る。尤も之を弟業平のに比べると大分劣り様がして業平のは天才的の秀味行平のは一節かかしくいひまはした機用な口つきとでもいほうか。尙又在民部卿家歌合一卷十二番(群書類從百八十卷刊本第九輯一——二)は歌合として早いものである。(十論その他の歌人参照) 春のさる。春を擬人したもの、霞の衣。霞の山野にたなびいてゐるのが丁度人間が着物を纏うてゐるやうだといふので「衣の如き霞」と直喩にするところを、一段強めて「霞の衣」とした。ぬき。緯と書いて縦絲(經)に對する横絲をいふ。反物の織機では先づ縦絲をへて、縦り入れといつて裏表の縦絲を一本一本交又させる。それを機にかけて箆に巻きつけた緯絲を一本通しては足で踏んで縦絲の裏表をかへして締め丁度進を編むと同じ仕掛を平面にしたやうなものである。で、かうした聯想は上代にはなかつたもので、三韓から吳服・綾服などが來朝して機業が開けてからのことである。ぬきをうすみ。「み」は古格の接尾語で他語を副詞化する「さに」「ので」「によつて」など譯される「を」はこれも古格の感歎助辭で、こゝは「アアあの緯絲が薄いものだから」として精密に口語譯されたことになる。この様に「を」と「み」とはよく相對して用ひられる。

苦を荒み。夜を寒み。風をいたみ。

など……けれども又、

さほ山の杵の紅葉ちりぬべみ

など「を」無しにも用ひられることがある。借縁絲ならぬきを細みとあるべきだが縦横の縁でも織り込む数の少いものは俗に「よみが浅い」といつて地質が薄い處から「うすみ」としても差支ないと想ふし、又こゝは何も經でも緯でも、別にお構のないところであつた霞の生地が荒いのでといふ程の意味である。山風にこそこの「こそ」は強意の指定ではあるが「外のものには亂れないが唯あの山風にのみよつて」と餘情を推測するのはよくない。そんなことをすると何となく霞のデリカシイな趣が薄らいでツツキラ棒な剛情な姿態に化してしまふ氣味がある。けれども「こそ」は飽くまで山風をつよく指し示したものに違ひないのだから、こゝは「人のころもとちがつて春のころもなんか誰も破りも綻ばせもしないが春には春相應の苦手があつてあの山風によつてサ」といふ程の含蓄であらう。みだる。亂れることヲ行下二段の自動詞第三活、着物の綻べのやうに春霞が處々斷續してその絶間から春の野山の美しいがすけて見える趣を服装の縁語で「みだる」としたものをべらなれは「べくあるなれ」といふ程の意で……しさうにあるとなる。この期、特有の想像兼存在の熟合助動詞で、殊に古今集時代に多く(十九ヶ處・二三・八七・二九五・三四八・三六四・四一二・四六八・六〇〇・六七一・七一六・七五一・七五二・八七七・九一六・九四七・九五九・九六八・九八九・一〇五七)次の後撰集では一寸少く(十六ヶ處)その次の拾遺集ではたつた六ヶ處用ひて以下次第に衰へた。

春の着る霞の衣はマアあの緯絲がうすいものだから、山風といふ(彼女には苦手の意地悪)に吹き亂されさうだわい。(だがその趣は實に得もいはぬ春興であるよ)

一番強いものが一番弱いものを倒したといつては、強いものが強いにもならず、弱いものが弱いにもならない。譬へば太刀山が幼稚園の子供と相撲をとつて勝つたといつたやうなもので、「ナント太刀山は強いナア」とは云はれない「そりや勿論さ相手は園児ではないか」となる。又「ナーンとあの兒は弱いナア」とも云はれない。「そりや當り前サ、相手は大關ではないか」となる。之に反して弱いものが弱いものに倒されたといふと、その倒されたものの弱さは

最大級の弱さとなつて見事聽手に感觸される。

小男が小男といふ小男は

といふ川柳に於て小男から「彼奴は小男だ」と云はれるその小男の矮小振は思ひやられる。

吹く毎に蝶の居直る柳かな

芭蕉

春風のそよぎは至つて弱いが、その弱い春風に靡かされる柳はも一つ弱いが、その又柳に支配せらるゝ蝶の弱さといへば、いかにもあえかな姿態が想像せられる。今こゝの山風はそよ風ではない相當きつい風ではあらうが、さりとて、

猪も共に吹かるゝ野分かな

芭蕉

信濃なる素鷺の荒野を飛ぶ鷺の翼もたわに吹く風かな

賀茂真淵

といった風の野分や山風に比べては優しいものである。その優しい春風に得堪へずして、ちぎれさうな霞は更に脆いものである。そこでこの歌は霞のあえかな風情を字面にしたのだが、主なるねらひはその霞によつて點綴されて隠見する春の山野の眺めである。事實春陽和煦の日、立つて四山に見入る時、春靄模糊として紅黄紫白の彩華を包む趣は確かに詩材として價值あるものである。之を洋装婦人のヴェールに譬へるのはまた物足りない。肉感的でない限度に於ける純日本式の輕羅柳腰の佳人に比して略好對であらう。春の擬人、霞の暗喩、亂るの縁語、織機の緯絲の縁語と修辭も又織巧である。

寛平御時さいの宮の歌合によめる

源むねゆきの朝臣

二四 ときはなる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり

詞書 作者 元・清、「寛平御時后宮歌合、源宗子〇〇」抄「……歌合のうた」

新撰 同

源宗千集——一六〇〇——天慶三、光孝天皇の御子は忠親王の御子で、寛平六年に源姓を賜はつて臣下に列し、延喜の頃方々の國司に歴任して從四位下右京大夫に叙任せられた。本集並に後撰集にその歌が入り、家集に源宗千集（群二四八、九、五八三—五八四、續四三六—四三七）といふが遺つてゐる。ときは「とこしへいは」から「とこいは」となつてそれがつゞまつて「ときは」となつたといふ。常磐と書く。永久堅固不變の意から、四時緑を保つ常緑木を常磐樹ともいふ。（同じ文字をじやうばんと呼んだ藏道線路がある。あれは全く別で常陸磐城の約である）四季變らないところの緑松の葉のみどり色松の新芽（すげえ）を「みどり」ともいふが、こゝは葉の緑色である。すらも、さへも、までも。今「今いくかりて」の「今」と同じく、もうこの上の意。「しほ」一入とも一潮とも書いて、上代染色の單位、一度入れて染めることを一入、二度入れて染めることを二入などいふ。八汐の紅葉、千汐の錦、一入再入之紅などよく用ひる。一度染めればそれだけ色濃く染まることから、一段とか一層とかいふと同じ場合にも用ひるやうになつたがもとの語義はそれ／＼ちがつて居る。まさり「増さり」とした本もあるが「優り」の意である。

四季を通じて變らない松の葉の緑でさへ春が来るともう一しほその緑の色が引きたつて見えるなあ。

異中に異を見るは易く同中に異を見るは難い。潤葉樹の嫩葉は誰しも認めるが、松の緑を個性づけて、同じ緑でも春は一しほまさつたものがあるといふのは作者の趣味のこまかな表れで面白い。之を人に持つて行くと常はにが蟲をかんだやうなしかめっ面の人までが笑つたとなつてそのをかしみは強く表現せられると同じく、常の緑の松までが、春のよそほひして特別引きたつた緑を呈して居るといつて、春色生々の趣が遺憾なく發露されたことになる。秋の部一九四忠岑の月を詠んだものとその着想が近い。こまかな趣味眼といふ上から觀て次の歌とも似て居る。

崇徳院に百首歌奉りける時

藤原清輔朝臣

あさのみふかく見ゆるや煙たつ室のやしまのわたりなるらむ（新古今一春上三四）

歌奉れとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

二五 我せこが衣はるさめふるごとへのみどりぞ色まさりける

詞書 頼嘉「おほせられし時に」元「よみて」の三字なし。

上句 古典本、「我が夫子が春（張）雨降ること（舊言）に。」

下句 清「ふることに」

初句 三句 六帖一 雨 「我兄子が衣春雨ふるからに」

新撰 同。

我「わ」は「あ」ともいつて古格の自稱代名詞それに「が」助辭をつけて所有格を表す「わたしの」位のところ、これは親稱にもなつて居る「我が大南洲は」といへば自己の所有に係る隆盛ではなく、自己の親愛せる大西郷の意である。せこ。夫子・春子など書く、「勢子」は別（兵卒のこと）、この語は夫が妻が、男が、女かと昔からやかましい詮議がある。その大部分は「我がかつ」といつてあるが源俊賴の如きは「我せ」とは男をいふ。吾妹子とは女をいふとぞ古きものにはしるしたれど女をも我せことかへしていふべし」といひこれを載せた顯註には「せ」とは男女互にその配偶を指していふこと猶「つま」の如きものだとの意を述べ契沖は別に「妻」と解せよとは主張しないが、併し女を「せ」と謂つた古い例はあるといつて神代紀吾妹をあがなせのみこととよんだことや和名抄備中賀夜郡庭妹^{神代}の地名をあげて居る。けれどもその他の多くは之を「吾がなつ」と解いて居るからそれに隨つておく。「我がせこが」といふ句は萬葉に五十餘りあつて大抵男の方に用ひてある。又この集では秋上、一七一にも一つこの句があつてその解釋にも同じ様な異説がある。ころもはるさめ「はる」が上下に兩屬した秀句で衣張る。春雨、衣張るとは解き洗衣を張るともこれようし。打衣といつて新しいものでも糊をつけて張つたものともとれるが、先づは一度着古したものをほどいて洗つて糊張をするとの前者の意であらう。

我が夫の着物を洗ひ張して居る矢先に折悪しくも春雨が降つた。又この一雨で野邊の若草は一段と綠色濃く延び

て行くことであらう（それに引きかへ我がせの君のこの衣よ、生地はくたびれもだん／＼褪めふるびて侘びしい感じがすると家妻の心になつて味んだもの。）

■ 季吟の解に「我がせこが衣」までは春雨の序詞においたとあるのも一つの見方ではあるが、已に奈良の町家の娘になりすました程の貫之が人妻になり變つてその心持をよむ位のこととは易々たるものでもあらうし、本集の序文で驅使自在を極めた序詞が一見誰疑ふ餘地もない明瞭な句調であるのに照らして、實か序か疑はしいやうな造句はすまいとも思はれる。元來糊つけに雨ふりは幾ら春雨でも折つきなからぬ天氣で、お負けに若草の生長と弊衣の對照緑の生長と色目の褪色と相對照してわびしい餘韻をひく。六位七位の妻か、乃至はもつと貧しい家妻が、かひ／＼しく家事にいそしみながらも折柄の春雨にやさしく肩をひそめてゐる姿が髣髴するやうな歌である。これに寓意あるといふ説は「貫之久しく六位に停滯して縹の袍にあぐね、早く五位の緋の袍が着たいと思つて妻の述懐に託して訴へたものだ」などいふもので、これは作者に對して餘りに失禮であらう。「かしらの雪」をわびた文琳をいやしいと評した貫之ではないか。

二六 青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

作者 六帖六柳 「通昭」

三句 清「ときしもそ」

四句 元・筋・相・爲、「みだれて花は」清「はなの」

新撰 同。

■ 前と同じ歌境だから題はない。青柳「あなやなぎ」の「な」を略したもの柳の葉の色の青を冠して「あなやぎ」といふ。「青柳のいと」とは青柳の枝がまるで緑のやうだといふ暗喩の語で、古來幾度も用ひられた。よりかくる。「より」は縊りといふのは皆同

じだが「かくる」の解釋がまち／＼で、或は單に輕く添へたものといひ、又は「柳の枝が宙に浮いて懸つて居るからかくるだ」ともいふが、これは今も口語に「絲によりをかけて」「腕によりをかけて」などいふ「かける」の文語である。元來「縊り」が動詞なのを名詞にした爲めに同意語の動詞をつけて句にしたものと見える。尙こゝな解は見ないけれども、今の口語にその事に着手することとを「仕事をしかけると子供が邪魔をする」などいふからこれも「絲を縊りにとりかゝると」ともとられるが、それならば寧ろ「絲よりそむる」とある處だと想ふ。春しもぞの「し」は強意助辭「も」は詠歎助辭「ぞ」は強意の指定助辭「青柳が絲によりをかけてるその同じ春であるのにマア」といつた風の句。みだれて。下につけて「花のみだれて」の倒置句であると共に花の亂れることとはりも直さず春の亂れることだからこの句は上にもつゞいて「春しもぞ亂れて」「春がサ、マアこのやうに亂れて、即花が縊びてゐる」と解く。ほころび。花が咲いたことをいふ。よりかくる。みだれて。の縁語で「咲きそめにけり」としても可いところを縊びとしたもの。着物によそへて花の紐とく。花の縊ぶ。などいふ。縊びにけり。の「に」は現在完了「ぬ」の活用「けり」は詠歎助動詞と解く。「にけり」を一つの品詞とすれば大過去の助動詞で咲いてから大分たつたことになるが、それよりもこゝは今しがた咲いたばかり、少くとも破蕾日淺い頃思入深く眺めて居る趣向として詩味があるのである。

■ 一方では青柳が絲によりをかけてこれから裁縫でも始めようとして居るこの春にマア、これは何としたことか、片一方ではその同じ春が亂れてあの様に花が縊びたわい。

■ 青柳と花と縊りと縊びと兩々相對照してその優雅な矛盾の發見に獨り得意の微笑を含んだ氣味があつて、いつもながら作者の織巧驚くべき着想である。青柳と花の擬人、よりかくる、みだれ、縊びの縁語と無上に小手がきいて、而かも落想の奥を見れば絲に縊りをかけてる青柳も春になくてはかなはぬ興趣。縊びそむる花は猶更我意を得たるもの、彼もよし此もよしと悦に入つた作者の風貌が活躍してをる。

西大寺（西大寺）のほとりの柳をよめる

僧 正 遍 昭

二七 あさ緑いとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

詞書 遍昭集「春西寺の柳を」元、「西寺の柳をよめる 僧正遍昭」

三句 遍昭集「白露の」

五句 元、「はるのあなやき」

四句 五句 顯・古異本「玉にもぬくか春の青柳」

藤村先生の頭註には次の記事がある、「宮内省俊成本にはこの一首がない。靜嘉堂文庫の傳爲相筆本では次の「西大寺」の詞書の内に含まれてゐる。」

新撰 同。

【釋】 あさ緑 緑色のうすいもの、薄綠色。白露を玉にもぬける 白露を玉としてそれを我が淺緑の絲に貫いてゐる。「玉にも」の

「も」は咏歌助辭。やなぎか の「か」は咏歌助辭で疑問ではない。春の柳の「美しきかな」とか「愛すべきかな」といふ心持。

【釋】 薄綠色の絲によりをかけて、白露を玉としてその絲に通して（丁度この西大寺の坊様が持つ珠數のやうな趣を呈する）春の青柳の景致實に愛すべきかな。

【釋】 西大寺は昔外來の使節を止宿させる爲めに、朱雀大路を南へ下る羅城下門外七條通に設けられた鴻臚館の名残である。この鴻臚館で外國の使臣と應對したことは、源氏物語桐壺の卷に右大辨が源氏の君をお連れ申して高麗人の相人に引き合はす處があり、薩摩守忠度の朗咏で名高い、後江相公大江朝綱の渤海の周文徳に贈つた送別の詩、

前途程遠。馳思於雁山之暮雲。後會期遙。露瀼於鴻臚之曉淚。

などがある。後この官舎が廢館になつて東の大寺西の大寺となり、東の大寺は今「東寺」と謂つてそのあらゝぎは所謂

「東寺の塔」といつて名高いものが、東海道線神戸行の列車が京都驛につくと、車窓第一番の眺めとして何よりも早く眼につく。東の大寺を東寺といつた頃から西の大寺をも西寺といつたものか、奈良の西大寺と別けるために西寺といつたものか、著者にはまだその邊の研究が出来てないが、西の方は早く荒廢して町家となり東の寺だけが残存したものだといふ。さてこの歌は柳を擬人し白露を玉と暗喩し、青柳と白露の色彩對比も優麗なり、西の大寺といふ場處柄之を珠數によそへた聯想も自然でよろしい。之を同僧正が「何かは露を玉とあざむく」の咏と同じ型にはめて、寺は正直まつたう偽りをいふべき場處でもないのに、なぜにまあこの柳は白露を玉と欺いたかと解するのはよろしくない。青い絹絲に白い水晶の珠を通せば丁度青柳に白露と近いものになる。この聯想である。契沖云ふ

「林氏が一人一首第三に石上大納言宅嗣の三月三日於西大寺侍宴應詔七言律詩第五六句云、

青絲柳陌驚歌足。紅絮桃蹊蝶舞新。

此第五句に、柳陌とあるに依れば、西大寺のほとりには柳を並木などに植られたるが遍昭の比までもありけるを見てよまれけるにや

と、「柳櫻をこきまぜて」といつた風に當時平安京の街路樹はポプラやランタナゴではなく旨と柳などを植ゑられたものであらう。（今日の京都の大通にもまた古典めいた柳のしたれが處々に見られる）けれどもよし街路樹であつたにもせよ、この歌は飽くまで西大寺にかゝはりを持つた柳として着想したものである。

題 し ら す

よ み び と し ら す

二八 もしちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

詞書 元、「不知題」

春 上 二七・二八

二句 清・元・顯・筋・相「啼くなる春は」

○もちどり 百千鳥、百鳥千鳥などいつて、春に轉る鳴禽類の總稱と見ればよろしい。古今集三鳥の一などいつて事々しく註したものであることは別項で述べた通りである。物ごとに 事々物々、萬物一體に。あらたまれども 新たになるけれども、四海波靜萬物是新など書き初めにする句と略同じ意、世界のあらゆる事々は、に生の更新といった趣を呈すること、我ぞ は上の「物ごとに」と對して對照法を作る、物はあらたまり我はふりゆく。ふりゆく 老衰の境に入る。段々と老いて行く

百千鳥の陽氣に轉る春になると この世のあらゆる事物はあらたまつて活氣を呈するが、それに引きかへ、我身は年々に老衰して行く。(とは何とわびしいことであるよ)

春告鳥の鶯はいはずもあれ。繡眼のチユン／＼、雲雀のチーチク、百舌のギチ／＼、山雀のビイ／＼、鴉は念入に「一筆啓上仕候」雉子山鳥は父か母かとホロ／＼、ケン／＼、鶯は輪を書きながらピンヒユル／＼、馬をいろ／＼と數へ來れば春の山里は百鳥千鳥の様々の啼く音に充たされて、かう述べてゐる中にも吾々の胸深く少年の春をマザ／＼と憶ひ出させる。そこで「百千鳥轉る」を以て春の形容詞句にして斯うした春は、事々物々に生氣ありと看ることこれも皆人の首肯することであらう。初唐詩人 廷芝が 代悲白頭翁と題する七言古詩の中に「年々歳々花相似。歳々年々人不回」といつたが、自然の悠久を人事の轉變に比照して怨嗟の詩歌となすこと、古今東西を通じて見られる詩人の一般的着想である。だからこの歌の着想には不易の感味がある。唯上の句の優雅なるに比して下の句に雅致がないのが缺點だ。むしろ咏歎的に「あらたまれども我老いぬ」などいつた方がよくはあるまいか。尤「あらたまれども人はふりゆく」などしてまるで施餓鬼のお説法のやうな説理としないで「我ぞふりゆく」と自己當面の痛感とした點はよろしい。

類咏には萬葉十の一八八四

歎舊

冬過ぎて春しきぬれば年月は新たなれども人はふりゆく

(尙この直ぐ次に

物皆は新しきよし唯人は舊りぬるのみぞ宜しかるべき

とあるがこれでは前の正反對である。恐らく後の歌の前に「歎舊」の二字が脱けたものであらう。

拾遺集卷十六 雜存一〇〇一

よみ人しらす

あたらしき年はくれども徒に我身のみこそふり増りけれ

尙本集五七 貫之の歌も之に近い。

二九 遠近のたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこどり哉

作者 卅六「猿丸大夫」

古典本「遠近の寄所(立木)も知らぬ、山中におぼつかなくも呼千鳥かな」

一句 嘉「おぼつかなくて」

猿丸集六帖六 呼子鳥卅六 同。

遠近 あちこち(彼方此方)のこと、こゝもその意。後にはこの遠近の宛字から「遠い所や近い所」との意にも用ひるやうになつた。たづき 手着と書き方々・便宜などもあて、こゝでは行き勝手のこと。と咏歎助辭、知らぬの主語は我。我が行勝手も一向に知らない。だのに、おぼつかなく。たよりなく。不安らしく、よぶこどり。我を「呼ぶ」と「呼子鳥」との秀句。呼子鳥は本集

春上 二八・二九・三〇

三二七

三鳥の一で、雄だ、猿だ、岡古鳥喚子鳥だ、郭公だなどいろ／＼の歌があつてどれと定められる

■ あちらこちらの勝手も知らないこの山路なのに、我を呼び顔に呼子鳥が啼いてゐるが、その聲も亦おぼつかないらしい。

■ 深山路のさびしさを歌つたもので、不知案内の山路を辿つて、木の根岩かどをあえぎ／＼に攀ちては居るもの。緒でどこをどう行つたものか一向わからない。行けどもく／＼山又山で、人に問はうにも、深山の奥の一軒家といった風のものもない。この時旅の兒にとつてはたとひ癩病患者でも、乞食でも人けのものが何より懐かしい。人けが得られなければ、せめて生き者であつてくれればと思ふ。その折柄に我を呼ぶてふ呼子鳥がないので「ホッ」としたが、さてその聲色はさながら我が心の音響化のやうに、如何にも自信のない聲で啼いてゐることよ、といった心持か？ 呼子鳥の正體不明だから、鑑賞のしやうもない。が、少くとも春の部上に收めてある所から察して春の鳴禽類であらう。そしてこの歌の位置からみて、早春山路の旅愁に配合せられた鳥であらうと思ふ。近頃のもので、又小説ではあるが、岩野泡鳴氏の作品に北海道で雪の峠をこす旅人の難儀を描いたものがあるがあの氣持と相通つてゐる。

雁の聲をきゝてこしへまかりける人を思てよめる

凡河内 躬恒

三〇 春くれば鴈かへるなり白雲のみちゆきふりにことやつてまし

■ 詞書・作者 元、「雁の聲を聞きて、越へまかりける人を思ひ出でてよめる。〇〇躬恒」

三句 三、「白雲の」

■ 雁 雁とも書く、なく音によつて雁といふ。「かりがれ」といふのはこの雁が曲なりに列をなして空を飛ぶからだといふ又別

に「雁が音」といふ語もある。これは雁のなく音のことをいふ。王朝人は秋來の雁をも春 歸雁をもめでた。雁の姿態をも啼く音をもたへた。源氏 背景、枕の所々さては各集の春秋の味など隨所に出て居る。こし「越」と書く。記(古事記)に「大彦命遣流志道」とあり紀(日本書紀)孝元天皇の條に「大彦命越國造祖」などあるのが記録に表れた早いもので、後高志道を越路とし、更に越前・越中・越後と別れるやうになつて三越路といふ。(或はいふ「み」は接頭語であるとも) まかり 目離るの轉で甲處から乙所に轉ずるといふのが原義で、上から下へ退出する意となつて「宮中より里へまかりいでて」などいふ。それがこの頃から下から上へ行くことにも、上下の階級別なしに他へ行くことにも用ひるやうになつたものと見えて「京へまかる」「山寺へまかる」などもある。後に室町期の狂言など「罷出でたるはこあたりの者でござる」などいふのは、唯「川で」の接頭語で、「出で」に勿體をつけたものに過ぎないやうな趣がある。ける 過去の助動詞。人 作者躬恒の親しい人、同じ躬恒の歌で、三八二に、あひしれりける人のこしのくにまかりて年へて京にまうできて又かへりける時によめる。と、いふのが一首と同じつゞきに、

こしのくにへまかりける人によみてつかはしける
といふのもあつて同じ相手と見える。又同じ躬恒が同じく越の國から上京した宗岳大禪との贈答は九七八・九七九にあるから、少くともこれは大禪以外躬恒の親しい人と推測せられる。思ひ この頃の「思ふ」は今の「愛する」とか「懐かしむ」とか「忍ぶ」とかいふに當る。春くれば 春がくると、この「くれば」は次の「かへる」と呼應して一去一來の感を表す。なりは咏歎。白雲 字の通り白い雲のことだが、末遠い北國への旅情がこもつてゐる。みちゆきふり 道行觸又ゆきふれ・いきふれ(行觸)ともいふ。道行く序に。ことや 言やで「や」は強意の指定の氣味のある咏歎助詞の倒置されたもので「言傳しよよ」の「よ」に當る。つては、「つたへ」の約、「ことつたへ」を約して、「ことつて」「つを測つて」「ことつて」「て」を通韻で「ことづけ」などいふ。まし は「む」と同じく未來を示し希望をもこめた語。

■ 春がやつて來ると行き違ひに、あれサ雁は北の國をさして歸つてゆくこと——さてその行く手はどこか遠い／＼

梅の花の移り香が濃くて」と補ふ。袖そでが匂におつて居るといふことを強く抑へて「こそ」を入れたもの、随つて口語の「袖こそは匂つてゐるが、何も花なんか咲いてやしない」と多少區別した氣味がある。梅の花「梅」は「まい」の音から來たもので「まい」を「め」とし之に發語の「う」をつけて「うめ」となつたと云ふ（荻生徂徠南留別志二ノ二五）日本釋名下ノ一二に「花なきときさきてうつくしくめぐらしき意を以て、うめといふ」などあるのは當てにならない。眞淵の家集四ノ一には「……梅てふ木の花は、空みつ大和の國のものならずしてことさやぐから國より、根こし來れりしを、飛鳥の明日香荒妙の藤原の宮人ぞうたにもつられはじめたりける」といつて居る。成程我邦に野生の梅の記事のないのから推して三韓か支那から渡來したものだと思はれる。王仁の歌といふ「この花」（これも大根の花だといふ説もある）は別として「梅」とあらはに詠みこんだ作品の早いものは、懷風藻の中の葛野王の詩で歌では一六に引いた萬葉の歌などで觀梅のうたげを催されたのは天平十年七月とあるが、これは青葉の梅樹をめでさせられたもので花見の方は承和六年正月が始めたとある。萬葉歌人のたゞへた梅は大抵は白梅であつたが、王朝に入つては紅梅をもめて菅公の如き館を紅梅殿とまで名づけて愛翫したし大鏡には村上天皇の御代紅梅内侍の記事もある。宮中には紅白共に植ゑさせられ、右の梅花の宴の時には仁壽殿前に栽ゑられたものといひ、紫宸殿南階前にも始め梅であつたのを後に櫻に變へられた。又後宮五舍の一つに梅壺といふのがあつて壺庭には皆この樹が植ゑられたらしい。さてこの集では梅の花や枝をめでたものは少く大抵はその香のしるきことをたゞへてゐる。成程梅の花や桃や李に比べては花の香が高いには相違ないが、この集歌人のいふが如き濃厚熾烈なものではない。（梅林は別）、程度の薰香をあの程度にまで誇張して打興じた、王朝趣味はとりも直さず清白瀟洒を悦ぶ日本趣味を最もよくあらはして居て、香もあつさり、花も清楚な梅が我國民に愛好せられるのは洵にふさはしいことだと思ふ。此に霜をしのぎ嵐に堪へて……と道德的聯想をも加へて愛好するやうになつたのは支那式の聯想や武士道の節操觀が興つて力があらう。近頃西洋の草花が齎あづからされてグアオントだのスキートピーだのカーネーションだのヒヤシンヌスだのと色々愛翫されるやうだが、これ等の多くは芳列鼻を衝かんばかりで此等を紅梅白梅に比べると、丁度シチウヤカツを香の物茶漬に比べる程の違ひがある。シチウヤカツも嗅つて滋養分があるやうに、西洋草花を愛翫するものもよろしいが、さうかと謂つてこの清白清楚な梅花の美を忘れたくはない

ものだ。さてこの「梅の花」は直ぐ下の「ありとや」に續くのだが、同時に上の「折りつれば」を説明して「梅の花を折ると」「その梅の花が」と二つにいふ處を一つに兼ねて居る。ありとや「や」は疑、ありと思ひてにや、あると思つたかして。うぐひす。梅に鶯はきまつた配合と看做していつたもの。

梅の花を手折ると、あまり薫りが高くて袖の移り香がたゞよつて居るものだから本當の梅の花があるかと思つてか、コレこんなところへ來て鶯がないてゐる。

鶯が主ではなく梅の香の-highいことを表すのが主である。いくら鶯でも、梅の花の有無位は見分ける筈だが、こゝでは梅に鶯は來てとまるべきものと前提して、さてこゝに梅の香がたゞよつてゐると、好伴侶こゝにありとして（尤も「ありとや」に「こゝ」といふのは「こゝ」にありとや」の例置句ではない。「こゝ」に鶯のなく」と下へつゞくのである）よい氣に啼いてゐると鶯のたゞ啼きを面白がつて、さうした錯覺の誘引となるほど而かく、梅の移り香は濃いつつたものである。趣向一通をかしき節は聞えるが、實感味に乏しい嫌がある。これから脱化したものに、新古今一春上五三藤原有家の左の咏がある。

ちりぬればにほひばかりなうめの花ありとや袖に春風の吹く

三三 色よりもかこそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ども

二句 筋行、「かこそあはれに」

四句 元、「たがぬぎかけし」

色よりも 色もよいはよいが併しそれよりも一旦憂めて更により以上の香を持出すいひ振。かこそ「こそ」は衆中擇一の

「こそ」で何よりもこの香がサ、あはれ 喜怒哀樂すべて感深いことをいふ「あ」と「はれ」と二個の感歎助辭の結合した名詞だとい

ふ、本居宣長の「玉小櫛」中「物のあはれ」の語釋のところ説いたものが委しい。こゝもその香のいみじく漂うてゐるのに惹きつけらるゝといつた氣味。おもほゆれ。思はれるといふ意の「おもほゆ」(ヤ行下二段)の五活已然形、おもはれる、おもはれるよといふこと。だが、誰が、「た」は古格の人稱代名詞不定稱。袖ふれし。昔は室内に空薫物をし、衣服を伏籠にかけて、中から香をたきしめたりすることを一つの趣味とし王朝に入つては益々盛になつた源氏物語宇治十帖の主人公薫や匂宮は殊にこの趣味の享樂者であつたが様に描かれてゐる。さて後に香道・香合といふ風の遊藝も發達した。そこで今この梅の薫りをば誰か知らずみ深い貴人がえならぬ袖のうつり香のせいと看て、誰が袖をふれたと謂つたもの。宿の梅ども。宿はもと「屋門」即ち家の前の意なのが後には家とも軒とも庭とも時によつて廣狭の差があるがこゝならば庭と同意語である。「ぞ」は上の「誰が」と相俟つて強く指定して問ひ確め且つ幾分昔めた語氣「も」は感歎詞、庭の梅ぞいまあ

■ この庭の梅の花は色も美しいが、それよりも薫りがいふにいはれぬめでたい。これは恐らく梅の花だけの句ではなくて、誰かあなたを訪づれて来てこの花に袖をふれたその移り香の爲であらう。一體誰が袖をふれたのですいな。

■ 戀人の許を訪うて相手が他の愛人に逢つた形跡があるのを、梅が香に寓したと解いたのは面白いが、若しその作意ならば、戀の部に入るべきだから撰者はさうは解してなかつたものと思ふ。(若しそれならば源氏帯木木枯の女のところとよく似た情趣である)或は撰者が輕卒にも字面に泥んでこゝに入れたものと云ふ人もあるかも知れぬが、已に同じ「梅」といふ語の入つた歌でも鶯を主にした梅と、雪まじりに早咲する寒梅とを嚴別して居る位の編輯振から推して、そんな外面的な排列法を採つたものでないことも確かだ、こゝは前から引續き「梅が香の高いこと」を歌つたものとして並べたものであつて歌境は、

日頃親しい友人の許を訪ねて庭の梅が香の折ふし馥郁たるをめで、いやみのない戲談交りに「誰かいゝ人でも尋ねて来たものと見えますね」と間接に庭の梅をほめつゝ、揶揄した形をとつたものが、つまりは梅の香をめでるのに一

の凝つた趣向を立てたのが、當時の風俗好尚と相まつて今から觀て興多いものなのである。新古今一春上四六源通具の左の一首の上の句はこの歌を本歌として居る。

千五百番歌合に

梅のはな誰が袖ふれしにほひぞと春やむかしの月にとはげや

尙千五百番歌合第二 八十八番左勝良平のも

色よりも身にしむ物は梅の花袂に匂ふ風のうつりか

三四 やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人のかにあやまたれけり

■ 四句 元、清「待つ人の香と」

頼「松人のかに」

清頭注に此歌猿丸集に在るといふが現傳の猿丸大夫集にはない。

■ やど。前に家門とあげておいたが、尙これは家前とも、家處とも思はれるが、その「家」といふのは「はや」の略で「はや」は「はや」の轉で、今も最低度のセマンテ部族が、一時のかりしのぎの葉張「leaf shelter」が即ち「はや」だといふ。(坪井九馬三博士の説)梅の花。とあつても梅の樹のこと、今作者の現に見て居る梅が花盛りでもあり、その花故にこの味懐となつた譯だから「梅の花」としたもので、梅の樹は植ゑても、梅の花のくつついてゐるのは植ゑまいなどと採るのは拘泥に過ぎる。うゑじ。うゑまい。「じ」打消と柔來の合致した助動詞。あぢきなく。味氣無く、つまらなくの意。この語は無道・無端・無狀・無頼(紀)小豆奈九(萬葉十一)無益(史記伍子胥列傳・玉造壯喪書)無爲(文選古詩)類聚名義抄には上に青の字二つを並べ下に心と書いた一字のものもあつて、それ等の異なつた字を宛てた場合、意義にもそれ／＼多少の異動があつて、亂暴だ、無用だ、詮方なし、面白くない、興

がない、本意ないなどに用ひられては居るが、こゝでは「つまらなく」でよろしい。まつ人 相手の男女貴賤を問はず我心待ちに待つてある人とする。戀人と解くのは後論に失すると思ふ。

爾來家のめぐりには梅の樹を植ゑることは止さうと思ふ。花の香が高くて又しても待人の袖のうつり香とまぢがつて、むだにと胸を躍らせるのは詰らないことだから。

これが戀歌ならば勿論待つ戀の切なさを訴へたもので、當時の風俗から察して、女が愛人を待ちわびた焦躁の表白である。けれども三三と同様これも結局は「梅花薫香高し」といふ感を讀者に受取らせれば、作者は満足するもので、そのために待人の薫衣と感ちがひする程しるく匂つて居るといつたものである。普通は「庭近く梅の花を植ゑて樂しまう」といふのが人情なのを、わざと警句的に「そんなものは植ゑまい」と讀者の感情を一度ゆすぶつておいて下にそのわけを訴へて妥當感におちつかせたもの、構想に於て巧みなものがあるが梅の香を随分思ひ切つて誇張して居るに拘らず、讀後その方の印象はなくて、ちれて、こがれて、地團駄ふんで居る作者の風貌が髣髴してその爲め戀歌と誤まられる。類詠には詞花集六八の左記の一首などが好例であらう。

世をそむかせ給ひて後花種を御覽じてよませ給ひける

花山院御製

宿ちかくはな橘はほり植ゑじ昔をしのぶつまとなりけり

三五 梅の花たちよるばかりありしより人のとがむるかにぞしみける

詞書 兼輔集「いと忍びたる移り香の人しるばかりありければその女に」
結句 一本「かにぞしみける」

梅の花。下に「のかげに」などを補ふ。たちよる。「たち」は接頭語。そばへ寄りつく。ばかりありしより……といふ程の(些細な接觸をした)ことがあつたので、それからといふものは、「ばかり」は程度の助辭「より」は原因を示す助辭。とがむる。咎むる。いぶかるとか怪しむといふ意のことをやゝ強くした語、今日では普通悪事を責めたり糺したりする意につかふ、がこの頃は、こればかりか。といつた程度にもつかふ。(源氏夕顔の密葬の處など)又「面白い」といふ用例もある(伊勢物語淺間山の歌)。しみ。しみ、染み、今の口語と同じ。

私は梅の花の下蔭にホンの一寸立寄つた位なことだのに早くも花の香が沁みこんで、遇ふ人々は「これはをかしい、あなたは誰かにお逢ひなされたかッ」など怪しむ程になつた。(さてく梅が香はきつい者だなア)

兼輔集は、後人の攪入であらう、それはこの集當時に於てすら讀人しらすであつたものが、後になつて作者がはつきりわかつたといふのも肯はれないし、その作者兼輔は撰集當時在世の人でもあるし、この集で梅が香を主想に咏んだものとして採つたものを全く戀歌として扱つた點も違つて居るから……さてこの歌は梅が香の沁むことの早いことを形容しては「立ちよるばかり」といひ、その移り香の芳烈さを形容しては「人の咎むる云々」といひ、巧を凝らすことに於ては、繊細至れりと謂ふべきだが、誇張が甚しいだけに實感味は乏しい。この集の短所は這般の邊にあると思ふ後にこの着想を襲いたと思はれるものは、

後撰一、春二七 梅の花よそながら見む吾妹子がとがむ計の香にも社しめ 讀人しらす

同 三一 梅の花香をふきかくる春風にこゝろをそめば人や咎めむ 同

後拾遺一本の一 梅の花匂ふあたりの夕暮はあやなく人にあやめられつゝ (大中臣能宣五句普通はあやまたれつゝ)

むめのはなををりてよめる

東三條の左のおほいまうちぎさみ

・三六 鶯のかさにぬふてふ梅の花をりてかざさん老かくるやと

詞書 元「梅の花。をりてよめる」

二句 清・嘉・兼「かさにぬふといふ」

六帖二 おきな・六帖六 梅 同。

東三條の左のおほいまうち君一四七二——一五二四、弘仁三——齊衡元六、一三、四十三歳、源常(ときば)嵯峨天皇の皇子、正二位左大臣、性雅量寛弘惜しいことに夭折せられた。鶯の「の」は「が」と同じ、主格助辭、こゝは鶯を擬人してある。かさ 笠(かぶりかさ)のことで、傘からかさのことではない。にとしての意。二七の「玉にもぬける」の「に」と同じ、ぬふてふは「木」ぬふといふ」とある。この語句の原形は正しくさうであらうが、歌語としては字餘りでもあり句調もわるいから、矢張この儘でよろしい。「といふ」の Toi=H となつて「てふ」といひ、同じタ行音だから通音で「てふ」と轉じたもの、ぬふといふなるぬふとは當時の笠は衣笠と謂つて、細き糸を縫つて作つたからで、つまり笠をつくることをいふ。こればかりを專業にした名残だといふが村に笠紐の邑といふがある。處で此「鶯の笠に縫ふ」といふ解釋に二種あつて、清輔の奥儀抄には、鶯の枝移りかざしたものだといふ。花咲く下枝を甲から乙、乙から丙と飛び移る。その上は梅の花だから、まるで、梅の花笠をかぶつたやうな格になるといふのであらう。處が橘守部の催馬樂入綾には、梅の五瓣が、小さい笠形になつてゐるから、それを譬へて笠といつたものだといふ。これは守部の解がよろしい。もと／＼この語句は當時人口に膾炙した催馬樂、律の青柳といふ諺に、

青柳を片糸によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠

とあるのを引いたもので、青柳の糸で縫ふといふからには枝から枝へとよりは、つゝの五瓣花といつた方が適當である。のみならずあの可憐な鶯の爲めに笠を見立てようならば梅の花笠はさうしても一花でなくては不調和である(奈良大佛様の爲めに枕を見立てよう

ならば 長持を十個も積まねばならぬ如くに)かつての要折に、

春姫が千人の御兒の遊びます御船ひらく／＼櫻花散る

と詠んだものがある。これも春姫の御兒の御召しになる船を見立てるのに、櫻の落花を以てしたつもりである。かざさむ 挿頭さむ 上代男女を通じて時の花や折枝を頭にさして飾りにした。之を挿頭といふ。かざしは「かみさし」(髪差)で後世のかんざし(簪)もその名残だといふ。「頭にさしかざさう」といつたもの。老。下に「の姿が」など補ふ。かくるやと 隠れもしようかといふので、

鶯が笠に縫ふといふ梅の花をば、(我も折つて)かざしにしよう。(若しや)この老いの醜い顔かたちも隠れもしようかといふので……

當時誰知らぬものなき青柳の催馬樂を上句に取り容れたので、それだけで已に青柳と同一の輕快味が籠つて居る上に、一轉して我も鶯の聲に習はうといふところ何となく今日の茶番や二輪加を王朝式の都雅に直したやうな座興を想はせる。恐らく此は何かの宴席の餘興として、作者親ら梅の花を折りかざしつゝ詠まれたものであらう。にも拘らず作者は四十三歳といふ惜しい年に薨去せられたのだから當時算賀(賀の部にある)の俗から察して、これは作者が四十の算賀の宴席で、一座の中誰かが「青柳」をかなでたのに續いて興を發せられた時の詠であらうといふ(金子氏)この推測は確かに同感である。五句の餘情を汲んでも、衷心老來をわびた感じはない。いはゞ戲談半分に、今日頭の禿げた人すら「イヤ停電は少しも差支ない、拙者の頭が光るによつて……」など笑はかすやうに「ドリヤこの年寄額を隠しませう」など愛嬌を謂はれたものであらうから。……又かう解して見れば、この一首は輕快流暢な上に作者の歌才眞に當意即妙であつたこともわかる。

題しらす

素性法師

三七 よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色かはをりてなりけり

詞書作者 元「不知題、よみひとしらす」

筋「よみひとしらす」

素性集詞書「梅の花を折て人のがりやるとて」

六帖六 梅 同。

素性法師？ 僧正遍昭在俗の時の子で名は弘延とも玄理ともいふ。清和の朝に仕へて左近將監を勤め、後、父の考から出家した。性自然を愛し、煙霞を追うて近畿諸國の山川足迹到らざるなく、又交際を好み、上は公卿縉紳から下は市井の走卒に至るまで親近して談笑時を移した。つまり「愛」の深くも博くもあつた人で、それが人間愛となり、自然愛となつたものと想はれる。彼又書をよくし延喜の御代召されて御屏風繪の和歌を書いた。殊に和歌は六歌仙の壘を摩して秀味多く、集始め代々の勅撰集に採られ、家集は素性法師集一卷（群書一覽四—五九、群二六七、一〇、二五—二八、歌仙歌集二、續國四—四一五）よそにのみ違ひところからばかり、遊離的な態度で、この「のみ」は下につけて「あはれと見るのみなりし」とすれば明瞭になる。あはれとぞ見し、あゝ美しいと見てばかりゐた。あかぬ色香、いつまで見ても観飽きがない花の色香「あかぬ」は色香の修飾、下に「を心ゆくばかりめではやさうといふには」と補ふ。なりてなりけり、上に「矢張り」と補ふ。矢張り手折つてそばにおいて差し向つてのとだつたわい。

他からあゝ美しい花だなアと見てゐるばかりのことで、つひぞ近々と見めざる機が無かつた梅の花の飽くこと知らぬ妙なる色香を、心ゆくばかりもてはやさうといふには、矢張り手折つて之を我宿我へやの花として差向つての上のこととでありますわい。

この歌詞書が無かつたら、人から梅花を贈られてのお禮に詠んだものと見て「然るに今日しもかゝる美事なのを頂戴して、お蔭で十二分に賞翫することが出来て、こんな嬉しいことはありませぬ。くれぐれもあなたの御好意を感謝いたします」の餘情となる。けれども家集の詞書によると、反対で人に梅花を贈る時の詠となつて居る。その上作者の人となりから推して恐らくこの方が本當であらう。彼は櫻を見ても「手ごとに折りて家づとにせめ 五五」といひ、紅葉を見ても「袖にこきいれてもていなむ 三〇九」といつた人である。自分の趣味を人に及ぼさうといふこれ等の詠懐はやがて我家の梅をも割愛して「だから貴公に之を贈ります」といつたものであらう。その上梅の花その、近優りのするものであることまでもよく歌にあらはれて居る。

かうした歌を見ると、作者は趣味の上で徹底を求め、己の欲する處を人にも施さうとした人であることがわかる。之を兼好が「花のもとにねちよりたちよりしてあからめもせず花見だから花を見るのだ」といつた風の見方を、けなしたと對照すると、素性には徹底の趣愛すべく、兼好には不即不離の情致亦掬すべきものがある。そして素性の這般の趣味は又秋の紅葉に尙よく表れて三〇九となつてをる。

梅の花を折りて人におくりける

とものり

三八 君ならでたれにか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞしる

詞書 信明集「可惜よの月と花とを同じくは哀しれらむ人にみせばや」の「かへし」とある併し此は信明の作ではない。

友則集「梅の花折りて人にやるとて」

元「梅の花を折りて、人におくるとてよめる」

初句 清「きみなくて」

結句 清「しる人そみる」

六帖梅 同。

君ならて。君にあらすして、あなたでなくて、御身をおいて、たれに見せむ、反語の句、誰に見せませうか、誰も見せるべき人はありませぬ。何をか？ 梅の花を、さてこの花の色をも香をも、をも二度使つて疊句にしたもの。この梅の花の美しい色をも又、この妙なる薫りをも、しる人ぞしる。は「知らぬ人は知らない」といふと一般自明平凡の道理だが、一面「しる」を二度使つて疊句として上の「色をも香をも」の疊句との承接を緊密に整へ、一面上の「君」の思入つた云ひ方と呼應して「御身こそは實にその方面の第一人者でいらせられる。だから私は敢てこの一枝を進呈いたす次第であります」の餘情を醸して居る。

この梅花はあなたを措いて誰に見せませうか、(誰も見せるべき人は無いのであります。この花の色香の美しく妙なことは真に這般の趣味を解してゐる人だけが真に解し得る譯であります。(が、あなたこそは實にその唯一の理解者でいらせらるゝと思ひますから、失禮ながらこの一枝をお目にかけます。)

語句の聯接極めて緊密にして一語のそつなく上句の反語下句の疊句對句聊か斧鑿の跡をとゞめない。贈品は先方の嗜好に合うたものを選ぶべきで、上戸に餅を贈り下戸に酒を贈つては氣のきかぬこと夥しいことになる。この作者よく先方の趣味を解して即ち贈るに我庭の誇を以てす、而かもその手前自慢は可なり手きびしいものがあるに拘らずちつとの嫌味なく自分を持上げつゝ相手を持上げ自慢他慢をこきませて、相手を無上に悦びせつゝ實は自分も満悦するといふ着想、めでたしともめでたしである。

今日政治や職務に忙殺せられつゝある知識階級人にも斯うした贈答をするだけの餘裕は是非あつてほしいものだ。が併しこの歌は寓する處があつて、相手は躬恒の上官先輩で、「どうか何分の御引立を願ひます」といつたものだといふのである。して見ると「御身ならすして我が才をも學をも徳をも認めてくれる人はありませんから」とやうな裏面の後拾遺五秋下三四八に

中納言定頼かれくになり侍りけるに菊の花にさしてつかはしける

大 瓜 参 位

つらからむ方こそあらめ君ならで誰にか見せむ白菊の花

とあるは、この踏襲である。

くらぶ山にてよめる

つ ら ゆ き

三九 梅の花匂ふ春へはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける

詞書 元・顯「よめる」の三字なし。

二句 顯「にはふはるべに」

四句 清「やみにこゆれと」

六帖六 梅・梅の花吹ぬる時は倉部山、間に越ゆれど著くぞ有ける。

新撰 同。

春 上 三九・四〇

くらぶ山 所在地不明、季吟は「山城の名所也」といひ契沖は「山城なり」順集に「くらぶ山ふもとの野へのをみなへし」といふ歌の判の詞に、さか野を打過てくらぶ山までもとめありきけんもあぢきなしといへり。又天武紀に倉屋あり、「是は和名に近江國甲賀郡に藏部久良布あり。これにて同名異所なり」といひ、今一つ季吟の説を引いた南畝の東海談に「鞍馬の山つゞきだともいふ」とある。(これは源氏若紫の記事などからの臆測であらう。が、今暫らく山城名勝誌や京羽二重の説によつて「山城愛宕郡貴布禰村」として置く。併しこの歌としては、たとひ何處であらうとも暗いといふに秀句となる「くらぶ山」でさへあればよい譯である。秋の部一九五にもこの山がある。句ふ。を美しく咲きいづる。映えると解いたのがあるが、以下の歌なり、この歌の下の句に照らして、やはり臭感覺の句ふと解しておく。春べ。春頃の意「べ」は接尾語だが、河邊・野邊・山邊の「邊」といふ空間の尾辭を時間に轉用して「そのあたり」ならぬ「その頃」といふやうになつたものともとられ「べ」は「へ」の濁りで「へ」は「方」と宛てて方向の接尾語で「往にし方」「むかしべ」など用ひ、そこで「春頃」「春さき」の意に「春べ」といつたものかとも想ふ。四季の中では「春べ」だけ、一日の中では「夕べ」だけで、夏べ・秋べ・冬べ・朝べ・晝べなんかは謂はない。やみにこゆれど。月のない夜、月はあつても曇つた夜を闇といふ。くらやみにこえるけれども、上の「くらぶ山」と曆々暗黒の意をたゞんだもの。しるくぞありける。いちじるしく目立つたことよ。これは上の暗黒に對して顯著を掛け合ひにした工夫である。

梅の花の匂つてゐる春さきには名も暗いといふくらぶ山を而かも闇の夜にこえても(この香ばかりは名にも闇にも隠れないで)直ぐそれと氣がつくまでに著しく匂うてゐるなア。(さても梅が香といふものはきついかなばしいものではあるわ)

語句のみの洒落で面白くない。歌屑といはれた「絲による」の歌よりも拙い作だと思ふ。

月夜に梅の花を折りてと人のいひければをるとよめる

み つ ね

四〇 月夜にはそれとも見えす梅の花かをたづねてぞしるべかりける

詞書 元「月夜に、梅花折りて人のいひけるに」

二句 相・清「みれともみえず」

五句 元・筋「折るべかりける」

六帖六 梅 同。

月夜 月のあかるい夜。それ。下の三の句で梅の花であることがわかる。どれが梅の花であるか。見えす。月の色と白梅の色とがよく似てあるので區別がつかない。梅の花。下に「ば」と入れて四五の句に連なると共に一二の句を補つて歌はうとする主體が「梅の花」であるといふことを示したもので、そして梅花月色の如しといふ一首の趣向から見れば、白梅の花であることがわかる。誇張法によつたもの。かゝるたづねてぞ。たづねるといふと方々捜してあるくやうにあるが、こゝは唯香を目あてにしてといふ程の心しるべかりける。これは詞から見ては元永本の「折るべかりける」の方が優れてゐる。假に流布本のまゝをとれば「しるべかりける」の約で、それと知ることが出来るさうだなアとの意。

月のあかるい夜には月色白梅の色に紛れて、どれが梅やら月光やら區別がつかかねるが。(幸なことには、梅は薫りが高いから)その香をとめて見別けがつかますから、お求めに應じて折つて参りました。(又は、これから折つて参りました)

彼の昔公幼時の詩にも

月夜見梅花

月耀如晴雪。梅花似照星。可憐金鏡轉。庭上玉房馨。

とある。これは梅を星に譬へて名高いもの、又唐の詩人張若虛が、「春江花月夜」と題する七言古詩には「月は花林を照らして皆霰に似たり」とあつて、これは月夜の梅を霰の粒に譬へて居る。序註にある「梅の花それとも見えす」の歌は白梅を雪に譬へたものだが、月の色が白梅のやうだと着想して歌語にこなし得た早いものとしてはこの詠などもその一

つであらう。上の句この斬新なる譬喩を用ひ、下の句はこれまでの梅の歌と同様薫香馥郁を歌ひ、それによつて一首の内容を豊富にして居る上に、「御下命によつて早速折つて参りました」といふ快諾の意味は言外に聞えて、正しく即興の秀逸である。但相手を高貴の人と想像するのはどんなものか「梅の花を折りて」の「折りて」は「折りてよ」で「よ」は稍やさしく希望と命令との中間程度で人に物事を委嘱する意の助辭である。下の「人のいひければ」も常體で特に尊敬の意はないのだから、これは隣人若しくは親しき人位にとつた方がよくはないか。躬恒の地位は大して高くもないし、この頃の家作、大臣階級で一町四方、國司受領はその四分の一といふのが普通の屋敷取だから、國司以下の前甲斐のさうくわんたる躬恒の邸宅の庭といふのはさほどではなからうが、それを「香をたづねて」といつたのは、この頃普通の誇張と見ればよろしからう。さてこそ高貴の方の御屋敷でさる命を受けたものだらうなどとらぬが宜い。

春の夜むめのはなをよめる

四一 春のよのやみはあやなし梅の花色こそ見えねかやはかくるゝ

詞書 清「はるのよのむめの……」

元「はるの夜・梅花を」

〔春の夜〕は歌つた場合となるが「春の夜の」は題詠となる。

六帖六 梅・新撰・金 同

〔やみ〕こゝはその闇を擬人したもの。あやなし「文無し」と書いて織物の文目の見分けのつかぬことから轉じて、物の條理の立たぬこと、即ち譯のわからぬものだの意。「益なし・詮なし・あひなし」の舊註は採らず。梅の花 下に「といふものは」と補ふ。色こそ見えね「色」は次の「香」と對照的においたもの、色こそは汝「闇」の爲めに見えなくならうが、かやはかくるゝ、反語の

句 香が闇にかくれようか、決して隠れるものではない。

〔春の夜の闇はなんとわけのわからぬ者だなア、（折角梅を見ようと思ふのに、さも大事さうに黒幕で包んで、見せないが）成程梅の花の色は隠しおほせもしようが、アノ闇にもしるき香をまで隠すことが出来ようか、いくら隠さうたつても到底隠れることではないのに……〕

〔頭隠して尻隠さず〕といった風の子供の隠れん坊見たいな闇だと嘲けたのが字面の意味で裏面には、作者の夜梅に寄する愛着と、梅が香の高いことを表さうといふ作意である。こんな風に春の夜闇を嘲る人は梅花に對して決して無關心でないことがわかる。否闇こそは無關心で、自分の本能のまゝに黒幕をおしひろげて居るに過ぎないのだが、それがわざとらしく、梅を蔽ひ顔に見えるといふのは、それだけ作者が梅に惹きつけられるもののあることを示して面白。そして同じ作者が、拾遺一春の一六に

齋院の御屏風に

香をとめて誰折らざらむ梅の花あやなし霞立ちな隠しそ

と詠んだのは闇が霞に變つて、この歌の餘情までも字面に出したものである。

はつせにまうづるごとにやどりける人の家に久しくやどらで、ほとへて後にいたれりければ、かの家のあ
るじ、かくさだかになんやどりはあるといひ出して侍ければ、そこにたてりける梅の花を折りてよめる

つ ら ゆ き

四二 人はいさ心もしらず故郷は花ぞむかしの香に匂ひける

詞書 貫之集八「昔はせに詣つとて宿りしたりし人の久しうよらでいきたりければ、まさかになむ人の家はあると云ひ出した

春 上 四一・四二

三四七

陽

りしかばそこなりし梅の花を折りてゐるとて元「初瀬にまうづること、れい^雨やどりける、人の家に、ひきしうやどらで、程へてまかりたるに、かくさだかになむやどはあると、あるじいひ出だしければそこなる梅を折りて。」

作者 餘材抄貼紙「つらゆき」とあり。

百の三五 同。

【註】はつせ 初瀬・長谷・泊瀬など書く。大和磯城郡初瀬町泊瀬にある初瀬寺のこと。草創については異説があるが、大和志料(下巻七四—八四)轉載の東京音羽護國寺所藏の「諸寺縁起集」によると天武天皇——白鳳二年に弘福寺の僧道明の建立に係り今の一面堂の四方の谷の岡の上に三重塔・石室佛像等を建立安置したのが始まりで之を舊長谷寺といつたが、こゝへ皆が登り出したのは新長谷寺が主で、それはその後聖武天皇神龜四年徳道上人更に谷の東の岡の上に堂舎を建てて十一面觀世音菩薩を安置し、寺域三萬坪、僧坊・學寮・子院等本堂の左右に列立し、參拜の善男・善女非常の多數に上つた、枕草子に清女が參拜の記事あり、源氏に玉鬘の君が、こゝに參籠中右近に邂逅する記事があり、更科日記にも著者孝標女が思ひ立つて單獨に參詣した記事がある。この寺その後、天慶・承久・明應等の失火に炎上し今日では往時の偉觀はないが、流石に一巨刹たるの面影は存して居て、大和巡りをするものは誰も一度は歩を向けつゝある。近來殊に牡丹の名所として名高い。さて貫之はこの長谷觀音の申し見であつたともいふが、それは俗説で、唯當時一般の人々のする世間並の信仰であつたらう。やどりける人の家 誰とも分らない。先づは貫之の親しい知人と見よう。京から長谷は日がへりには無理だから二日掛で出かけるのが普通で、どうしても中宿が入る。その中宿の主人が貫之の知人であつたとれば可い。宿屋營業の亭主ではない。久しくやどらで 長谷に參つても、その家では泊らないで長らく素通りして。ほどへて 程經て大分たつてから、かくさだかになん云々。このやうにあなたの定宿は今も懸としてあつて、いつもく御來泊を待つてゐるのですとの意、これは戯談の皮肉でつまり今日ならば「マアお珍しい。よくもこゝへいらつしやる道がお分りでしたれ」と笑ひながら云ふ處、そこに云々 すると貫之が氣轉をきかせて、そこにある梅の花を手折り之にかこつけて又皮肉な挨拶をしたとの意。人は 君はと同じ、さう仰つしやる御身は。いさ 後に否定を伴ふ特性副詞で、こゝも、人はいさ心も知らずと呼應してゐる。口語さあどうで

すかッ、といつた氣味、これは必ず澄んで「いさ」とよむべきだが、よくかるとりなどに「人はいさ」と濁る人があるのはよくない。「いさ」は誘ふ意、「いさ」は否なふ意で別である。心もしらす 果してお言葉通りのお心であるかどうかとも知りませぬ。「しらす」は「しられず」と可能の「れ」を補つて解いてもよろしからうが、上に「我は」といふ總主語を省いたものと見れば「我は御身の如何なるかをいさしらす」でその儘で聞える。故郷 年經る里の意で舊都や以前の名所舊蹟や馴染の土地や生れ故郷をいふ。こゝはその馴染の土地といふ事。花ぞ 梅の花。こゝは、「ぞ」が強意の指定助辭であるから「人はわからぬが、花は信用出来る」と對照的な口調になる。むかし^昔の香に匂ひける 昔ながらの香に咲き匂つて、昔に變らず自分を歓迎してくれてゐるなあ。

【註】長谷參りをする毎に中宿をしてゐるた知るべの家に、長らく泊らないで大分たつてから行つて見ると、先方の主人が「こゝやうにあなたのお宿はちやんとしてお待ちしてゐるのに、あなたは一體なぜにお越しがなかつたのですか」といつたもんだから、丁度そこに梅が咲いてゐた、その枝を折つて次の歌で以て返事をした。

成程こゝは我が故郷にちがひはありません。處でさう仰つしやるあなたの御心はどうだかわかりませんが、この花こそは以前に變らず妙の色香に私を慰めてくれます。(だからわたしは御主人のあなたよりはこの花を信頼しようと思ひます)

【註】皮肉に酬いるに皮肉を以てし人と花と心と香と、對照を鮮明にして甲を「心もいさしらす」と否定し、花を「昔の香に匂ひ」と肯定し善謔一番直に相手をまるめた好詠、貫之は推蔽歌人として定評ある人だが本集にあるものこの種の即興の方却て優れたものがある。(八二四の如きも)こゝの詞書の解或註には「主人もさる者直に會はず先づ人をして言はしめるのに「斯く定かになむ云々」とあるが、常識上さうはとられない。主人は取るものも取敢ずいそ／＼して門に迎へ「オヤこれは珍客様の御入來——」と謂つた調子で笑ひながら厭味をいつたので、貫之も亦微笑しながらこの歌を以て返したものだと思ふ。隨て主人のこれに對する返し

花だにも同じ心に咲くものを植ゑたる人の心知らなむ

(花でさへもその通り歓迎しますものを、ましてその花を植ゑた私にどれ程の好意があるかはお察し願ひたいものですなア)も、貫之の歌にへこまされて前の擬勢に似もやらで、氣息奄々として哀を乞うたものとは解せられない。寧ろ貫之の歌に哄笑一番して「ヤア、こりやなく」振つてる——では某も一首返しませう」位なところで詠み返したものであらう機智即妙亦貫之の知友たるにふさはしいものと謂つてよからう。

水のほとりに梅の花のさけりけるをよめる

伊 勢

四三 春ごとにながるゝ川を花と見て折られぬ水に袖やぬれなん

詞書 「元、水のほとりに、梅の花のさけるをよめる」

頼 「梅の花の」を「梅の花」

清 「……よめる」

抄 「……梅の花。さけり……」

伊勢集 京極の院に亭子のみかどおほしまして、花のえむをさせたまひ、まゐれとおほせられしにまゐりて池に花などの散たるを見て

二句 一説「ながるゝかげ」
五句 元「袖ぞぬれける」

新撰 同。

春ごとに、この後、来る春毎に。ながるゝ川 川といつても谿流や大河ではない。家集の詞書から察して、池から引水してある御溝様の流れであらう。はたと見て 御溝に映る梅の花影を木當の花と見誤つて、折られぬ水 美しい句である。この一首を特徴

づけてなる。水に映つた花影であることも、之を見めてでは手折らうとせずには居られないといふ愛惜もこの一句にこもつてなる。袖やぬれなん 誇張法で、花の影を實物の花かと思つて手折らうとして徒らに袖を濡らすことであらう。之を元永木のやうにしてはその愚を敢てしたことになつて詩味は一變して間抜けになつてしまふから、こゝは流布本通りの方が宜しい。

偕も美事な花影よ、この分では、今後毎春水の流れを梅かと思つてつひ手折らうと思つて手を出して、むだに袂を濡らすことになりませう。

句の順序二二三とするか二三二とすれば一首の意味は明瞭である。この儘だとすると「春ごとに流るゝ川」ときると、この川は春に限つて流れて他の三季は流れないといつた風の混雑感が起きてたとひこの感じが最後まで讀んで打消されるにしても表現を弱めるやうになる。契沖の解に

梅を愛するまゝに、ながるゝ水に影の移れるを、たゞことしのみならず、猶行末の春ごとに、花とまかひてをらんとして、はかなく袖や濡れなんとよめる歎。あるひは又春ことには、今までの過こし方をいひて猶こりすまに、此春もならぬ影故に袖やぬれなんとよめる歎

とあるが、「なむ」とある以上これは唯未來の語で、既往まではかゝるまい。今年始めてこの梅を見てそれを面白くめでようといふのがこの歌の動機で、「これだけ美事な花だから今後も……」と来る春毎に風流な豫想をたてたものであらう。支那で梅を愛して有名な林和靖の句に「疎影横斜水清淺」とあつて、如何様水邊の梅花は一段と趣の優れたものがあるやうだが、この歌は「折られぬ水」の造語によつてその花影を美しく稱へることで影の主たる花をもほめ得た佳詠である。

四四 年をへて花のかぐみとなる水はちりかゝるをや曇といふらむ

【考】 詞書 伊勢集「京極院に亭子の帝おはしまして花の宴をせさせ給ひ参れと仰せられしに参りて池に花など散りたるを見て」
三句 古典本「散り(塵)掛かるをや」

六帖六 花・卅六 同。
【釋】 年をへて 多くの年を経過して「こゝらの年を明けくれば春としなければ」といふ散文に相當する。花の鏡 花の水鏡 花が水に映るところから、水は花の鏡になるといふ。ちりかゝる 花の散りかゝること、鏡に塵のかゝることを秀句にしたもの曇といふらむ。それをさして曇るといふのであらう。

【釋】 永年の間この梅の水鏡になつてゐる流れはとこしへに澄んで清い川だが、鏡に塵かゝるのでなく、花が散りかゝるのを「曇る」とでもいふのであらう。

【評】 「ちりかゝる」の秀句が自然にして輕妙、餘力「曇る」にまで及んで一首の詩興の喫子をなして居る。併し主たる想はその水の清澄明徹を稱へようといふにあつてこの水こそは幾代々を花の鏡となることであらう。鏡ならば塵がかれば曇りもしようが、この水鏡にはさうした塵もかゝりさうもないが美しい花の散り(塵)がかゝる時を曇るとでもいふのであらうといふので、初句は鏡の曇にのみ關係があるのではなく、こは已往多くの年を経てといふのである。歌境は前と同一で、前には花をめで此には水をめでたものだが、その水も花ゆるめでたいといふのだから結局は梅の花の歌である。唯前のに比べては輕く淺い。

家に有ける梅の花のちりけるをよめる

貫之

四五 くとあくともめかれぬ物を梅の花いつの人まにうつろひぬらん

【考】 詞書 元、家に侍りける梅花の散りけるを。

五句 清・元・筋・相「移ろひにけむ」

六帖六・梅・貫之集 同。

【釋】 くとあくとも 日が暮れるとは、夜があげるとは、で朝々暮々、朝な夕なと同じ意味だが、暮れば夜の始め、明くは晝の始めその始めを以て全部を兼ねさせて終夜終日、夜通し日通し、二六時中、といったもの、「日れもす夜もすから」といつても可い。併しこゝを「朝夕に」などしては重みがない、二個の「と」を並べて字餘りにしたので音調の上で、已に作者の梅花愛を示して居るのである。めかれぬ 目離れぬ、見離さない。「離れる」は本形「離る」に接頭語「さ」をつけて「さかる」といひ、之を動詞の語尾につけて「遠ざかる」「天ざかる」などいふ。離れること、絶えること、男女の愛情の冷えること、同縁絶えることなどに使ふものを、のにそれにと強きつたもの。梅の花 我宿のこの梅の花はとして一の句に列すべきものを倒置句にしたもの、いつ 下の「らむ」と相俟つて梅の散つたのはいつのことか怪訝に堪へないと様口吻。人ま ま(問)は上の物の無いときれをいふ「人の居ない間」といふのだが、こゝは作者自身のゐない隙間をいふ。風間・雲間など同じ用法。うつろひ は「うつり」の延音、移りは變ること、そこでこゝは「變ひ」としたり「裏ひ」としたりしてある。花の色の褪せることも、片の凋むことも、花の皆から散ることもいふ。こゝは詞書に「ちりける」とあるから落花したことをいふ。

【釋】 我宿のこの梅の花は日がくれるとは目をとめ、夜が明けるとは氣をつけ一寸の間も目離したことはないのに、一體いつ自分のうつかりしてゐる隙間に散つたことであらう。

【釋】 初二句は詞書に照して我庭の梅ならでは云ひ得べくもあらぬことで、しつくり願意に嵌まつてゐてよろしい。この歌の技巧は「いつの人間に」といふ驚きを不自然な誇張と感ぜしめないやうに、初二句に充分力の入つた句で伏線を張つた點にある。餘情は落花に對する作者愛惜の姿を想はせる。

けれども尙貫之のこの歌の口をすつと深く考へて見ると、「風物推移の不可抗力」に對する咨嗟がある。「これ程にしても散るものは止めることは出来ないなあ」と様に……この作者が、秋の部二六二に紅葉を詠んだのも同じ心の表れと想はれる。かうした點に於ては、次の二首ともよく似た趣がある。

天地を開く手力梅やししくも抛ちがたし頬の上の皺 典謝野鐵幹

若き日を去らんとすなり青は草赤は少女の頬放れ行く 尾上 柴舟

猶又新古今集二春下一〇八に同じ貫之の

我宿のものなりながら櫻花散るをば得こそとゞめざりけれ

は寧ろこの歌の酵母であらう。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

よみびとしらす

四六 梅が香を袖にうつしてとゞめてば春はすぐともかたみならまし

詞書 元「寛平御時に后宮の歌合に」

初句 相・清「梅のかを」

二句 六帖五「袖にこきいれて」

三句 元、六帖「とめたらば」

五句 新萬上「かたみとおもはむ 片身砥將思」

寛平歌合左一八 同。

袖にうつして 當時の薫物の、風尙からの聯想で、梅の香を袖に浸ませてといふ。とゞめてば 留めておいたならば、最後の

「ば」を「は」としては不可。春はすぐとも「花は散るとも」といふ處を大きく「春」と歌つたもので、修辭の緻密なもの、かたみ形見即ち記念、ならまし の「まし」は「む」と同意だが、大抵は實現すべくもあらぬことを假想して「……だらうに、さうも出来ないので遺憾だといふ氣持を表す。

梅の香を袖にうつして留めておいたならばたとひ春が暮れて、花が散つてしまつても、かたみとして残ることであらうに、(さうも出来ないで、徒に凋落することはかへすくも名残がなされてならぬ)

春寒已に去つて満山の櫻花已に紅靄の模糊を呈しようとする時、南枝早くも瓣褪せて梢頭をさうに寂しさを感じるの時、王朝の歌人は斯くて惜春と惜花の賦に遅々たる春光を暮らしたと想はれ、その襟懷さすがに優しいものがあるが、現代人から見ではさほどに感味を覺えない。

素性法師

四七 ちるとみてあるべきものを梅の花うたて匂ひの袖にとまれる

寛平歌合左二・新萬上・素性集・六帖六・梅 同。

散るとみて 唯一通り、アア梅が散るなと軽く見て。あるべきものを 居ればよいものを。梅の花 この梅の花はとし 一句に廻すべきもの。うたて うた(轉)の轉じたものでこゝでは「生憎にも」といふこと。この語は書物によつて多少異なつた解がしてある。あまり過ぎるといふこと也。いやに、ひよんなことや、憂たて、あやしう、戀な具合に、別様、奇偉、よのつねならぬ」など。

(我庵のこの梅の花は、今散り方になつてまことに惜しいは惜しいがそれも唯一通りあゝ散つてゐるなと軽く見て居れば宜いものを、生憎その香がしる袖に留まつて、勉めて落花のことを忘れようとしてゐるこの自分に又しても思ひ出